

tsuru mi yama

鶴見山古墳 2

ふくおかけん や め し おおあざとよぶく

福岡県八女市大字豊福所在古墳の確認調査報告書

八女市文化財調査報告書 第72集

2005

八女市教育委員会

序

八女市の北部には、広大な筑紫平野を南北に二分するかのごとく、東西方向に走る総延長十数kmに及ぶ低い丘陵「八女丘陵」があります。この丘陵は地質学的には八女台地と呼ばれ、また地元の方々には「長峰丘陵」として古くから親しまれています。

現在、この八女丘陵上には大小300基以上の古墳が存在すると言われており、九州の、そして郷土の雄である「筑紫君 磐井」の墳墓である岩戸山古墳を中心に、12基の前方後円墳を含む福岡県下有数の大古墳群である「八女古墳群」を形成しております。

しかし、国や県の指定を受け大切に保護されている古墳はごく一部の限られたもののみであり、大半は指定を受ける事なく、山林や畑地としてかろうじて残されている状況です。

近年において各種開発の波は市内西部地区・中部地区のみならず、丘陵地のある東北部にも押し寄せており、現在ではこれら未指定の古墳を今のまま未来の人々に託す事が非常に困難な状況になっております。

貴重な文化財を後世の人々に残すため、現在八女市教育委員会では重要な遺跡の内容及び範囲等を確認する調査事業を積極的に行っております。今回、確認調査を行った鶴見山古墳は既に古くから知られていた古墳ではありましたが、国・県の指定を受けていない未指定古墳でもありました。これまで岩戸山古墳の陰に隠れがちで、あまり目立つ事のない古墳となっていました。周辺の状況の変化や八女古墳群の再評価の気運の盛り上がりもあり、将来の史跡指定又は史跡整備を念頭に、今回、形状や規模を把握する為の必要最小限の発掘調査を行いました。詳細な経過や調査結果の内容につきましては本文の項に譲りますが、予想を大きく上回る成果がありました。その成果を一冊の冊子としてまとめるにあたり、本報告書が当該古墳、そして八女古墳群を含めた郷土の文化財に対する愛護の心を育む一助となれば幸甚に存じます。

最後になりましたが、平成15年から翌16年の2年間にわたり実施しました本調査に御協力いただいた多くの地権者の方々をはじめ、地元町内会や住民の皆様には並々ならぬ御理解と心からの応援を戴きました。深く御礼を申し上げますとともに、今後の文化財行政につきましてこれまで以上の温かいご声援を賜りますよう、重ねてお願い申し上げます。

平成17年3月31日

八女市教育委員会

教育長 中島 清志

例 言

- 1 本書は八女市教育委員会が、国・県の補助を受けて実施した重要遺跡確認調査「鶴見山古墳」(八女市大字豊福字鶴見山)の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は八女市教育委員会が主体となり実施した。また、発掘現場における調査は平成15年度を主体とし、平成16年度において一部補足調査を行った。整理作業及び報告書の作成については平成16年度に一括して行った。
- 3 墳丘の測量は、墳丘長軸方向に任意の仮主軸線を設定した後、仮軸線に対し直角及び任意の斜角線上に測量用基準杭を設置。これを平板測量・トレンチ設定の基準とした。
- 4 本書に使用した測量図の作成は参加者で分担して行った。各種測量図の浄書、及び、出土遺物の実測図作成・浄書は岩戸山歴史資料館において行い、石室実測図の浄書は大塚恵治が行った。
- 5 本書に使用した写真は、空中写真を有限会社 空中写真企画に委託した。墳丘・主体部・トレンチ部の撮影については現地で、出土遺物の撮影は岩戸山歴史資料館において大塚恵治が行った。
- 6 本書使用の標高は海拔高であり、方位は全て磁北である。本地域における真北との偏差は $6^{\circ}10'$ である。
- 7 本書の執筆は、第V章の1については佐賀大学の佐田茂教授より、同章の2については黒木高校の木戸道男教諭より、同章の3については福岡市埋蔵文化財センターの比佐陽一郎氏の玉稿を賜った。前述以外については大塚恵治が執筆、編集は大塚恵治が行った。
- 8 本書に関する調査記録、及び、出土遺物は現在八女市の岩戸山歴史資料館において保管・収蔵している。

本文目次

I	調査の経過	1
II	遺跡の立地と歴史的環境	4
III	調査の内容	8
1	後円部の調査	8
2	前方部の調査	10
3	主体部の調査	16
IV	出土遺物	17
V	自然科学的調査	30
1	玄室左側壁の溝状刻み「刻線」について	30
2	八女市鶴見山古墳の石室をつくる石材の産地	32
3	鶴見山古墳出土金属器の保存科学的事前調査について	40
VI	まとめ	49

挿図目次

第 1 図	八女古墳群と周辺の主要古墳〔1/50, 000〕
第 2 図	鶴見山古墳 墳丘測量図〔1/400〕
第 3 図	1 トレンチ 平面実測図〔1/60〕
第 4 図	1 トレンチ 西壁土層実測図〔1/60〕
第 5 図	2 トレンチ a 平面実測図〔1/60〕
第 6 図	2 トレンチ a 北壁土層実測図〔1/60〕
第 7 図	2 トレンチ b 平面実測図〔1/60〕
第 8 図	2 トレンチ b 南壁土層実測図〔1/60〕
第 9 図	3 トレンチ 平面実測図〔1/60〕
第 10 図	4 トレンチ 東壁土層実測図〔1/80〕
第 11 図	4 トレンチ 平面実測図〔1/80〕
第 12 図	5 トレンチ 平面実測図〔1/60〕
第 13 図	5 トレンチ 東壁土層実測図〔1/60〕
第 14 図	5 トレンチ 西壁土層実測図〔1/60〕
第 15 図	5 トレンチ 北壁土層実測図〔1/60〕
第 16 図	6 トレンチ 平面実測図〔1/80〕
第 17 図	6 トレンチ 東壁土層実測図〔1/80〕
第 18 図	7 トレンチ 平面実測図〔1/60〕
第 19 図	8 トレンチ a 平面実測図〔1/60〕
第 20 図	8 トレンチ b 平面実測図〔1/60〕
第 21 図	8 トレンチ c 平面実測図〔1/60〕
第 22 図	9 トレンチ 平面実測図〔1/60〕

- 第23図 9トレンチ 北壁土層実測図〔1／60〕
第24図 10トレンチ 平面実測図〔1／60〕
第25図 10トレンチ 北壁土層実測図〔1／60〕
第26図 石室実測図〔1／50〕
第27図 出土遺物実測図〔1／6〕
第28図 出土遺物実測図〔1／6〕
第29図 出土遺物実測図〔1／6〕
第30図 出土遺物実測図〔1／6〕
第31図 出土遺物実測図〔1／6〕
第32図 出土遺物実測図〔1／4〕
第33図 出土遺物実測図〔1／4〕
第34図 出土遺物実測図〔1／4〕
第35図 出土遺物実測図〔1／4〕
第36図 トレンチ内出土凝灰岩破片実測図〔1／4〕
第37図 鶴見山古墳 石室及び墳丘断面図〔1／400〕

図 版 目 次

- PL 1～PL 5 鶴見山古墳 現地調査状況
PL 6～PL 7 鶴見山古墳 出土遺物

I 鶴見山古墳の調査経過

1 調査の経過

1) 1985年の発掘調査

鶴見山古墳の存在はすでに早くから知られており、時期的に最も新しく全長100m以上にも及ぶ大型の前方後円墳である事、そして八女古墳群中最も東に位置する地域首長墓たる前方後円墳である事などから、かねてから注目されてきた。しかし、昭和40年代頃から古墳周辺の果樹園造成が急速に進み、鶴見山古墳の前方部北側の一部がこの頃に開削されている。

昭和60年2月、土地の管理者により墳丘の一部が削平され墳形の変化が進んできた事から、八女市教育委員会と福岡県教育庁南筑後教育事務所、及び、福岡県教育委員会文化財保護課で協議を行い、昭和60年度の文化庁補助事業として史跡指定を念頭においた重要遺跡確認調査事業として採択される事となった。

発掘調査は昭和60年5月13日から同年6月7日まで行われ、古墳全体の規模の把握に力点が置かれた。後円部側の外縁把握の為1・2Tを設定。前方部側の外縁及び前方部端部把握の為3～6Tが設定された。

しかしながら、当時は古墳の公有地化は始まっておらず、トレンチの設定には土地管理者の御理解が必要不可欠であった為、詳細な墳丘規模・形態については後年の調査を待たざるを得なかった。

2) 2003年～2004年の発掘調査

八女市の中・北東部に位置する豊福地区一帯は、八女古墳群中で最も前方後円墳の密集度が高い地域として、かねてから注目を集めていた。同地区 最大規模の鶴見山古墳をはじめとして、大小5基の前方後円墳が僅か500m四方の中に点在している。これまでに鶴見山古墳（註1）、釘崎1号古墳（註2）、釘崎2号古墳（註3）、釘崎3号古墳（註4）の発掘調査が行われているが、主に範囲内容確認調査であり、各古墳における詳細な情報については未だ未確認の部分が多い。加えて、残念ながら釘崎3号古墳は昭和45年（1970年）の土取り工事の際、十分な調査が行われないうちに消滅してしまっている。

前述した通り、今回報告を行う鶴見山古墳は豊福地区最大の前方後円墳でありながら、これまで国・県の史跡指定はおろか八女市指定史跡すら受けていない、全くの未指定古墳であった。しかしながら、近年になり古墳から出土する埴輪の研究が進み、単一系統の古墳群として認識されがちであった八女古墳群に対し、複数系統が存在する古墳群としてにわかに注目を集めるようになった。

このような学術的重要性を考慮し、八女市教育委員会では将来、国指定史跡「八女古墳群」への追加指定を計画。これに先立ち昭和60年に行われている調査成果に加え、更に詳細な墳丘の規模・形状、及び内部主体の確認を行う事となった。事業は文化庁主管の国宝重要文化財等保存整備事業である市内遺跡発掘調査等事業の範囲内容確認調査とし、平成15年度から同16年度にかけ発掘調査及び整理調査を目的として事業の申請を行った。

事業の実施にあたり、調査内容の把握に万全を期す為、八女市文化財専門委員会の考古部門より学識経験者に集っていただき「鶴見山古墳発掘調査指導委員会」を組織した。調査は平成15年5月より墳丘の測量調査及び伐採作業よ



第2回 鶴見山古墳発掘調査指導委員会 現地視察

り開始した。

本指導委員会は、第1回委員会を平成15年10月15日に八女市役所104会議室において開催。あわせて現地視察も行い、掘削トレンチの設定位置や拡張の必要性、調査中の石室の保護措置について御指導を賜った。

第2回委員会も同年12月3日に八女市役所104会議室において開催。これまでの調査結果の報告を行い、今後の追加トレンチにおける設定位置やその目的、石室の埋め戻し方法についての御指導を賜った。この折に行った現地視察では委員より南側くびれ部付近の造り出しの存在について意見が交わされ、重要確認事項として注視するよう指導を受けた。

2 調査体制

〔調査指導〕

鶴見山古墳発掘調査指導委員会

委 員 佐田 茂 (佐賀大学教授)

委 員 鶴久 嗣郎 (八女市文化財専門委員会委員)

オブザーバー 飛野 博文 (福岡県教育委員会文化財保護課参事補佐)

〔調査主体〕

八女市教育委員会

【平成15年度】

教 育 長	中島 清志
生涯学習課長	諸富 和生
同 参事	今村 求
同課長補佐	鹿野 耕一
同参事補佐	佐野 正義
同参事補佐	飯田せつ子
文化財係長	赤崎 敏男
同 係員	中川寿賀子
同 係員	大塚 恵治 (発掘調査担当)
同 嘱託	安武 寛文
同 臨時	中園みどり (平成15年4月から平成15年11月まで)

【平成16年度】

教 育 長	中島 清志
生涯学習課長	諸富 和生
同課長補佐	飯田せつ子
同参事補佐	田中 博文
同参事補佐	佐野 正義
文化財係長	赤崎 敏男
同 係員	中川寿賀子
同 係員	大塚 恵治 (発掘・整理調査担当)
同 嘱託	檀 克彦 (平成16年6月から平成17年1月まで)

調査作業（五十音順）

石井 勇、牛島茂雄、境 秀代、椎葉和美、島田マサヨ、鶴賀久博、徳永節子、橋村照子、松尾雅子、
松崎 瞳、南 健太郎、室園弘子

整理作業（五十音順）

茅島トシ子、仁田原美幸

なお、発掘調査にあたり、前方部側の地権者である樋口敏行様、古墳南側隣接地の地権者である近藤清司様をはじめとし、町内会長の山田輝男様、鶴見山古墳周辺の地権者の方々、そして地元町内・地域の住民の方々には多大なるご配慮とご理解を賜り、また古墳見学の際には古墳にまつわる故事や体験をお話いただき、本調査に対し暖かいご声援を戴きました。紙面上で恐縮とは存じますが、御礼申し上げます。

また、以下の方々や諸機関には並々ならぬ御指導・御教示・御協力をお受けしました。末筆ながら記して感謝申し上げます。

（順不同、敬称略）

甲元眞之（熊本大学教授）、杉井 健（熊本大学助教授）、朴 天秀（慶北大学副教授）、坂井秀弥（文化庁主任文化財調査官）、清野孝之（文化庁文部科学技官）、池辺元明、伊崎俊秋、小池史哲、岸本 圭、久野隆志（福岡県教育委員会）、石山 勲（九州歴史資料館）、西 健一郎（九州大学）、小川泰樹（甘木歴史資料館）、齋部麻矢（南筑後教育事務所）、佐々木四十臣（福岡県文化財保護指導委員）、吉留秀敏、藏富士 寛（福岡市教育委員会）、神保公久（久留米市教育委員会）、長谷川清之（桂川町教育委員会）、池ノ上 宏（福津市教育委員会）、永見秀徳、小林勇作、上村英士、立石真二（筑後市教育委員会）、中村光男（広川町文化財専門委員長）、尾崎源太郎（広川町教育委員会）、井上義也（春日市教育委員会）、宮元香織（奈良女子大学院）、檀 佳克（熊本大学 埋蔵文化財調査室）

福岡市埋蔵文化財センターの比佐陽一郎氏には出土品の保存や啓発活動に関し多大な御尽力を賜り、様々な分野での御指導・御援助をいただきました。心より感謝申し上げます。

（註1）赤崎敏男 1986 「鶴見山古墳」八女市文化財調査報告書第14集

（註2）大塚恵治 2003 「釘崎1号古墳・丸山古墳」八女市文化財調査報告書第69集

（註3）赤崎敏男・中川寿賀子 1992 「釘崎古墳群」八女市文化財調査報告書第24集

（註4）八女市史（上巻） 第2編「原始」

Ⅱ 遺跡の立地と歴史的環境

【地理的環境】

八女市は福岡県の南部に位置し、西に筑後市、東に上陽町・黒木町、北に広川町、南に立花町・瀬高町と1市5町と境を接し、主に農業を基幹産業としている。その立地は、耳縄山地南緩斜面より西方に延びる八女台地（八女丘陵）と、福岡・熊本両県を区する筑肥山地により「コ」の字状に囲まれ、釈迦岳山地に源を発し、黒木盆地を経て平野部を西流する矢部川によって形成された扇状地上にある。

鶴見山古墳は八女市の北東部に位置する豊福地区にあり、先述した八女丘陵の東端付近に位置している。この近辺の丘陵部は北側直下を西流する広川の侵食作用で一部絶壁状となっており、八女丘陵で最も南北幅が狭くなり断面形は馬の背状にやや鋭角気味となっている。立地が丘陵頂部の為、東方を除く三方への眺望は非常に良好で、北方側では筑紫君一族と密接な関係が指摘されている浦山古墳や石櫃山古墳が所在する現在の久留米市上津町付近が肉眼で容易に視認出来、西方側では石人山古墳をはじめ岩戸山古墳、善蔵塚古墳などの八女古墳群上に所在する主要古墳の大部分を見渡す事が出来る。南西側に目を転じると、広大な田園風景の向こう側に僅かに有明の海を見る事が出来る。また、天候が良好であれば、双眼鏡を用いて遠く雲仙普賢岳を観察する事も可能である。

交通事情に目を移すと、善蔵塚古墳と鶴見山古墳の間に八女丘陵を南北方向に貫く県道・久留米立花線があるが、現在道路幅の拡幅工事が南側から進行している。従来でも久留米方面へ抜ける主要道路として利用されているが、拡幅後は更なる利用者の増加と地場産業の動脈として機能する事が予想され、交通需要と共に産業面での開発活性化がますます見込まれるものと思われる。

【歴史的環境】

鶴見山古墳は八女市大字豊福字鶴見山に所在する前方後円墳である。総数300基以上の古墳が内在していると言われる八女古墳群中においても岩戸山古墳、石人山古墳に次ぐ規模を誇っており、堂々たる威容は周囲の古墳群を圧倒している。

近年まで比較的明瞭な系列を成していると評価されていた八女古墳群の首長墓群であったが、最近の発掘調査の成果により、同時期・同規模の前方後円墳が一定地域に集中する等、やや修正せざるを得ない状況になって来ている。

ここでは、最近の調査事例を加味した上で、若干ではあるが八女古墳群の概要について略記したい。

地域的な隔たりはあるものの、八女丘陵上では4世紀後半頃から方形周溝墓や小円墳が造られるようになる。八女市内においては辻の西遺跡1・2次調査や立山山古墳群が挙げられ、比較的小さな墓域の中で造墓活動を行っている事がわかる。

首長墓系列の初現は広川町・筑後市に跨がる石人山古墳（墳丘長108m）である。羨道部が短く玄門間口が狭い初期横穴式石室を内部主体に持ち、石室内には妻入の家形石棺を古墳主軸線上に安置する。棺蓋の屋根外面及び妻側には直弧文が浮き彫りされている。石室や石棺の形態、出土した初期須恵器から古墳築造時期は5世紀前半～中頃に比定され、後円部と前方部の境には、被葬者を守護するかのよう前方部を向いた武装石人が樹立している。石人山古墳が筑紫君磐井の祖父の墓だとも言われている所以である。

5世紀後半になると、石人山古墳に後続する大型前方後円墳は八女古墳群中から見られなくなる。

しかし、これと軌を重ねるかのよう現久留米市南部地区の高良内・上津町周辺に当該期の大型前方後円墳が散見されるようになる。中でも浦山古墳（墳丘長約88m 帆立貝形）、石櫃山古墳（墳丘長100～115m 前方後円墳）は横穴式石室内部に横口式家形石棺を安置し、前者の石棺内部、及び、横口部には幾何学文様が線刻されるなど、石人山古墳に類似した特徴が見られる。

同じ頃、八女丘陵上では瑞王寺古墳（直径26m 円墳）、欠塚古墳（墳丘長45m 前方後円墳）、本6号墳（直径41m 円墳）、釘崎2号古墳（墳丘長47m 前方後円墳）、丸山古墳（墳丘長55m 前方後

円墳)等の古墳が次々と築造される。しかし、前方後円墳という墳丘形態を採用しながら、築造規模は中規模を逸脱しないところに、首長墓系列の一時的な不在を読み取る事が出来る。

6世紀前半～中頃になると、これまでとは全く異なる現象が丘陵上に現れる。八女古墳群の初現期より岩戸山古墳築造までの間、単一系列を基本スタイルとする感があったが、続く乗場、善蔵塚、鶴見山の3基の大型前方後円墳は殆ど時間的な空白を置く事なく築造されている。このような状況は、火君のお膝元である熊本県竜北町所在の野津古墳群にも見られ、八女古墳群との関連が興味深いところである。

6世紀後半になると八女丘陵上に直径10数m程の小円墳が爆発的に発生する。一般的に後期群集墳と呼ばれるものであるが、規模が小さい上に古墳を築造する墓域が厳格に定められている為、一定地域に密集し一大古墳群を形成する傾向にある。しかし、これら群集墳は直径30m規模の円墳を盟主墳として伴う例はあるが、釘崎古墳群を除けば前方後円墳を伴う古墳群は八女古墳群には見当たらなくなる。

この現象は、当該時期八女古墳群から大型の前方後円墳が姿を消してしまう事とあわせて、畿内政権内部における前方後円墳体制への陰りが、当該古墳群にも影響が現れている事を示している。

6世紀末～7世紀初頭に至ると前方後円墳は完全に姿を消し、替わって八女古墳群東端付近に位置する童男山古墳(県指定史跡)や岩戸山古墳の西方に位置する岩戸山4号古墳(下茶屋古墳)など、巨石を用いた大型の石室を内部主体に持つ円墳が築造されるようになる。しかし、7世紀初頭以後これらの古墳に後続する大型円墳は全く見当たらず、また、6世紀中頃～後半頃に築造され始めた後期群集墳もこれと歩調を合わせるかのように突如として姿を消すようになる。これらの現象を最後として、八女古墳群は名実ともにその終焉を迎える事となる。

[参考・引用文献]

- 赤崎敏男 1998 『辻の西遺跡(第2次調査)』八女市文化財調査報告書 第51集
佐田 茂・伊崎俊秋 1983 『立山山古墳群』八女市文化財調査報告書 第10集
渡辺正気・宮小路賀宏 1969 『石櫃山古墳』福岡県文化財調査報告書 第41集
斎藤 忠 1973 『日本装飾古墳の研究』
川述昭人 1984 『瑞王寺古墳』筑後市文化財調査報告書 第3集
佐田 茂 1993 『欠塚古墳』筑後市文化財調査報告書 第8集
八女市史(上巻) 第2編「原始」(本古墳群)
赤崎敏男・中川寿賀子 1992 『釘崎古墳群』八女市文化財調査報告書 第14集
大塚恵治 2003 『釘崎1号古墳・丸山古墳』八女市文化財調査報告書 第69集
真野和夫 1972 「乗場古墳の調査」『立山山窯跡群一八女古窯跡群調査報告4・総集編』
岩崎 光 1967 『八女・山門』(八女山門社会研究会)
赤崎敏男 1986 『鶴見山古墳』八女市文化財調査報告書第14集
今田治代 2000 「竜北町野津古墳群の消長とその意義」『継体大王と6世紀の九州』(熊本古墳研究会)
小田富士雄・真野和夫 1971 「童男山古墳」『管の谷窯跡群一八女古窯跡群調査報告』
赤崎敏男 1987 『岩戸山古墳群』八女市文化財調査報告書 第15集

Ⅲ 調査の内容

今回の調査は、現在未指定である鶴見山古墳の規模と形態を把握し、将来的には国指定史跡「八女古墳群」への追加指定を目的としている。この為発掘調査による基礎的データの収集は必要最小限に努め、極力古墳の現状を維持する必要があった。

調査はまず、詳細な現況測量図を作成することから始めた。本古墳は後円部の遺存状況はかろうじて旧況を想定出来るが、前方部は過去の開削や果樹園造成等により墳丘北側の大半を失い、南側は中位までの上部盛土を失っている。前方部本来の上部構造を留めるものとして、墳丘の主軸方向沿いに開削の名残りである幅30～50cmの土堀状の高まりが僅かに遺存しているが、本来の姿からは程遠いものである。この為、旧況の推定、及び、トレンチ設定位置の決定には測量図作成が必要不可欠であった。

測量用基準杭の初点は後円部の中央部に置いた。初点から前方部に向け基準杭を打ち、これを測量線として後円部より測量を開始した。測量開始とともに鬱蒼と草木が茂った前方部前面部分の伐採にも着手し、作業の円滑化をはかった。

後円部及び前方部南側の測量が一段落した時点で仮主軸線を設定。この縦軸に対し直交（直交点を以下A点）する横軸を設定し、これに沿う形で後円部に3箇所、南側くびれ部に1箇所、前方部南端部に1箇所、計5箇所のトレンチを設定し掘削調査を開始した。その後、トレンチ調査の状況を見極めながら既に盗掘を受け陥没している主体部の調査にも着手。内部状況の確認と石室の実測作業を行った。また、発掘調査が一応の節目を迎えつつあった平成15年12月に第2回発掘調査指導委員会を開催し、各委員より南側周溝の形状・幅、南側くびれ部の造出しの規模、前方部前面端の形状の把握の為トレンチでの追加調査を行う旨の指導を受け、平成16年度において継続調査を行った。

以下において、後円部、前方部、主体部の調査結果について報告を行う。

1 後円部の調査

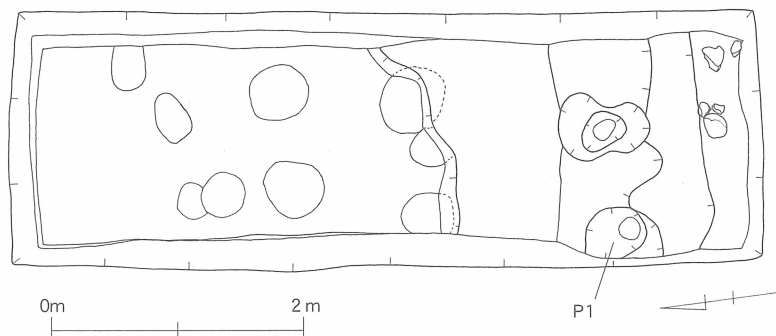
前回の調査で確認出来なかった後円部の墳丘及び周溝端部を明らかにする事を目的として1～3T（4箇所）を設定した。なお、掘削調査にあたり現状を極力維持する為、最小限のトレンチ設定とした。

各トレンチの調査結果については、以下のとおりである。

1 トレンチ〔1T〕（第3、4図）

1トレンチは後円部直交点であるA点から北方向に延ばした横軸線上に設定。長さ6.0m、幅2.0mの試掘坑であり、後円部北側の墳端と周溝の規模を確認し、併せて後円部から崩落した埴輪類を採取する事を目的とした。トレンチ北側は周溝内に位置しておりほぼフラットであったが、トレンチ南端部の現墳丘部との境付近では削平の名残りと考えられる若干の高まりが北東方向に広がりを見せていた。

墳丘外端部はA点から23.2mの位置で検出した。現トレンチのみでの周溝規模は不明であるが、昭和60年度の調査結果とあわせると、周溝規模は幅約9.8m、深さは現GLより1.3mを測り、断面形は横長逆台形を呈する。周溝底面の標高は64.1mである。埋土は総じて暗茶色系を主体とし、比較的粘性がある。埴輪片の出土は第6a層が最も多く、中小破片が周溝底面から約10cm上位付近に広く拡散している状況であった。比較的大きな埴輪片は第7層からの出土が



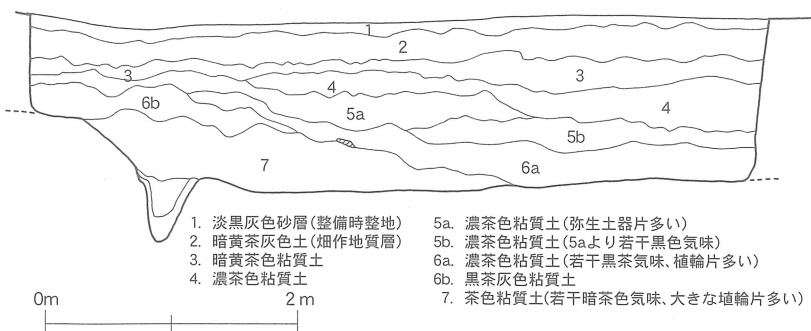
第3図 1トレンチ平面実測図〔1/60〕



第2図 鶴見山古墳 墳丘測量図〔1／400〕

最も多い事や、本層及び6a層下に埋土の堆積が見られない事から、墳丘構築後かなり短期間の内に後円部北側の盛土が一部崩落している事を示唆している。墳丘上端から下端部にかけての斜面上に芯心間85cmを測るピットを2箇所検出した。P-1から円筒埴輪片が出土していた事から、当初墳丘外端を区画する埴輪列の痕跡であると考えていたが、後述する2Tの結果から古墳築造後に掘削されたピットであると判断した。トレンチ南端部で検出したテラスに接地する形で大小5個の石材が出土しているが、葺石であるか転石であるかの判断材料はなかった。周溝床面で多数のピットを検出したが、未掘でもあり時期等の詳細は確認していない。

LH=65.700m



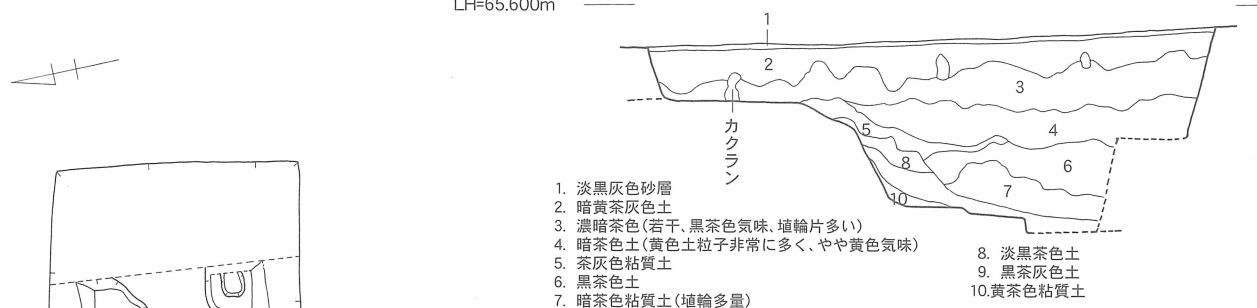
第4図 1トレンチ 西壁土層実測図〔1/60〕

2トレンチ〔2Ta、2Tb〕 (第5、6、7、8図 PL3)

2トレンチは後円部直交点であるA点から東方向の縦軸線上に2Ta、2Tbの2箇所を設定。2Taは長さ4.5m、幅2.0mを設定。2Tbは当初長さ3m、幅1.5mの試掘坑として設定したが、後日指導委員会の助言もあり幅を2.0mに拡幅した。後円部東側の墳端と周溝の規模を確認し、併せて後円部から崩落した埴輪類を採取する事を目的とした。掘削前状況としては、周溝内に位置しておりほぼフラットであったが、南西方向に向かい僅かにレベルを下げていた状況であった。

墳丘外端部はA点から23.4mの位置で検出、周溝外端部をA点から32.0mの位置で検出した。2Tbの結果から周溝規模は幅約8.7m、深さは現GLより1.5mを測る。断面形は横長逆台形を呈し、周溝の掘削角度はフラット面に対し墳丘側で62°、周溝外側で33°を測る。周溝底面の標高は63.9

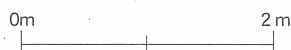
LH=65.600m



第6図 2トレンチ a 北壁土層実測図〔1/60〕

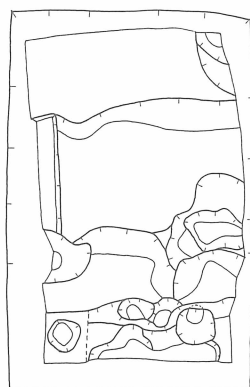
第5図 2トレンチ a

平面実測図〔1/60〕

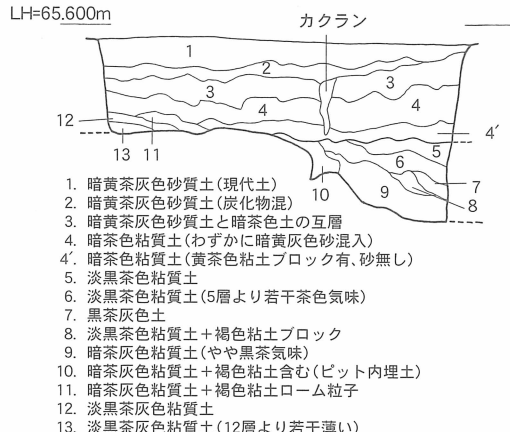


第7図 2トレンチ b

平面実測図〔1/60〕



LH=65.600m



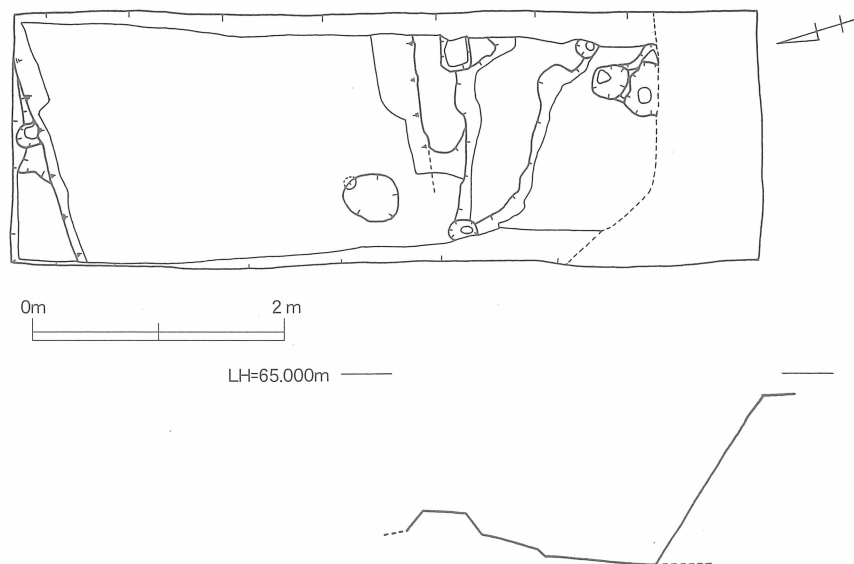
第8図 2トレンチ b 南壁土層実測図〔1/60〕

mである。埋土は黒茶色系を主体とし、比較的締まりがある。2 T aの土層の一部には堆積の不整合が見られる事から、周溝内の再掘削が行われた可能性がある。第7層からは埴輪片の出土が比較的多く、周溝底面の約20cm～30cm上位付近に多く散見された。墳丘からの転落に伴うものと考えられ、その殆どは中小の破片であった。埴輪の個体数はあまり多くはなく、円筒1～2個体程度であると思われる。

トレンチ内から多数のピットを検出したが、ピット内からは弥生時代後期や平安時代の土器細片が出土する事や、一部には柱痕跡も伴う事から前述した1 Tの結果と併せ、本古墳に直接伴う遺構ではないと判断した。2 T bの調査では、事前にその存在が予想されていた周堤についても精査したが、削平の為かその存在について確証を得る程の成果は上がらなかった。しかしながら、トレンチ東端部で厚さ10cm程の薄い堆積層が3層重なっており、過去に周堤が存在していた事を示唆するものとして注目される。

3 トレンチ〔3 T〕 (第9図 PL 3)

3 トレンチは後円部直交点であるA点から南方向の横軸線上に設定。長さ6.0m、幅2.0mの試掘坑であり、後円部南側の埴端、及び、墓道関連遺構の遺存状況を確認し、併せて後円部から崩落した埴輪類を採取する事を目的とした。昭和40年代の開削により現況はフラットであるが、僅かに南に向かいレベルを減じている。墳丘外端部はA点から23.2mの位置で検出した。現トレンチのみでの周溝規模は不明であるが、昭和60年度の調査結果とあわせると周溝規模は幅約7.4m、深さは現GLより1.35mを測り断面形は横長逆台形を呈する。



第9図 3トレンチ平面実測図〔1/60〕

周溝の掘削角度はフラット面に対し墳丘側で27°、周溝外側で17°を測る。周溝底面の標高は63.5mである。墳丘南側は過去の開墾等による攪乱が予想以上に激しく、トレンチの北側2/3には本古墳由来の自然堆積土は全て失われていた。かろうじて墳丘外端付近には黒茶色～暗茶灰色系を主体とした粘質土が遺存しており、埴端もここで確認出来た。埴輪片の出土はこの近辺が最も多く、中小破片が周溝底面から約10cm～20cm上位付近に拡散している状況であった。

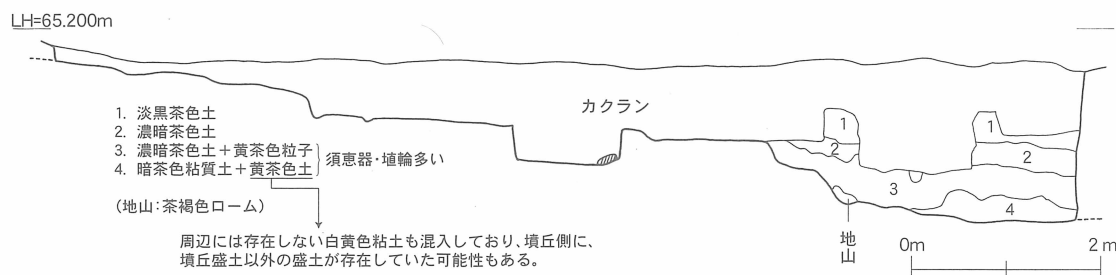
2 前方部の調査

前回の調査で確認出来なかった前方部の規模・形状及び周溝形状の確定を目的として4～10 T (9箇所)を設定した。なお、掘削調査にあたり現状を極力維持する為、最小限のトレンチ設定とした。

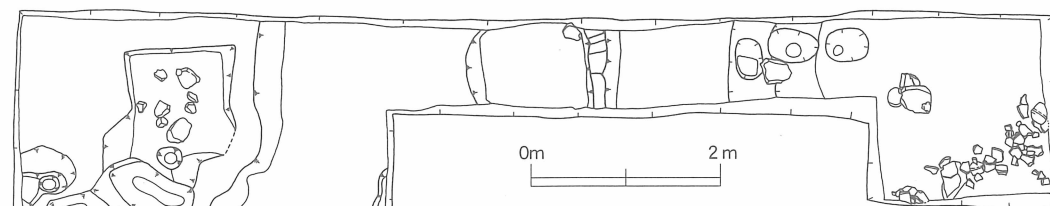
各トレンチの調査結果については、以下のとおりである。

4 トレンチ〔4 T〕 (第10、11図)

4 トレンチは後円部直交点であるA点から縦軸西方向に11.8m、横軸平行の南方向に15.2mの地点をポイントとしトレンチを設定。ポイントを起点として、長さ6.0m、幅4.0mの長方形区画を設定した。当初設定のトレンチにおいて造出しが存在する可能性が出て来た為、後日指導委員会の助言もあり、東端部に長さ7.0m、幅1mのトレンチを追加。南端部で須恵器が散見された為、南端部のみ幅を2.0



第10図 4トレンチ東壁土層実測図〔1／80〕



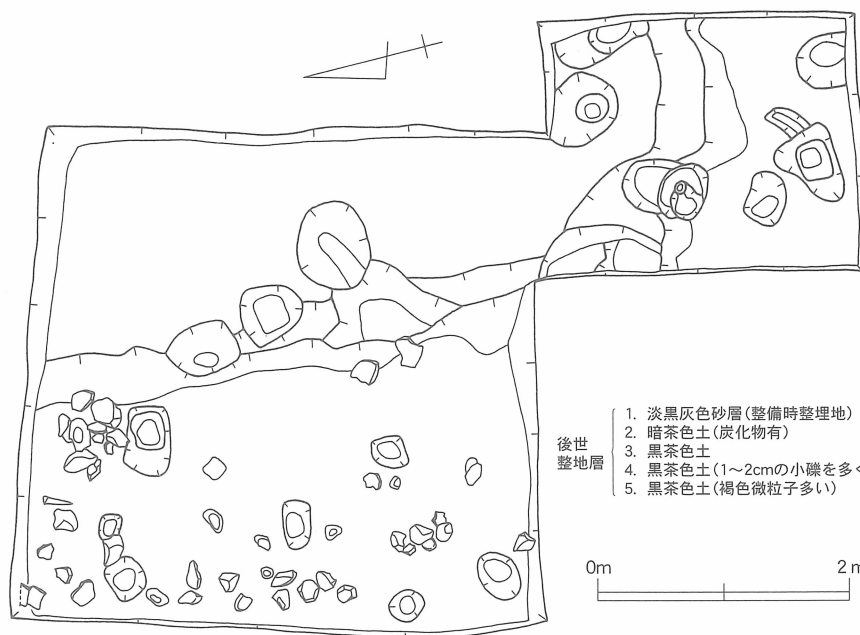
第11図 4トレンチ平面実測図〔1／80〕

mに拡幅した。当初は南側くびれ部の状況を確認し、併せて墳丘から崩落した埴輪類を採取する事を目的としていたが、調査の進展に伴い、造出しの規模の確認と散在する須恵器の採集に重点を置く事とした。掘削前状況は3 Tと同様で、南西方向に向かい僅かにレベルを下げている状況であった。南側くびれ部の南端は縦軸線上から23.8mで検出した。周溝の深さは現GLより1.6mを測る。周溝の断面形は横長逆台形を呈すものと思われ、掘削角度は水平面に対し36°を測る。周溝底面の標高は63.2mである。3 T同様過去の攪乱は予想以上に激しく、トレンチの

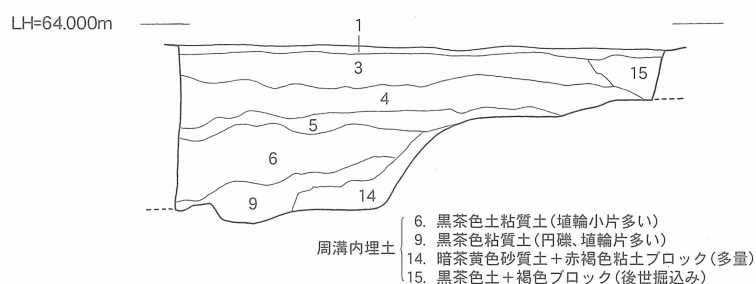
大半で本古墳由来の自然堆積土が失われていた。造出し部はその被害をまともに受け、本来の上部平坦面は完全にカットされており、上部構造の詳細は不明である。造出し南側斜面上や周溝内には、30cm～40cm大の片岩製割石複数個を基盤土に貼付いた状況で検出した。埴輪群や須恵器もほぼ同じレベルで出土しているものもあり、古墳築造後間もなく墳丘側から転落して来たものと思われる。割石は個体間に形状や規模の類似性が認められ、また、墳丘本体や主体部から距離がある事から、造出し上部平坦面の施設の一部であった蓋然性が高い。造出し南端付近には黒茶色～暗茶色系を主体とした埋土が遺存しており、第3・4層からは多量の埴輪・須恵器片が出土している。特に第4層においては墳丘及び周辺域に見られない白黄色粘土が混入しており、これを特殊施設である造出しを構成していた土質の一部と仮定するならば、前述した割石との関連が深いものと考えられる。

5トレンチ〔5T〕（第12、13、14、15図 PL3、4）

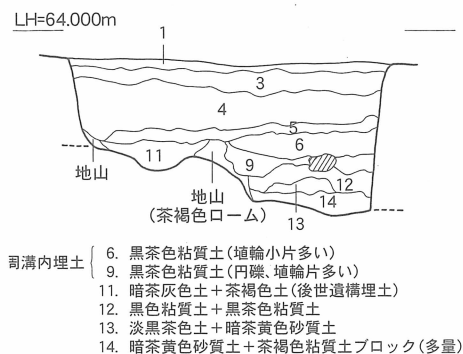
5トレンチは後円部直交点であるA点から縦軸西方向に60.8m、横軸平行の南方向に24.0mの地点をポイントとしトレンチを設定。ポイントを起点として、縦横軸平行に長さ4.0m、幅4.0mの正方形区画を設定した。当初設定のトレンチでは前方部南側コーナーを検出出来なかった為、後日指導委員会の助言もあり、東南端に南北の長さ2.5m、幅2mのトレンチを追加した。前方部南西側の墳端を確認し、併せて前方部から崩落した埴輪類を採取する事を目的とした。掘削前状況は、南方向に向かい僅かにレベルを下げている状況であった。前方部南側コーナーはA点から縦軸西方向に61.2m、横軸平行の南方向に29.8mの位置で検出した。周溝の深さは現GLより1.3mを測る。周溝の断面形は横長逆台形を呈すものと思われ、掘削角度は水平面に対し西端で50°、南端で25°～64°を測る。周溝底面の標高は62.



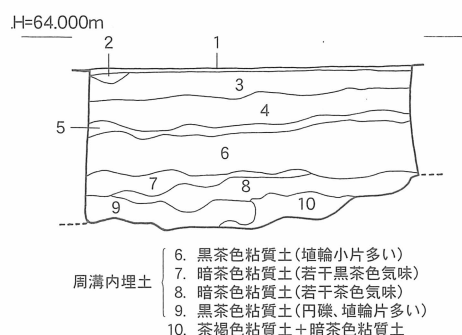
第12図 5トレンチ平面実測図〔1/60〕



第15図 5トレンチ北壁土層実測図〔1/60〕



第13図 5トレンチ東壁土層
実測図〔1/60〕

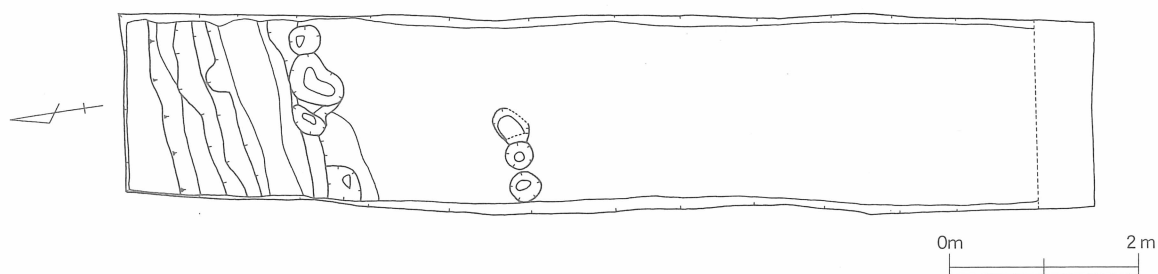


第14図 5トレンチ西壁土層
実測図〔1/60〕

5 mである。3 T・4 Tとは異なり、埋土は自然堆積で比較的安定している。周溝内には埴輪片と共に拳大の石材が周溝底面の約10 cm上位付近に散見されたが、密集度は低く、転石と判断した。

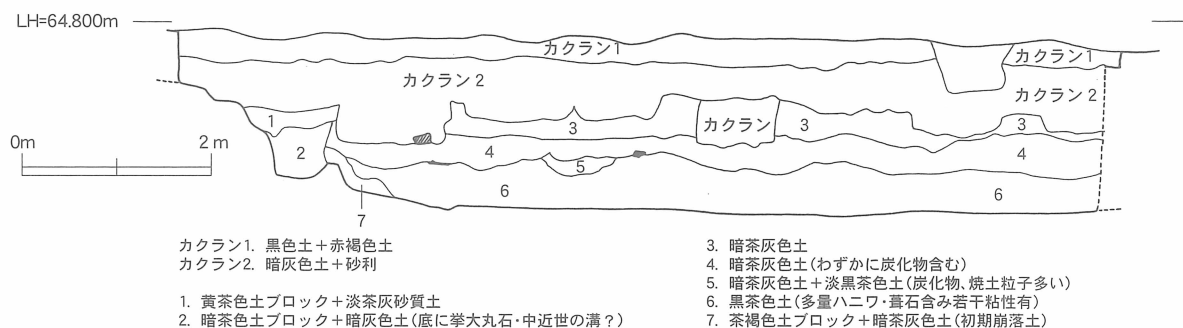
6トレンチ〔6 T〕 (第16、17図 PL4)

6トレンチは後円部直交点であるA点から縦軸西方向に38.3 m、横軸平行の南方向に20.7 mの地点をポイントとしトレンチを設定。ポイントを起点として、長さ10.2 m、幅2.0 mの長方形区画を設定した。本トレンチは発掘調査指導委員会の助言により、前方部南側側面の規模・形状を確定する為に設定した。掘削前状況はこれまでと同様で、南に向かいレベルを減じている。埴端はA点から縦軸西方向に40.0 m、横軸平行の南方向に23.0 mの位置で検出した。周溝の深さは現GLより1.9 mを測り、周溝の断面形は横長逆台形を呈すものと思われる。掘削角度は水平面に対し30°を測り、周溝底面の標高は62.



第16図 6トレンチ 平面実測図〔1/80〕

7 mである。6 トレンチも他と同様、過去の開墾等による攪乱は激しく、トレンチ上半部の自然堆積土は失われていた。遺存していた下半部の第6層は短期間中に多量の土砂が流入している事を示しており、それと共に周溝底面から約10 cm～20 cm上位付近に大小多量の埴輪群が出土した。本層には多量の埴輪群と共に複数の石材も散見された。20 cm～30 cm大の円礫が多く、葦石の転落によるものと判断した。転落石の中には10 cm大の2個の凝灰岩があり、埴端から60 cm南側に基盤土に貼付いた状況で出土している。石製表



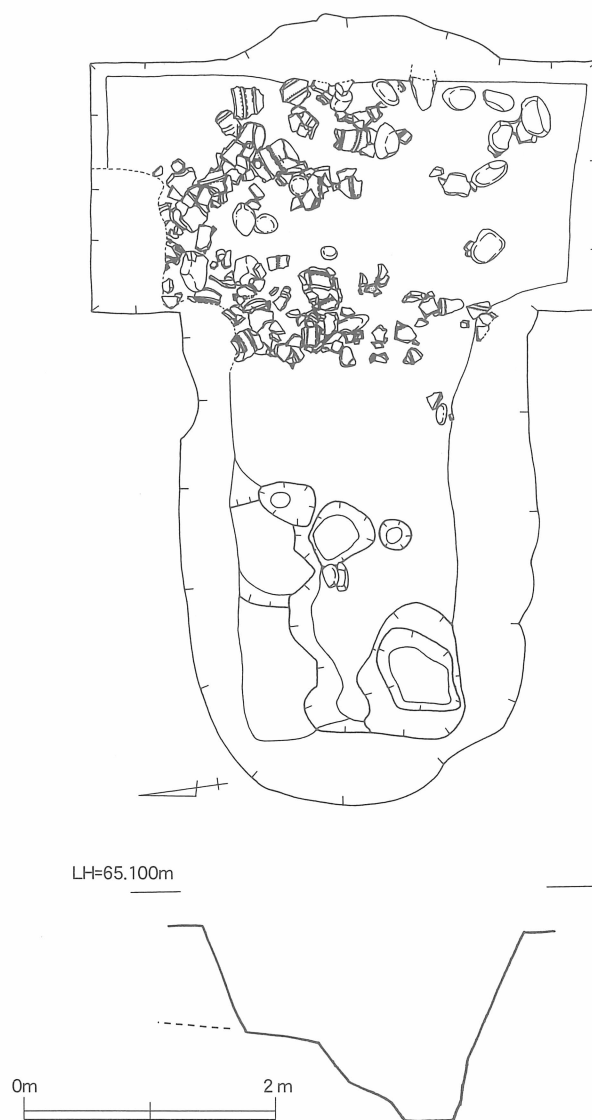
第17図 6トレンチ東壁土層実測図〔1/80〕

飾品の可能性もあり注意を要する。1・2層は中近世に掘削された溝と思われる、埋土中から陶器の微細片が出土した。

7トレンチ〔7T〕 (第18図 PL4)

7トレンチは後円部直交点であるA点から縦軸西方向に6.3 m、横軸平行の南方向に21.2 mの地点をポイントとしてトレンチを設定。ポイントを起点として、長さ4.0 m、幅2.0 mの長方形区画を設定した。本トレンチは造出し東端の範囲を確定する為に設定した。調査過程において当初設定のトレンチでは造出し東端を検出出来ない事が判明し、トレンチ西側中央に長さ3.0 m、幅を2.0 m分を追加した。

造出し東側コーナーはA点から縦軸西方向に9.8 m、横軸平行の南方向に23.0 mの位置で検出した。周溝の深さは現GLより1.5 mを測り、造出し部における周溝の掘削角度は水平面に対し東側で15°、南側で52°を測る。但し、南側は一部ピットの掘削を受けており、実際は4T同様36°前後であろう。周溝底面の標高は63.3 mである。7Tも他トレンチ同様過去の攪乱が非常に激しく、トレンチの大半で本古墳由来の自然堆積土が失われていた。特に造出し上部平坦面は完全にカットされており、上部構造の詳細は不明である。東側斜面には僅かに暗茶色系を主体とした埋土が遺存しており、造出しの旧形をかなり残している。出土遺物は周溝底面より約15 cm上位付近にその多くが見られ、埴輪群と共に須恵器や葦石と思われる30 cm大の円礫が多数出土した。埴輪群の出土状況より後円部からの埴輪・円礫の転落の後、造出し方向から埴輪・須恵器群が転落してきたものと考えられる。トレンチ西側において複数



第18図 7トレンチ平面実測図〔1/60〕

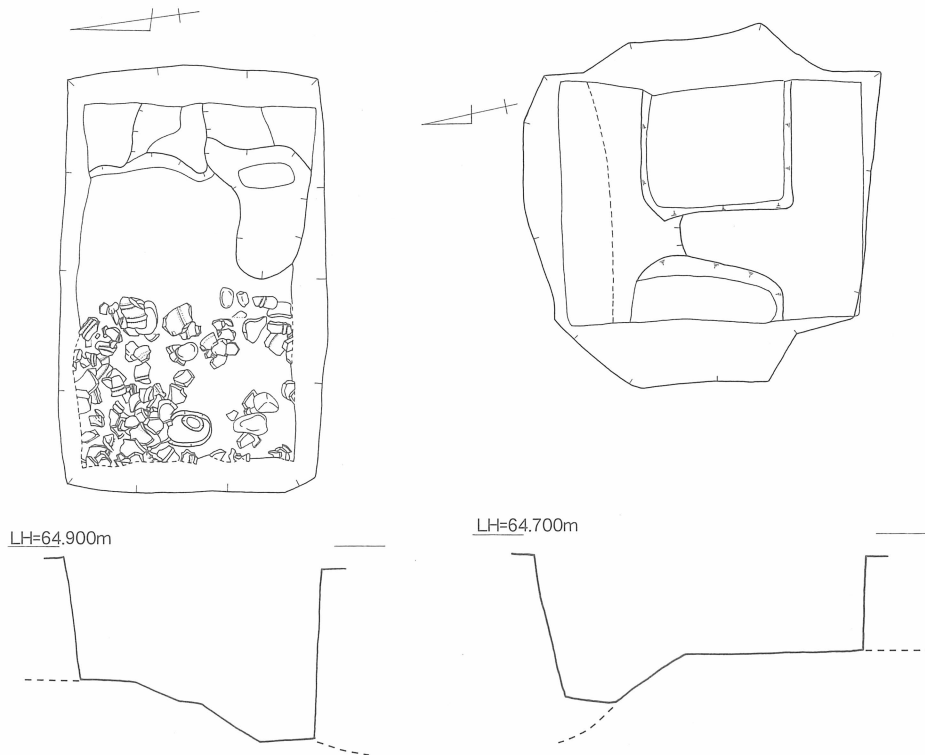
のピットを検出しているが周溝内埋土を切り込んでおり、後世掘削のピットである。

8トレンチ
〔8 T a、8 T b、8 T c〕
(第19、20、21図
P L 4、5)

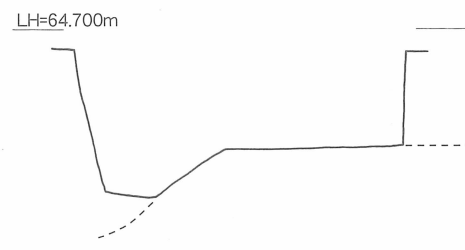
8トレンチは造出し西側コーナーの検出と周溝規模・形状を把握する事を目的とし、3箇所のトレンチを設定した。8 T aは後円部直交点であるA点から縦軸西方向に17.7m、横軸平行の南方向に20.0mの地点をポイントとしトレンチを設定。ポイントを起点として、横軸平行に長さ6.0m、縦軸平行に長さ2.0mの長方形区画を設定した。8 T bは8 T aのポイントから縦軸西方向に3.3m地点を基準とし、縦軸平行に長さ3.4m、横軸平行に長さ2.1mの長方形区画を設定した。8 T cは8 T aのポイントから横軸南方向に11.2m地点を基準とし、横軸平行に長さ2.5m、縦軸平行に長さ2.0mの長方形区画を設定した。造出し西側コーナーは8 T bで検出し、A点から縦軸西方向に21.8m、横軸平行の南方向に21.4mの位置で検出した。8 T cの結果から周溝規模は幅約10.2m、周溝の



第19図 8トレンチa平面実測図〔1/60〕



第20図 8トレンチb
平面実測図〔1/60〕



第21図 8トレンチc
平面実測図〔1/60〕

深さは現GLより1.7mを測り、造出し部における周溝の掘削角度は水平面に対し西側で79°、南側で29°を測る。但し、西側は一部削平の可能性もあり、実際は30°前後であろう。周溝外端部の角度は不明。周溝底面の標高は63.0mである。8 T a・8 T bの周溝内には多量の埴輪群と共に須恵器や転落石材が認められた。若干基盤土から浮くが、転落石材中には南側斜面上や周溝内に40cm～50cm大の片岩製割石複数個認められ、4 Tと同様の状況が伺われる。8 T aでは複数のピットが検出されているが、上部埋土が削平を受けており前後関係がつかめなかった。出土遺物なし。

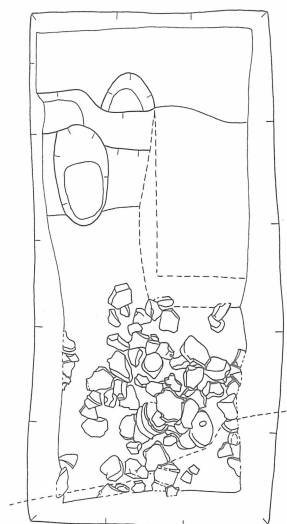
9トレンチ〔9T〕 (第22、23図 PL5)

9トレンチは後円部直交点であるA点から縦軸西方向に62.2m、横軸平行の南方向に9.8mの地点をポイントとしトレンチを設定。ポイントを起点として、縦横軸平行に長さ4.0m、幅2.0mの長方形区画を設定した。本トレンチは発掘調査指導委員会の助言を受け、前方部前面端の形状を確認する事を目的とした。掘削前状況は南方向に向かい僅かにレベルを下げていた状況であった。掘削を進めると、やや特殊な状況が見られた。当初墳端と思われた基盤土整形面から西側に15cm～30cm程の礫群があまり重層することなく密集する形で検出された。倒置しているものの、礫群の西端付近で円筒埴輪の下部3段分が出土しており、埴輪内側に礫が無い事から元位置を保っているものと考えられる。また礫群と基盤土整形面の間には80cm～100cmの空間があり、この間には礫や埴輪等の出土が認められなかった。整形面上端から礫群中央部付近の間には20cm～40cmの厚さで黒灰色系と茶灰色系の互層が見られ、人工的な盛土が形成されているものと考えられる。このような状況は本トレンチと後述する10トレンチ以外、他トレンチには見られない事象で、特に注意を要する。周溝の深さは現GLより1.6mを測り、周溝の掘削角度は水平面に対し盛土部分で35°を測る。周溝底面の標高は62.4mである。

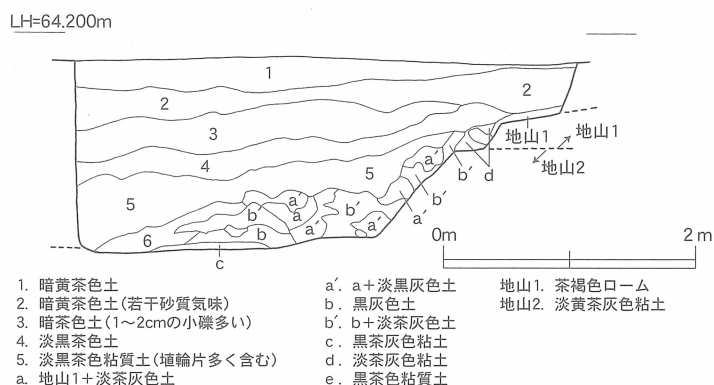
出土遺物の中には5cm～15cm程の黒灰色の凝灰岩片が2点含まれている。これらは石敷遺構の上面から出土しており、土層の乱れも認められない事から古墳築造当時の遺物と考えられる。石製表飾品の一部である可能性もあり、注意を要する。

10トレンチ〔10T〕 (第24、25図 PL5)

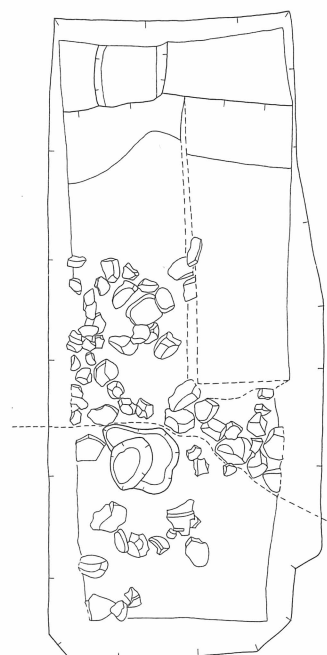
10トレンチは後円部直交点であるA点から縦軸西方向に62.4mの地点をポイントとしトレンチを設定。ポイントを起点として、縦横軸平行に長さ5.0m、幅2.0mの長方形区画を設定した。本トレンチも9トレンチ同様、発掘調査指導委員会の助言を受け、前方部前面端の形状を確認する事を目的とした。掘削を進めると、状況は9トレンチと酷似している事が判明。当初墳端と思われた基盤土整形面から西側に15cm～30cm程の礫群がほぼ重層することなく密集する形で検出された。礫群の西端部には逆「く」の字状の面があり、これより西側には礫群が全く認められない事から、人工的な境界面であると判断した。また、礫群と基盤土整形面の間には60cm～70cmの空間があり、9トレンチ同様この間には礫や埴輪等の出土が認められなかった。基盤土整形面上端から礫群東端付近の間には10cm～15cmの厚さで褐色粒子を多く含んだ黒茶色系の土層が3層見られ、人工的に形成された盛土の可能性が高い。9トレンチの結果、及び、他トレンチにおいて検出した石材の出土状況を鑑み、本古墳前方部の礫群を「石敷遺構」であると推定した。しかし、予測される遺構全体の1割程度の確認であり、今後の調査による推定内容の変化は否定し得ない。周溝規模は不明だが、深さは現GLより1.2mを測り、周溝の掘削角度は



第22図 9トレンチ
平面実測図〔1/60〕

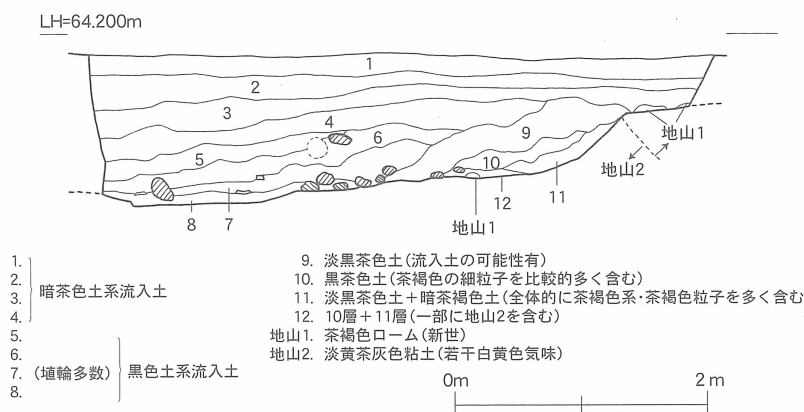


第23図 9トレンチ北壁土層実測図〔1/60〕



第24図 10トレンチ
平面実測図〔1/60〕

水平面に対し盛土部分で 20° を測る。周溝底面の標高は62.8mである。出土遺物の中には5cm～10cm程の黒灰色の凝灰岩片が7点含まれている。これらは石敷遺構西側の底面から出土しており、土層の乱れも認められない事から古墳築造当時の遺物と考えられる。9トレンチ出土の凝灰岩ともあわせ石製表飾品の一部である可能性もあり、注意を要する。



第25図 10トレンチ北壁土層実測図〔1/60〕

3 主体部の調査

今回の調査は石室構造の把握と実測図の作成に重点を置きつつ、石室内壁装飾の有無、副葬品の確認もあわせて行った。調査結果については、以下のとおりである。

石室の規模と構造 (第26図 PL2、3)

本古墳の主体部は後円部にあり、南西に開口する横穴式石室である。江戸時代初期頃、現八女市役所を中心とした地区に、関ヶ原の合戦で戦功を挙げた田中吉政の手により福島城(初代城主 田中康政?)が修築され、その折石垣構築の為各地から石材が調達された。本古墳の玄室や羨道部の天井石もこの折に抜かれているものと思われる。その為か、掘削調査開始前は後円部南側に直径6mの挿鉢状陥没穴があり、石材の一部が露出している状況であった。石室内を充填している覆土中には大小多量の緑色片岩の破片が混入しており、石抜きにより天井石が外された際、後円部盛土の崩落と共に天井部付近の石材も破損・流入したものと考えられる。覆土上層には現在の畑土に類似した低粘性の黒灰色土が堆積しており、近年の畑・果樹園造成の折に流入したものと思われ、半世紀程前には一部内部観察が可能であったとの地元古老の話は納得出来る。

玄室の平面形は主軸方向に長く奥壁側が広い「羽子板」のプランをとり、玄室長3.62m、幅は奥壁側で3.26m、玄門側で2.55m、玄門幅は0.7mを測る。玄室天井石は既に失われている為、高さについては不明であるが、2.75m以上と考えられる。現時点での仮主軸方向は $N-29^{\circ}-E$ である。床面には多量の片岩小板石があったが、大きさや形状が不揃いであり礫敷を示すものではないと判断した。左側壁に平行し1床、奥壁に平行して2床分を区画する幅15cm～20cm、深さ10cmの溝を検出。内部には多量の片岩破片が認められた為、検出当初は玄室内排水溝を考えたが、形状や各々の方向性を踏まえ屍床と判断した。石室内からは石棺の存在を示唆するものは検出されず、石棺安置の可能性は極めて低い。仮に奥壁平行の2床を手前から第1屍床、第2屍床、左側壁平行の1床を第3屍床とすると、第3屍床側壁側の一部に基盤土にくい込む厚さ1.5cm～2cmの木質痕跡が認められる事から、木棺本体の痕跡ではないにしろ、埋葬方は木棺葬であった蓋然性が高いと考えられる。但し、第2屍床上部は奥壁の傾斜もあり、木棺の規模によっては収納出来ない場合も想定され、その在り方には注意を要する。

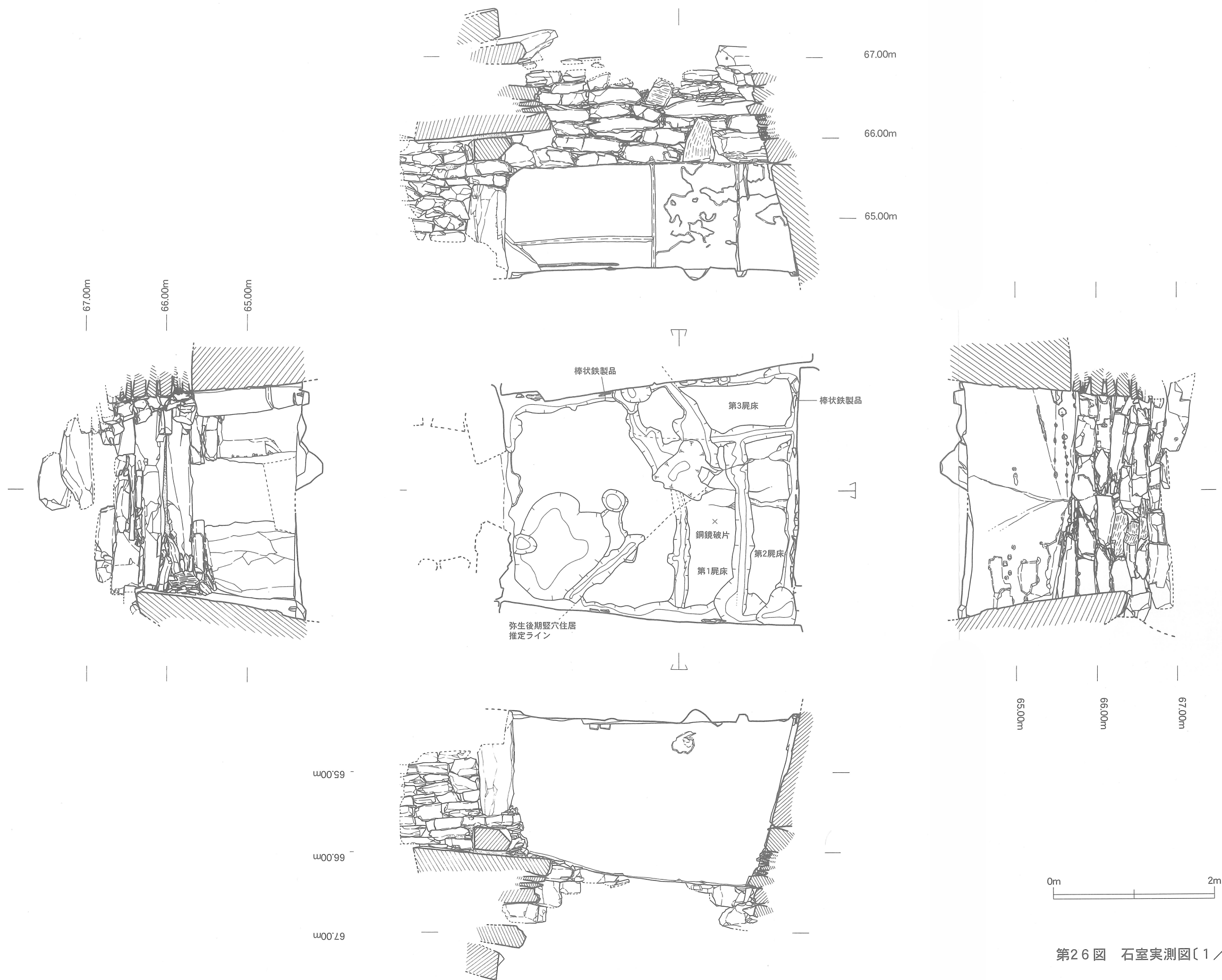
各屍床についての規模は以下の通りである。

第1屍床 220×75 第2屍床 225×60 第3屍床 202×70 (単位:cm)
(一部推定)

(※各数値は基本的に溝の中心より計測したもの)

床面は屍床部分を含め全面が硬化しているが、屍床手前部分ではやや硬化が弱く、玄門側に向かい微傾斜している。

奥壁・両側壁には巨大な一枚石を据え腰石としている。左側壁にある安山岩の腰石には幅3cm～4cm、深さ2cmを測る断面三角形を呈す溝状掘込み(以下、刻線)が縦方向に3本、横方向に2本ある。奥壁側2本



第26図 石室実測図〔1／50〕

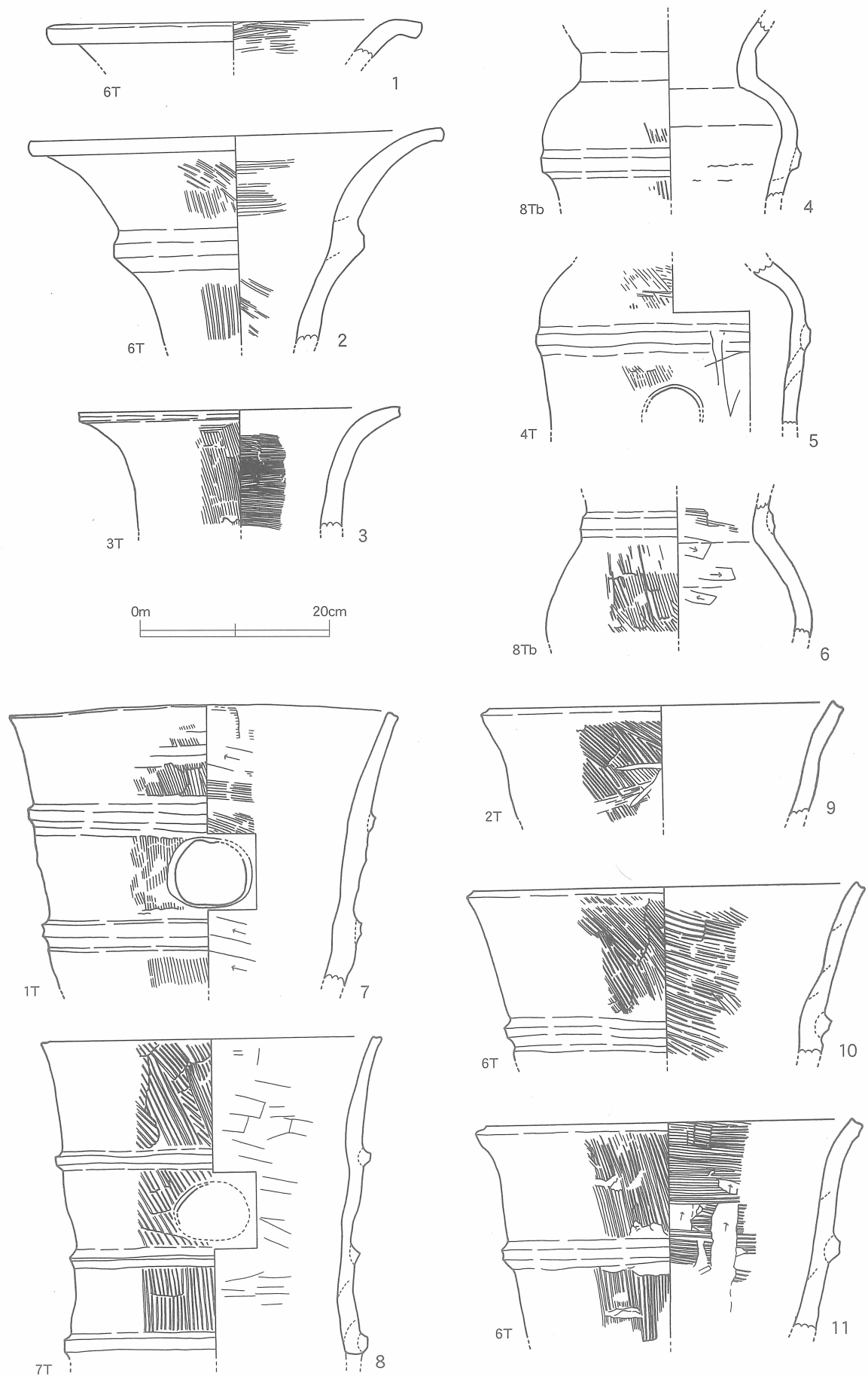
の縦刻線は腰石上端面から下に5 cm～20 cmの部分で断面整形を止めている。2本の横刻線の内、上部横刻線は断面が精美な三角形を成すが、下部の横刻線は深さ1 cm以下で断面形も台形に近く縦刻線とは交わらない。しかしほぼ水平を維持し、下端面が第1屍床と同じレベルである事には注意が必要か。また、3本ある縦刻線の内、最も玄門側のものは玄室のほぼ中央にあり、これを境として玄門側には横刻線のみが、奥壁側には縦刻線のみが入る事実は注視したい。腰石より上部には厚さ15 cm～20 cmの板石を横位に積み上げ、隙間には板状の小石材を充填するが、一部には縦位に石材配するなど概して雑となっている。右側壁の安山岩腰石は極めて大きく、高さ2.1 m以上、幅3.6 m以上の巨石である。面を平滑に仕上げ非常に精美である。腰石上部の積石は既に失われ、現状では2段までが遺存しているにすぎない。奥壁の腰石は緑色片岩の巨石で、奥壁側の腰石にこの種の石材を用いるのは八女地区に在する首長墓クラスのスタンダードである。面には直径数cmの剥離痕が多数あるが、原因は不明。装飾等は認められない。腰石上部では1段目に厚手で横に短い石材を主に用い、2段目以上は左側壁同様の板状石材を積む。玄室玄門部側では緑色片岩製の大型袖石が立ち、その直上に安山岩製の板石が右に1枚、左に2枚積まれその上にやや薄手で横長の片岩製石材を乗せる。右側及び左側袖石上部の安山岩板石は前室又は羨道部側積石の2列目まで横架されており、力石的な役割も担っていると考えられる。先の石材より5 cm程の空間を開けた後、玄室幅より広く薄手・長大な石材を用い楣石を横架する。間隙には白色粘土塊が充填される。最上段に位置する2石は天井石付近を構成していたものと思われるが、現位置ではない。玄門手前部分については天井石に該当する石材が見当たらず、玄室天井石と同様石抜きが行われていた。この為天井崩落の危険性が考えられた為、想定床面より上位約60 cmに未掘部分を設けその防止に努めた。しかし、この結果框石及び床面部分の検出が出来ず、詳細な形態の把握が困難となった。当該部分の機能については即断出来る材料が乏しいが、楣石が80 cm以上内側に迫り出し前室としての天井部に対する意識が薄い事や、積石の状況から腰石が存在する可能性は低く、石材は概して小規模で積みも荒い事などから、前室ではなく羨道部である可能性が高いと考えられる。この場合、羨道及び墓道の全長は推定で約11.5 m前後となる。縦断面及び横断面を見ると、各壁の持ち送りが小さい事がわかる。奥壁側の17°に対し左側壁は6°しかなく、断面は箱状の形態を成している。玄室が箱形を成し、築造時期が比較的近似している福岡市の東光寺剣塚古墳の玄室には力石は見られないが、本古墳の玄室には四隅に力石的な構造が認められるなど、時期的、又は、構造的な差異を呈している。構造上注意を要するのが楣石上位の石積みである。通常壁面は持ち送りにより内傾するが、本玄室では奥壁の内傾度に合わせるように外傾している。玄室天井石の石抜き時に発生した積石の「ズレ」と判断したが、石材間の接点部分に明瞭な擦痕が見られない事がやや気にかかる。

IV 出土遺物 (第27～35図 PL6、7)

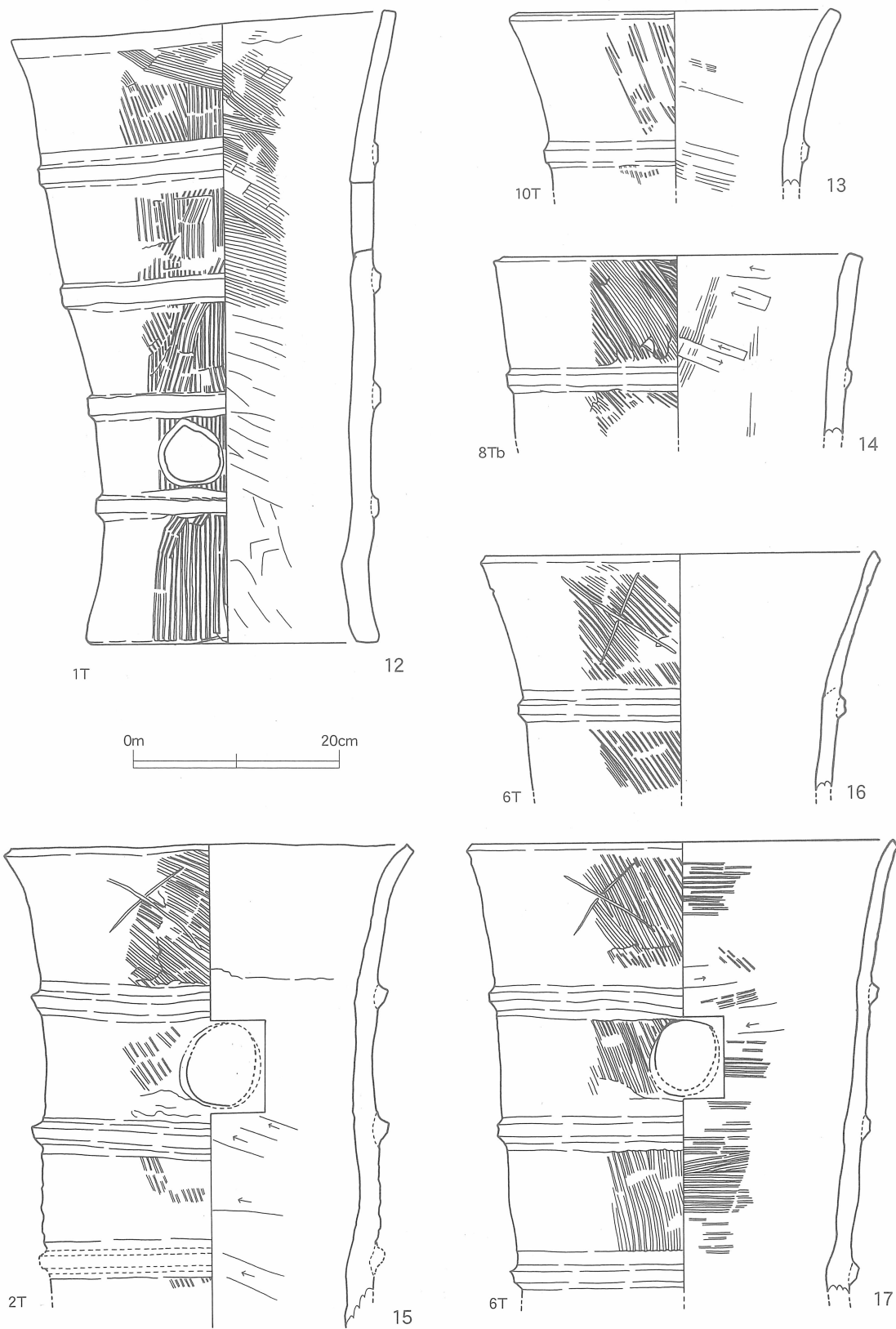
今回の調査における出土遺物はトレンチ内からのものが殆どであり、その大半が南側造り出し部を中心とした周溝内に集中していた。9 T検出の円筒埴輪を除きほぼ全て原位置を示してはいないものの、埴輪類は墳端及び造り出しを中心に樹立していたと考えられる。また、一部形象埴輪が石室内覆土からも出土しており、後円部墳頂にも埴輪の樹立があったものと思われる。須恵器類は造り出し周辺のみ出土、と言える程の集中域を形成しており、葬送・墓前に関連した儀礼が執り行われた結果であろう。石室内からの遺物は、わずかな金属製遺物及び上部よりの崩落遺物を除けば皆無に等しい程であった。これは、過去の清掃、盗掘、石抜き時の作業等によると思われるが、徹底の極みであった。なお、各トレンチからは弥生時代後期を中心とした古墳に先行する遺構を多数検出したが、一部を除いて検出記録のみに留めトレンチと共に埋め戻した。

朝顔形埴輪

1～6は朝顔形埴輪で、口縁部分は形態差で、胴部は肩部の形状により、A・Bの2種類に分類した。口縁A類は大きくラッパ状に外反し、口縁端部付近を屈曲させる。頸部は締め気味で中位付近に突帯を持つもので、1・2がこれにあたる。口縁B類は上位付近から外反し、端部の屈曲・中位付近の突帯もないもの



第27図 出土遺物実測図〔1／6〕

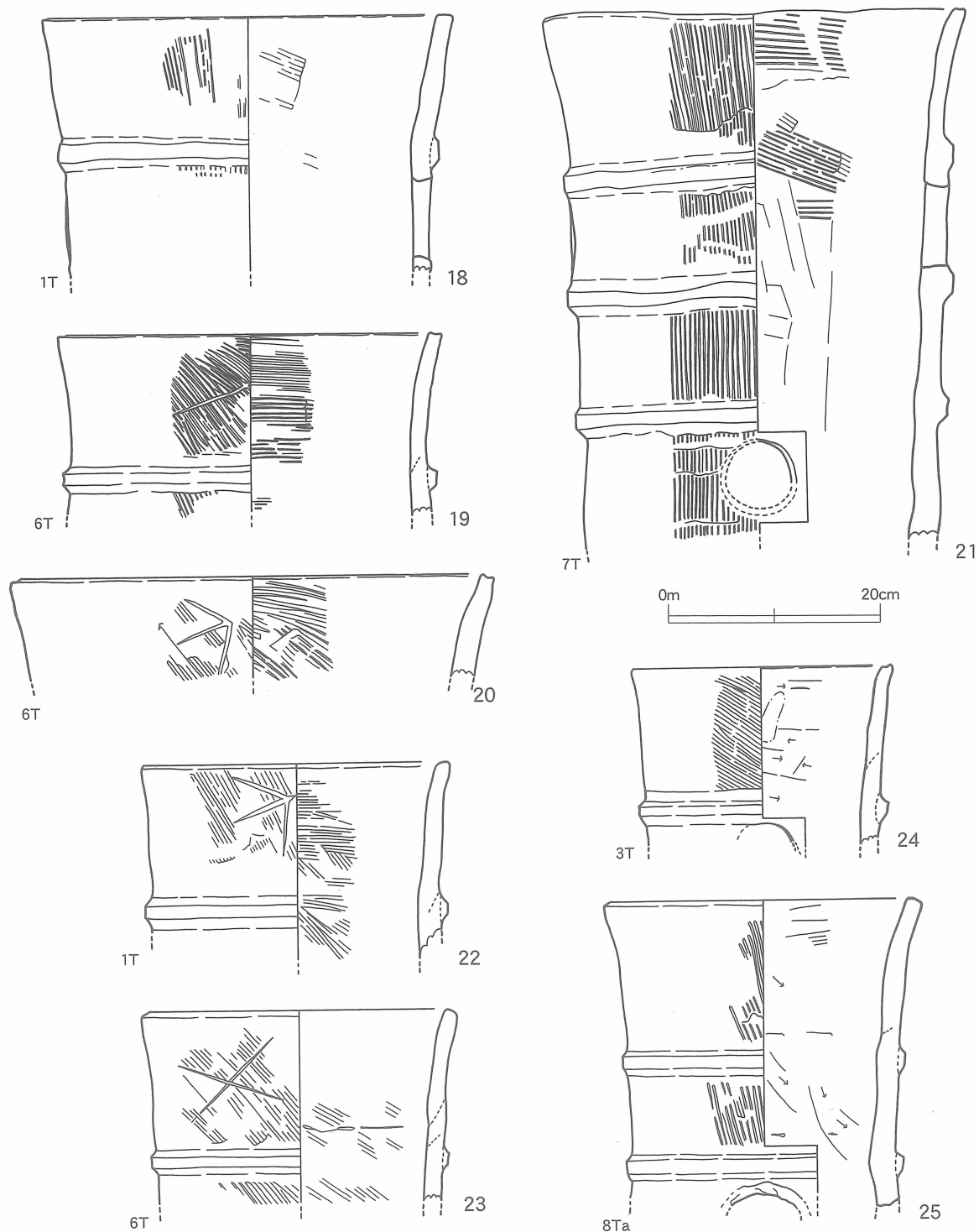


第28図 出土遺物実測図〔1／6〕

で、3がこれにあたる。胴部A類は肩が大きく張り、肩部直下に1条の突帯を持つもので、4・5がこれにあたり、胴部B類は撫で肩を成し、6となる。

円筒埴輪

トレンチ調査という限定的な調査であった為か、出土量は相当数あったが風化も著しく、又、大半の資料

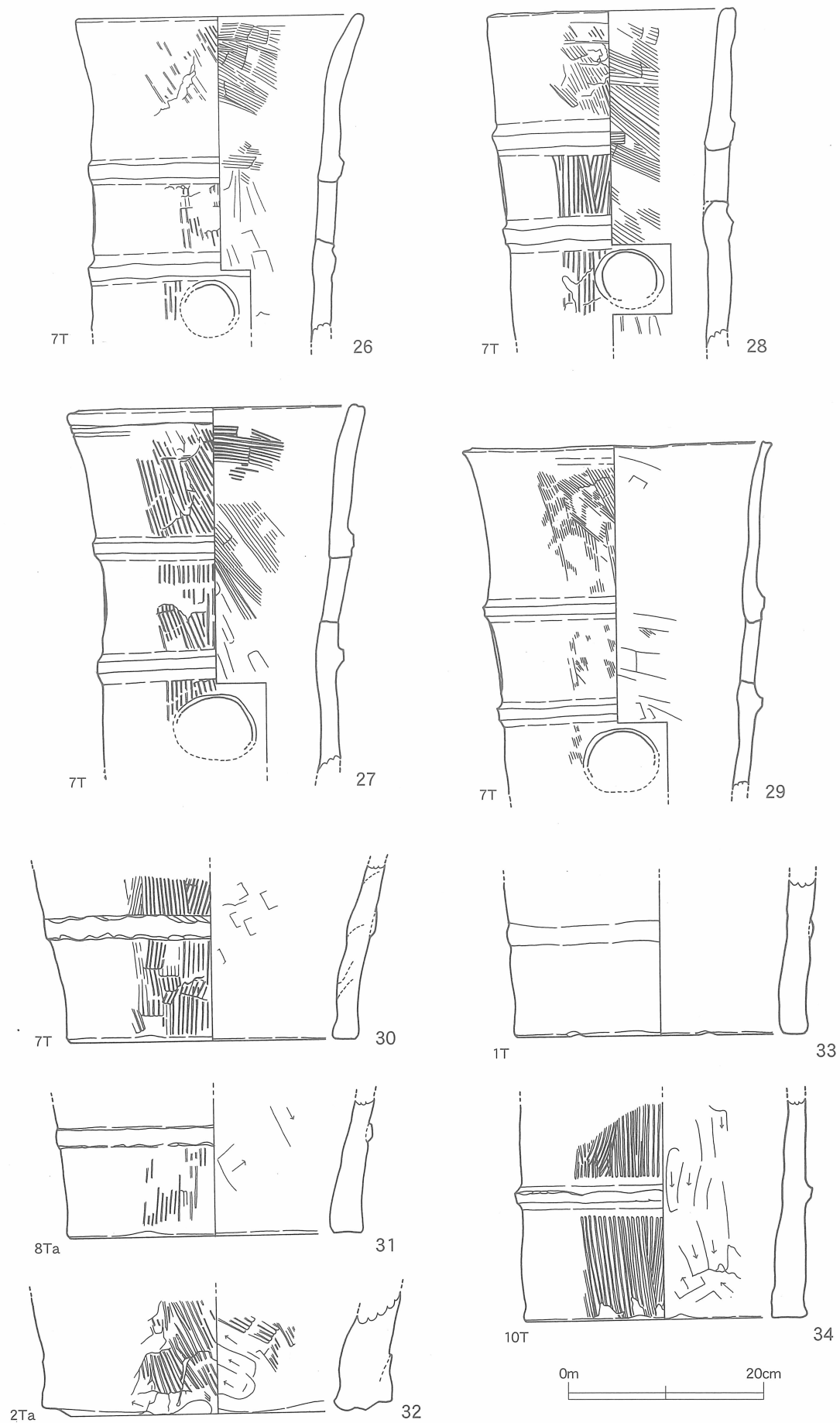


第29図 出土遺物実測図〔1／6〕

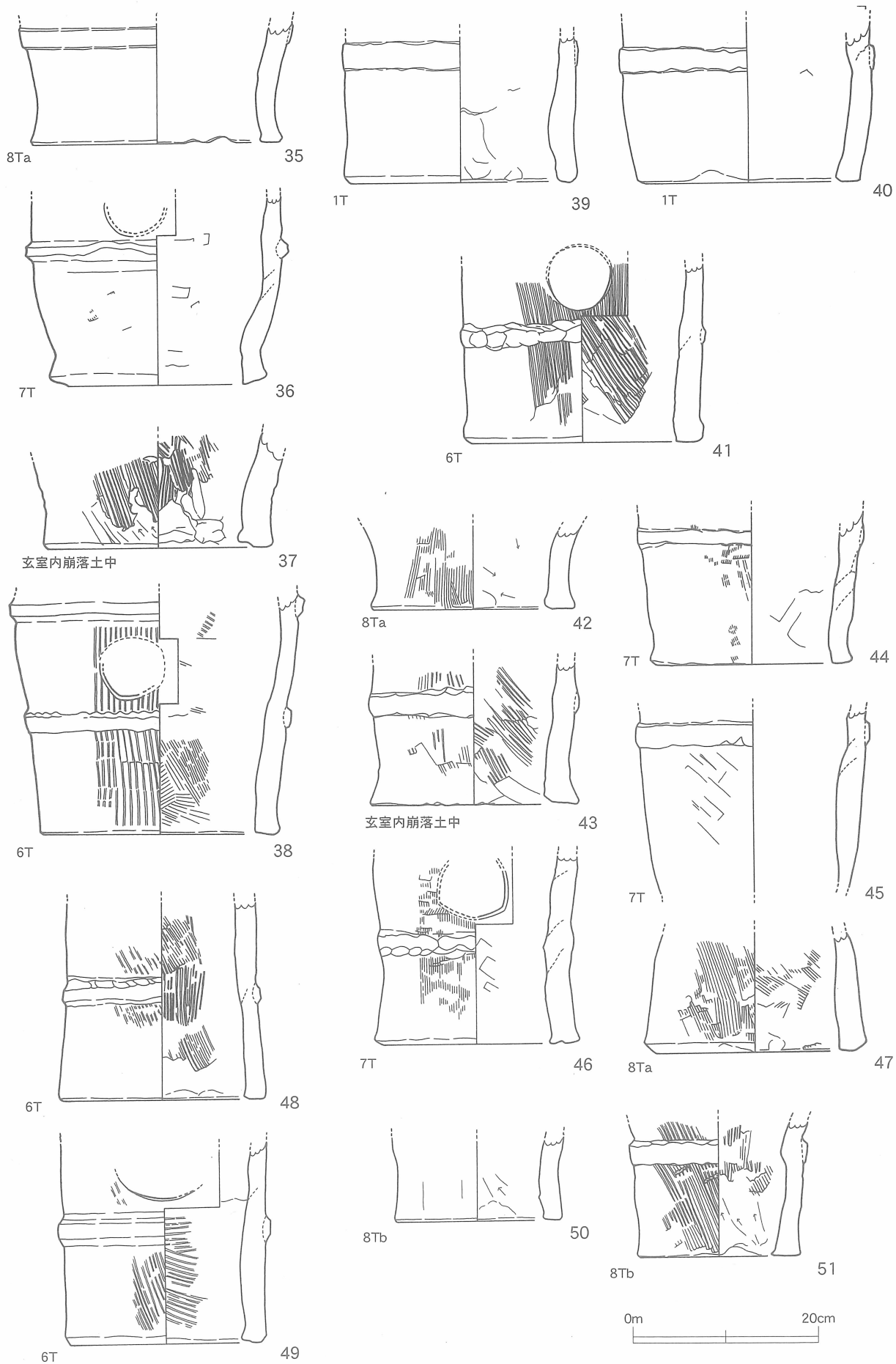
が小破片であり復元・図化作業は非常に困難であった。本項では復元後図化に対し十分な遺存状況をなす個体をセレクトし、提示する事とした。なお、底部資料については朝顔形埴輪との具体的な識別は行っておらず、一括して報告する事をおことわりしておく。

口縁部は、胴部外反のまま斜上方に延びるA類と、直立気味の胴部から口縁部が斜上方に延びるB類、最上段下2・3段目に連続して楕円形透かしを有するC類に分類。更に各分類中の形態差により、A類を3、B類を2、C類を2つに細分した。

口縁A-1類は7～11が該当する。胴部から口縁部が大きく外方に延び、口唇部を強く撫でて凹形に仕上げる。



第30図 出土遺物実測図〔1／6〕



第31図 出土遺物実測図〔1／6〕

口縁A-2類は12～14が該当する。A-1類に類似するがやや外反角度が浅い。口唇部は平滑。

12は全体の1/2を欠損する。器高61.4cm、口径37.4cm、底径28.4cmを測る。底部から緩やかに外反しながら外上方に延び、口縁部付近で僅かに外方へ屈曲する。口唇部は水平且つ平滑に仕上げられる。4本の突帯を巡らせ、2・4段目に楕円形に近い円形透孔を2方に持つ。調整は、外面で全面荒い縦ハケ後突帯を貼り付ける。最下段突帯には押圧技法が用いられており、粘土小塊の痕跡が確認出来る。最下より上位の突帯は断面台形を呈し、ナデにより丁寧に仕上げている。口縁部上半は荒い斜めハケ後、長さ4cm～5cmの布状調整具を用い平滑に撫でている。内面は口唇部から2.5cmまでが荒い斜めハケで、以下は荒い指ナデ、2段目中央付近より以下は指オサエで仕上げる。口縁部内面に斜方向の沈線が平行して2条入る。内外面とも暗灰色を呈し焼成は良好。胎土中には多量の石英粒が混入している。

口縁A-3類は15～17が該当する。全体的に細身で、外反角度はA-2類に似る。口唇部は平滑に仕上げられ、垂下する。

口縁B-1類は18～21が該当する。直立気味の胴部から突帯最上段より口縁部がわずかに外反し上方に延びる。口唇部は撫で仕上げでほぼ水平を成す。

口縁B-2類は22～25が該当する。形態はB-1類に似ているが、口唇部直下付近で若干外方に屈曲する。口唇部は水平気味に仕上げる。

口縁C-1類は26～28が該当する。最上段下2・3段目に連続して楕円形透かしを有し、口縁形態はB-2類に共通する。上部下2段目の透かし穴を最上段の突帯に寄せる。

口縁C-2類は29が該当する。口縁形態はA-3類に共通し、上部下2段目の透かし穴を最上段下2段目の中央に配す。

底部は、底径28cm以上の大型品をA類。底径24cm～26cmまでの中型品をB類。底径18cm～22cmまでの小型品をC類に分類。更に形態差によりA・B類を2つに、C類を3つに細分した。また、資料の大半に見られる押圧技法はI類（粒状粘土小塊を貼り付けたもの）、Ib類（粒状粘土小塊及び長さ10cm程の帯状粘土を貼り付けたもの）、II類（帯状粘土のみを貼り付けたもの）に分類した。

底部A-1類は30～32が該当する。最下段より斜め外方に延び、最下段突帯には押圧技法が見られる。

底部A-2類は33・34が該当する。最下段よりやや直線的に胴部に延びる。口縁A-2類とセットになるものと思われる。

底部B-1類は35～38が該当する。最下段より斜め外方に延びる。

底部B-2類は39～41が該当する。最下段より直線的に胴部に延びる。最下段突帯には押圧技法が見られ、41のように粘土小塊を貼り付け突帯下端部は左から右方向へ波状に撫で、上端部は細身のヘラ状工具で右から左方向へ掻き上げるように調整（押圧I類に顕著）する。この技法は八女市の釘崎2号古墳の出土遺物中にも確認出来る。

底部C-1類は42～47が該当する。僅かに外方に延び、押圧技法が主体を占める。

底部C-2類は48・49が該当する。最下段より直線的に胴部に延びる。

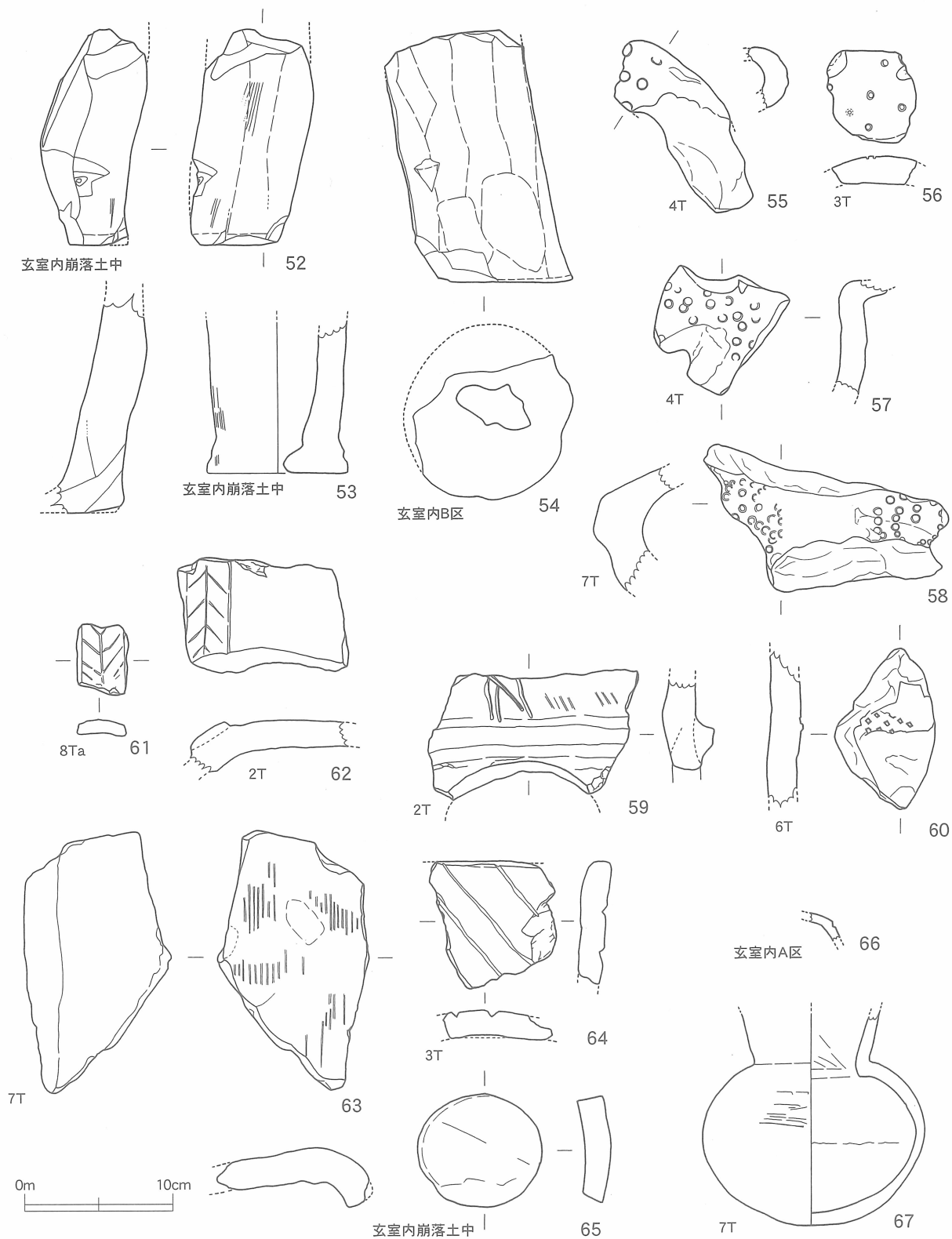
底部C-3類は50・51が該当する。底径が18cm以下とかなり小さい。

C-1・3類は7T・8Tに集中しており、C-3類は8Tbのみの出土である。

形象埴輪

動物（馬？、猪？）、人物がある。全て小破片であり、全体の様子を伺い知るものはなかった。

52～54は動物の脚部破片で、52・53は猪ほどの中型動物か。54は馬ほどの大型動物と思われるが、脚端を突っ張るように全体が内傾しており、注意が必要か。55～63は人物の一部と思われる。55は肩部付近の上腕、57は脇腹～腕付け根付近。56・58は竹管文が施されている事から服の一部と思われるが、部位は不明。59は直径が12cmを超える透孔がある。台座の一部だろうか。60は方形の刺突痕があることから巫女の袈裟の一部と思われるが判然とはしない。61・62は盾、又は、盾持ち人の一部か。63～65は不明である。64は盾の可能性もある。65は端部に切取り跡があり、ボタン状の装飾用パーツの可能性も考えられる。



第32図 出土遺物実測図〔1/4〕

土師器

66は玄室内出土の土師質の坏蓋である。天井部と体部の境に深い沈線が1条巡らされている。内外面とも著しく磨耗しており、調整は定かでないが、須恵器の可能性もある。67は7T出土の壺形土器で、埴輪群の中に倒置した状況で出土した。外反気味の直線的な口縁部から、張り気味の肩部を有し僅かに上下につぶれた球形胴部、丸底を成している。口縁部外面はヨコナデ、内面はヘラミガキ。胴部外面はヨコハケ後ヘラ調整、内面はナデが施される。長頸壺か。

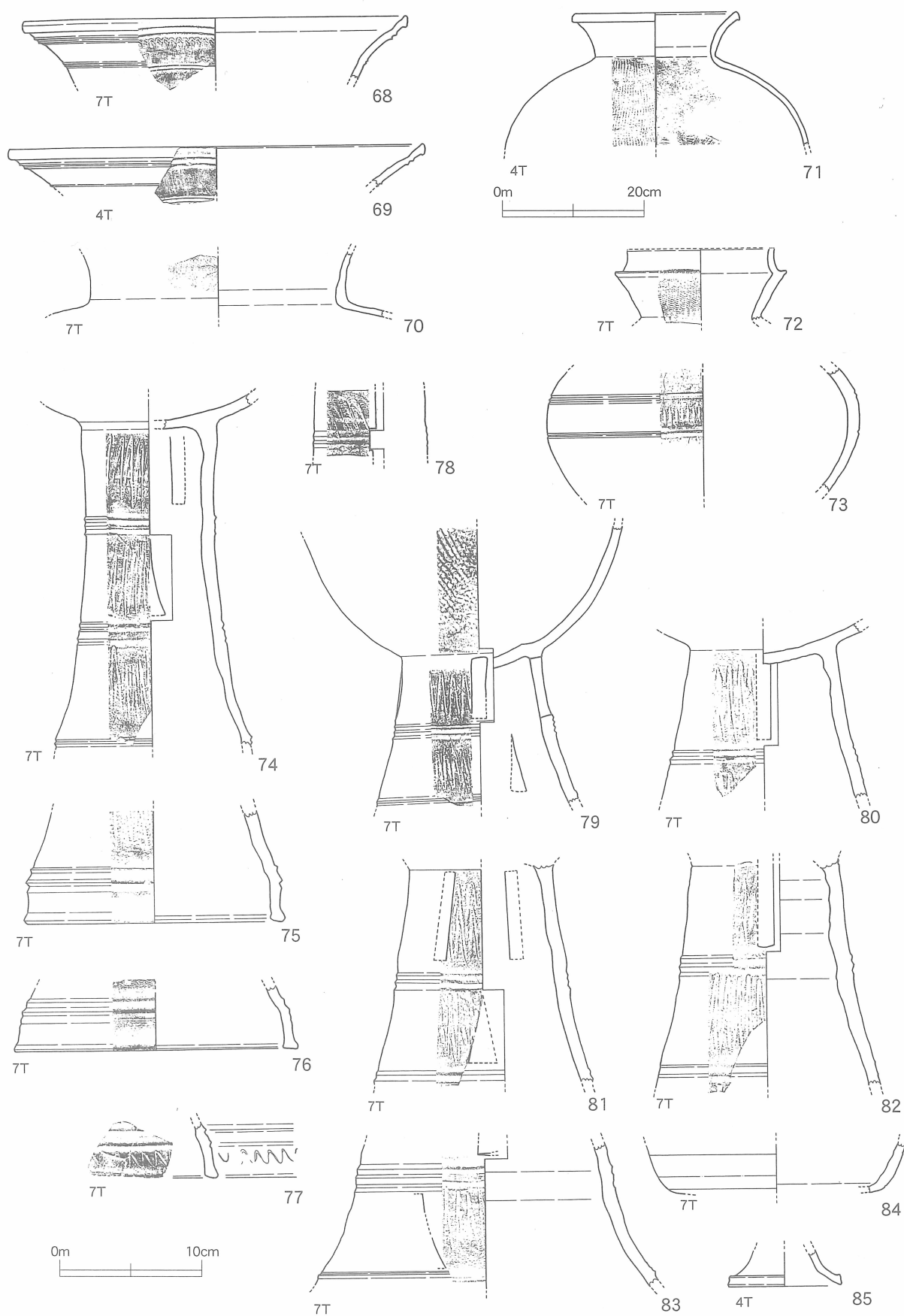
須恵器

68～70は甕の口縁部～肩部の破片である。68は口縁部の破片で、ラッパ状に大きく外反後端部付近で内湾気味に屈曲させ、口唇部をつまみ上げ丸く仕上げる。口唇部外面を肥厚させ下端部を丸くおさめ、直下には2条の平行凸線を巡らせる。頸部中位に平行凹線を2条巡らせ、その上下に文様帯を設ける。上部文様帯には26本歯の櫛状原体を用いて波状文を施文した後、多段的に見せる効果を期待したのか、文様中央をナデ消している。下部文様帯には16本歯の原体が用いられ、波状文を施文する。色調は外面が暗灰色、内面は淡灰色を呈す。焼成は良好で、断面が淡紫色を発色する。胎土は精緻で長石の粒子が少量入る。復元口径53.8cmを測る。69は口縁部の破片で、大きく外方に開き端部付近で内湾気味に屈曲させ、口唇部をつまみ上げ丸く仕上げる。口唇部外面を肥厚させ下端部を丸くおさめ、直下には2条の平行凸線を巡らせる。頸部中位に平行凹線を2条巡らせ、その上下に文様帯を設ける。上部文様帯には26本歯の櫛状原体を用いて振幅が小さく、やや省力気味の波状文を施文する。色調は内外面共に暗灰色を呈す。焼成は良好で、断面が淡紫色を発色するが、68より若干淡黄色気味。胎土は精緻で長石の粒子が少量入る。復元口径58.2cmを測る。70は頸部周辺の破片である。上部は文様帯にカキ目調整を行った後櫛描波状文が施される。各部接合の手順は肩部+口縁部→接合部内面ナデ→接合部外面に粘土充填→ナデとなる。調整は、肩部外面は格子目タタキ、内面は同心円タタキ後ナデ。口縁部外面は回転ナデ後ナデ、内面は回転ナデを施す。色調は外面が暗灰色、内面は青灰色を呈す。焼成・胎土とも69と共通する。同一個体か。頸部径は36.2cmを測る。

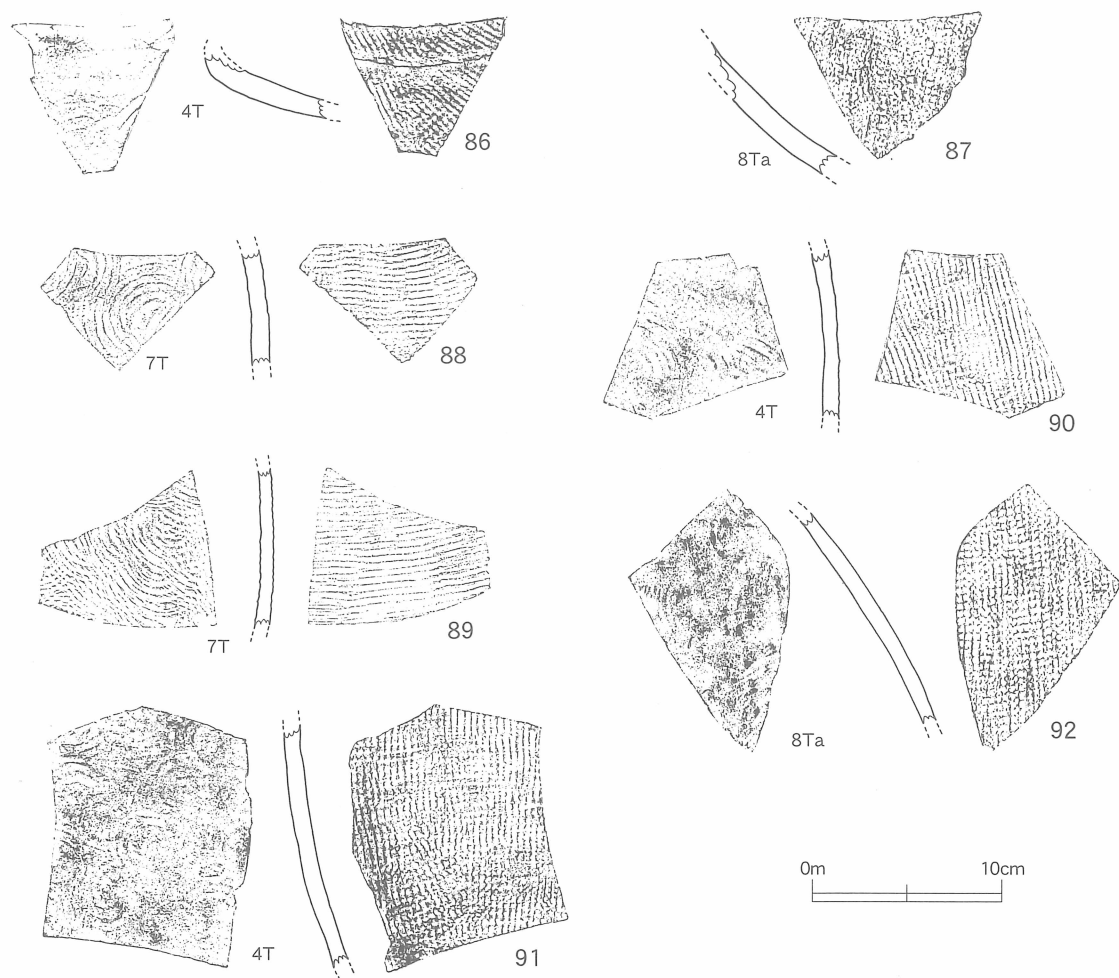
71～73は口縁部～胴部の破片である。71は撫で肩の肩部から大きく外反し、口縁部の上位で更に外方へ屈曲させ、口唇部をつまみ上げ若干鋭く仕上げる。口唇部から5.5cm下に肩部と口縁部の接合面が段となって明瞭に残り、又、口縁部では器面に数多くの焼きぶくれが表出している。調整は、胴部外面は格子目タタキ、内面は線の細い同心円タタキ後一部ナデ消し。口縁部外面はナデ後カキ目、内面は回転ナデで接合部付近はナデを施す。色調は、外面が暗緑灰色、内面が淡青灰色を呈す。胎土は比較的精良だが、長石粒子が多く混入しており器面が多少ザラつく。胴部の断面色調は淡紫色を呈す。復元口径22.6cm、頸部径16.8cmを測る。72は有蓋壺の口縁部破片で、立ち上がりは内湾した後上方に上がり、口唇部は丸く仕上げる。頸部には21本歯の原体が用いられ、振幅の小さな波状文が丁寧に施文される。調整は内外面回転ナデを施す。焼成は良好で、色調は内外面とも淡青灰色を呈す。胎土は極めて精緻で、断面色調は淡紫色を呈す。73は胴部破片で、形状や文様から有蓋壺と思われる。胴部中央には2条の平行沈線があり、その内側を文様帯としハケ状工具の先端角を用いて刺突文を密に施す。調整は、内外面とも回転ナデが施される。焼成は良好で、色調は、外面が暗灰色、内面が淡灰色を呈す。胎土は精緻。

74～82は器台の破片である。74は器台の脚部～坏部の破片で、脚端部を欠失し、坏の一部と脚部の1/4の遺存でしかない。坏部と脚部の接合面が明瞭に残っており、接合の省力化が伺える。脚部外面にはややにおい凹線が巡り、文様帯を3段に区画している。区画後、文様帯には6本歯の原体が用いられ縦長の波状文を施文する。施文後、1段目・2段目には三角形、3段目には長方形の透孔が開けられ千鳥配置となる。調整は、坏部内面がタタキ後ナデ、外面はタタキ。脚部は外面が回転ナデ、内面は上半が指オサエ後ナデ、下半が回転ナデを施す。色調は、外面が暗灰色、内面は暗青灰色を呈す。胎土は精良で、断面色調は淡紫色を呈す。75～77は脚端部の破片で、75は底径18.4cmを測る。凹線1条、貼付け凸線1条を巡らせ、凸線より上部を文様帯とし、9本歯の原体で縦長の波状文を施文する。文様帯には三角形の透孔がある。調整は内外面とも回転ナデを施す。焼成は良好で、色調は内外面淡青灰色を呈す。胎土は精緻。76は底径20cmを測る。調整は内外面とも回転ナデを施す。焼成は良好で、色調は内外面暗青灰色を呈す。胎土は精緻。77は破片資料で正確な数値は不明だが、底径は約40cm前後と思われる。大型であるが身幅は細い。2条の凹線を巡らせ、端部外面には2本歯の原体で波状文を施文している。文様帯は2cm程しかなく狭い。調整は、内外面とも回転ナデを施す。焼成はややあまく、外面は風化により白色化している。内面は淡青灰色を呈す。胎土は精緻。

78は脚部上位の破片。かなり細身で、上端部の直径は8cm未満である。におい凹線を境とし上下に文様帯を設ける。文様帯には特徴的な左に傾斜した波状文が施文される。各段には長方形の透孔が5方に配置され



第33図 出土遺物実測図〔1/4・1/8(68~71)〕



第34図 出土遺物実測図〔1/4〕

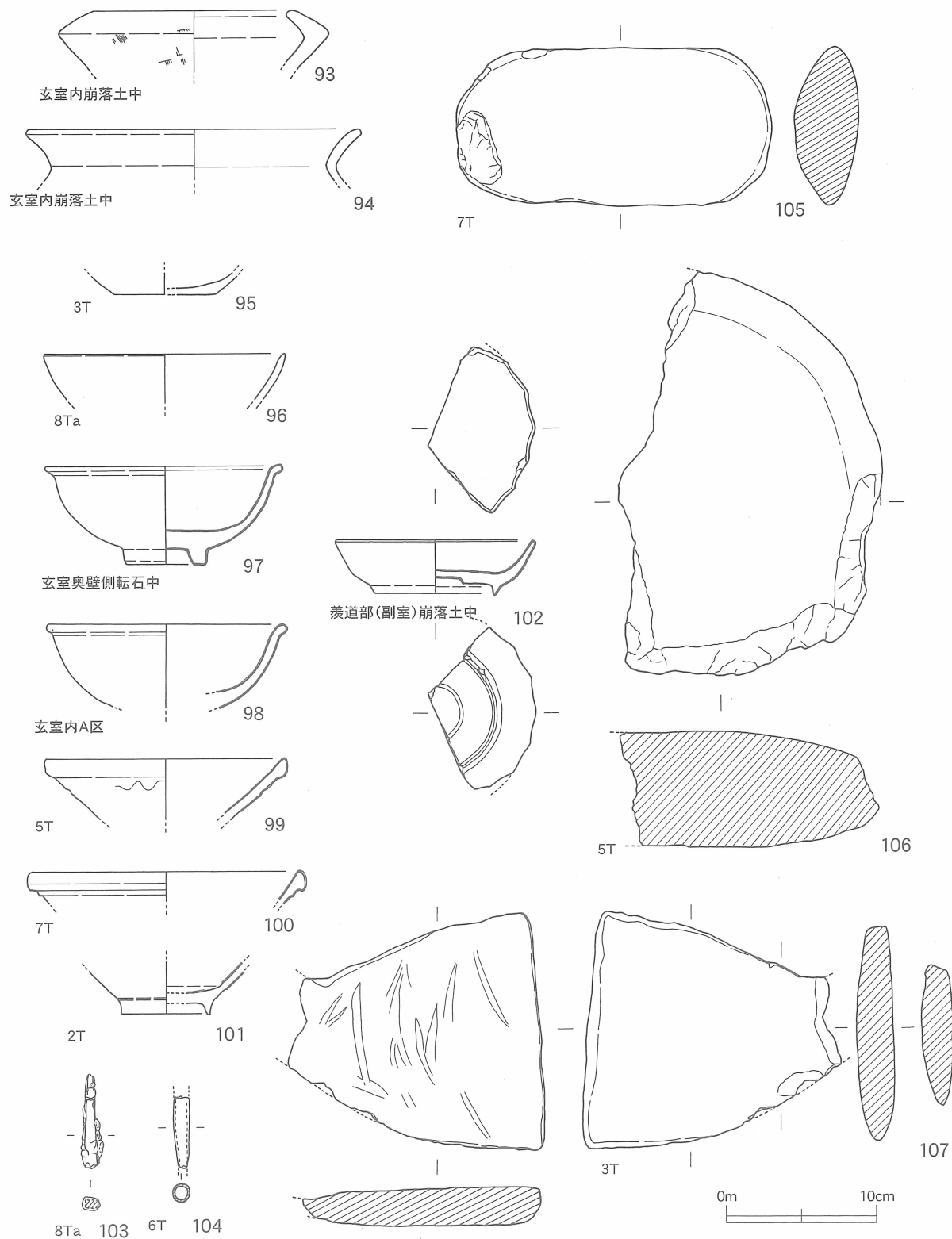
る。調整は、内面に回転ナデを施す。焼成は良好で、色調は外面で暗灰色、内面で暗青灰色を呈す。胎土は非常に精緻。

79～83は脚部が大きく開くタイプの器台である。79は坏部下半～脚部上半の破片で、坏部は1/5程の遺存である。坏部外面は格子目タタキ後上半にカキ目、下半はナデ消しを施す。内面は下半で指オサエ後ナデ、上半はナデを施す。脚部は外方に大きく内湾気味に開く。外面は凹線で数段に区画され、各段には波状文が施文される。施文後、最上段には長方形の透孔が4方に配置され、その下段には三角形の透孔が千鳥に配置される。調整は、内外面とも回転ナデを施す。焼成は良好で、外面暗灰色、内面暗青灰色を呈す。胎土には少量の長石粒子を含むが、精緻で断面色調は暗紫色を呈する。80は坏部底面～脚部上半の破片で、坏部はその殆どを欠失している。坏部内面は線の細い同心円タタキ後ナデ消す。脚部は外方に大きく直線気味に開く。外面は凹線で数段に区画され、各段には縦長の波状文が施文される。施文後、最上段には長方形の透孔が推定4方に配置され、その下段には三角形の透孔が千鳥に配置される。調整は、内外面とも回転ナデを施す。焼成は良好で、外面暗灰色、内面暗青灰色を呈す。胎土には少量の長石粒子を含み、断面色調は暗紫色を呈する。81は脚部上半の破片で、中位程からラップ状に開く。外面はシャープな凹線で数段に区画され縦長の波状文が施文される。最上段のみ縦方向が半分程度の波状文を重ね、長方形の透孔が推定3方に配置。その下段には三角形の透孔が千鳥に配置される。調整は、内面は上半が指オサエ後ナデ、下半が回転ナデ。外面は回転ナデを施す。焼成は良好で、外面暗灰色、内面暗青灰色を呈す。胎土は精緻、断面色調は暗紫色を呈する。82は81に類似するが、凹線はあまく、波状文の振幅が小さいことから別個体である。83は脚部が大きく開くタイプにしているが、諸特徴はむしろ74に類似している。仮に同一個体であれば、74と83の個体は脚部が4段以上の長脚タイプのものになる。

84は平瓶の底部破片で、底径は14.2cmを測る。体部外面はヘラ調整、内面は指オサエ後ナデ。焼成良好で、色調は外面が淡黒灰色、内面は淡青灰色を呈す。胎土は精緻。

85は小型の高坏脚端部付近の破片で、底径8cmを測る。下位で緩く「く」の字に屈曲し、端部は指で強くつまみ出している。調整は内外面とも回転ナデを施し、焼成はやや不良で色調は白灰色を呈す。胎土は僅かに黒雲母片を見るが、非常に精緻。

86～92は大甕、又は、中型甕の胴部破片で、86～88、90～92は外面格子目タタキ、内面は同心円タタキ後ナデ消しを施す。色調は暗青灰色を呈し、胎土に少量の長石粒子を含み、断面色調は暗紫色を呈す。87の内面は、ほぼタタキ痕跡が消える程丁寧に撫で消している。89は外面平行タタキ、内面には線の細い同心円タタキが密に入る。この個体だけ他と色調も胎土も異なり、焼成は良好だが内外面とも白灰色



第35図 出土遺物実測図〔1/4〕

を呈し、胎土は精緻で器面全体にシミ状の黒色斑点が見られる。

その他の遺物

93は袋状口縁壺の口縁部破片で、非常に厚い。下半部はハケ調整が施されている。全体的に褐色で胎土は荒い。94は甕の口縁部破片。やや薄手で口唇部を丸く仕上げ、口縁部の中位に僅かに厚味がある。全体が黄色気味で胎土は非常に荒い。2点とも弥生時代終末～古墳時代初頭の所産。95は土師器の坏で、底径6.7cmを測る。底部ヘラ切り後にナデ調整。色調は淡褐色。96は瓦器碗の口縁部破片で、復元口径16cmを測る。摩滅著しく調整等は不明。97・98は同一個体の龍泉窯系の青磁碗で、高台畳付及び高台内面の一部を除き、ほぼ全面に施釉され、やや黄色気味の緑色を発色する。復元口径15.8cm、器高6.5cm、底径5.3cmを測る。Ⅱ類か。99～101は白磁碗の破片。99の口縁は玉縁で、体部中位下は施釉されない。Ⅳ類。100は玉縁の直下に段を有する。Ⅳ類か。101の底部外面の高台と体部境に小さな段を設ける。外面の施釉は体部下半までで、高台と体部の境付近には施釉されない。内面では、内底面まで施釉した後、見込み部分を蛇の目状に釉剥ぎを行う。Ⅷ-3類か。99は復元口径16.2cm、100は復元口径18.6cm、101は底径6cmを測る。102は連弁口縁の染付小皿で、内面見込みと口唇部にコバルトが発色する。底部外面は、高台内側を釉剥ぎし蛇の目状に仕上げる。目跡が2箇所に残存する。江戸時代末期頃の19世紀前半～中頃の所産と考えられる。

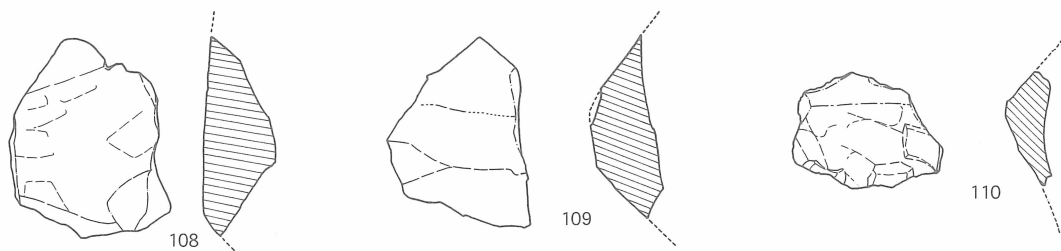
103は鉄製品の破片。鉄鏃の一部か。104は6トレンチのカクラン土中において出土した銅製品。厚さ1mm強の銅板を折り曲げ円錐状の筒に仕上げる。接合部は面を合わせ鍛打のみである。キセルの吸口部分であろうか。

105は片岩系の用途不明石器。下端部左側には縛縄痕状のくぼみがあるが、両端部分に研ぎ出しはなく斧等の加工具ではないと思われる。106は安山岩製で、表面中央には研ぎ跡の痕跡が残る。裏面の中央には敲打状の痕跡も認められる。107は安山岩系の用途不明石器。表面には平ノミ状、及び、溝状の工具痕が無数にあり、道具ではなく装飾品として製作された可能性が高い。右図の上下端部にはくびれ状の挟りをつけ、下端側には一部研ぎ出しも見られる。

阿蘇溶結凝灰岩 (第36図 PL7)

凝灰岩の破片は5・6・9・10トレンチにおいて、小破片も含め15点確認された。ここでは加工痕も含め、形態等に特徴あるものを3点選別し図化を行った。

108～110は阿蘇溶結凝灰岩の破片である。108は6トレンチで出土したもので、やや軟質で断面には軽石質のレンズ状粒子を含み、色調は淡黒灰色を呈す。断面三角形で、内一面に鑿状の加工痕がある。109は9トレンチで出土したもので、比較的硬質で軽石質のレンズ状粒子は見られない。色調は黒灰色を呈す。断面は台形状を成し、4面中3面に平滑化が見られるが明瞭な工具痕跡は確認出来なかった。図中の上面と中面の角度は 134° 、中面と下面は 142° 、上面と下面の交点は 98° を測る。110は10トレンチで出土したもので、比較的硬質で軽石質のレンズ状粒子は見られない。色調は黒灰色を呈す。断面は三角形で、内二面に平滑・工具等の加工痕が見られる。平鑿、及び、半円形の鑿状の工具が用いられている。二面の角度は 110° を測る。上面、下面とも加工時に僅かに反りをもたせており、小破片であり用途・部位の特定は非常に困難であるが、盾型の石製表飾品の肩部破片の可能性も考えて良いのではないだろうか。



第36図 トレンチ内出土凝灰岩破片実測図〔1/4〕

V 自然科学的調査

1 玄室左側壁の溝状刻み「刻線」について

佐賀大学 佐田 茂
八女市教育委員会 大塚 恵治

横穴式石室は第Ⅲ章の3で述べられているような構造をしているが、玄門より手前が諸般の事情で調査出来なかったのは惜しまれるが、玄室の平面プランは童男山1号墳、乗場古墳とさほど変わりはない。ただ両者と違うのは両側壁の腰石が鶴見山古墳の場合、一枚石でこと足りていることである。

右側壁の長方形の腰石に刻まれている刻線は、今のところ類例を捜すことが出来ず、解釈に苦慮している。刻線は断面三角形、幅約3cm、深さ約2cmと太く、装飾古墳に見られる線刻とは全く異なっている。

それぞれの刻線を具体的に見てみよう。

【縦線3本】 ◎奥から1本目の縦線は腰石上面で奥壁から35cm程の位置にあり、上端面から45cm程の長さで切れている。

◎奥から2本目の縦線は奥壁床面から70cm～75cm程の位置にあり、上面から下面まで直線で、床面の奥壁に平行する浅い掘り込みに合致するが、掘り込みは左側壁まで届いていなくて延長線にあるような感じになる。

◎奥から3本目の縦線は床面で奥壁から175cm～180cmの位置にあり、腰石の上面から下面まで真直ぐに延びている。刻線は深い。

【横線2本】 ※◎奥から3本目の縦線の床面から35cm～40cm程のところで、入り口の方へ横に水平一直線に袖石のところまで延びている。刻線は深い。

◎上記の横線の下25cm、床面の直上ぐらいのところに3本目の縦線から40cmほど離れたところを基点として、玄門袖の方向へ水平に延びている。袖のところまで引かれているか否かは確認出来ない。

※この内、最も刻みが深い縦線と横線は「⊥字形」につながっており、一見すると装飾を意識しているかのようにも見える。

何の為のものであるか、用途を考えると、先ず石室内装飾が思い浮かぶが、何を表現しようとしたものなのか的確なものが思い浮かばない。比較的太い刻線は福岡県久留米市の日輪寺古墳、熊本県熊本市の千金甲1号墳の石障の一部に見られる。日輪寺古墳では石障の上半分に線刻があるが、区画を限る上下の横線が比較的深く彫られている。千金甲1号墳は彩色が有名だが、線刻で輪郭をとっており、区画割りの下の横線が太い。

熊本県松橋町の宇賀岳古墳は凝灰岩を使用した石棺系石室で、両側壁の腰石を支脚として、奥壁に接して寄棟屋根形状の石材を乗せている。一見石棚状にも見えるが、奥壁にはかましていない。装飾は奥・両側壁に線刻で輪郭をつくった上に彩色で円形・三角形・平行線が描かれている。鶴見山古墳と比較出来るのは側壁の装飾で、屋形状の屋根より前面まで装飾がなされており、鶴見山古墳の「⊥字形」とは逆方向になるが、「⊥字形」に平行線がひかれ、上と下にそれぞれ1本の平行線がひかれている。この部分だけをとりあげると、鶴見山古墳の「⊥字形」と類似した文様とも言えるが、宇賀岳古墳では中に連続三角文、格子目文が描かれている。これは、あくまでも一部分のみを取り上げただけで、奥壁寄りの縦線の解釈には適当ではない。

鶴見山古墳の玄室床面には左側壁沿いに1条の溝が走り、この溝を基点として、奥壁と平行して2本の溝が走っている（「第Ⅲ章の3」及び第26図参照）。板石を立てていた痕とも考えられ、奥壁に近い溝は側壁の縦線の位置と合致し、中央付近の縦線は2本目の溝の延長線近くになることから、熊本県菊池市の袈裟尾高塚古墳のような側壁にしっかりとくつついた石屋形や、福岡県瀬高町の成合寺谷1号墳のような側壁から離れた支え石を持つ石屋形をつくるための設計図的な用途で刻み込まれ、中に福岡市の丸隈山古墳の箱式石

棺のように側板を共有する仕切りがなされていたことも想定できようが、これも全てを含んだ解釈ではない。

石切り加工の痕跡と考える場合には、石室構築とは直接関係なく、腰石に使用された石材を別の何らかの目的で厚い石・薄い石に裁断しようとして溝切りをしただけで、くさびを入れて割ることなく途中断念し、その石材を石室に転用したために不思議な装飾に見えてしまっている可能性もある。

もう一つは、江戸時代初期、田中吉政の福島城修築に際し付けられた溝切り痕と考える見方である。八女丘陵上に点在する数多くの古墳の石材は、この修築のためにその多くを取られている。岩戸山古墳の石人・石馬も転用されており、この鶴見山古墳の天井石も転用されている。玄室に使用されている大きな腰石も転用を目的として石材表面に溝切りし、楔を打ち込み割って移動させようとしたが、途中で搬出を断念した結果の痕跡とも思える。ただ、本刻線は石室構築の段階で既に彫り込まれていた可能性が高く、この考え方も決定的ではない。しかし可能性は排除しない。

6世紀末頃から奈良県飛鳥地方を中心に、岩屋山古墳や文殊院西古墳のような切石積・切石積風の横穴式石室、平尾山1号墳のような横口式石槨が現れる。百済の陵山里古墳群のようなものに関連が求められている。九州では福岡県福津市の宮地嶽古墳、手光波切不動古墳、大分県大分市の古宮古墳は関連づけて考えることができるが、筑後地方では知られていない。

刻線の太さだけで言えば、文殊院西古墳の扉を嵌めこむ装置と考えられる最前部の両側壁上部と天井石の溝は幅3cm、深さ1.5cmを測り、鶴見山古墳の左側壁刻線とあまり変わらない。

以上、鶴見山古墳の左側壁腰石に見られる縦・横方向に走る刻線について、何のためのものか可能性を考えてみたが、類例もなく、解釈は不可能であった。可能性として切石風を意識したもの、石材の切り出し途中の痕跡、石室形設置のためのもの、装飾文様の一種（「玄室内両側壁が持つ区分」については第Ⅵ章に別記している。）など考えてみたが、どれも一長一短があり適当ではない。さらに江戸時代初期の福島城修築の際の石材の搬出も考えなければならず、まだ闇の中と言わざるを得ない。類似したものが現れるまでの宿題としておきたい。

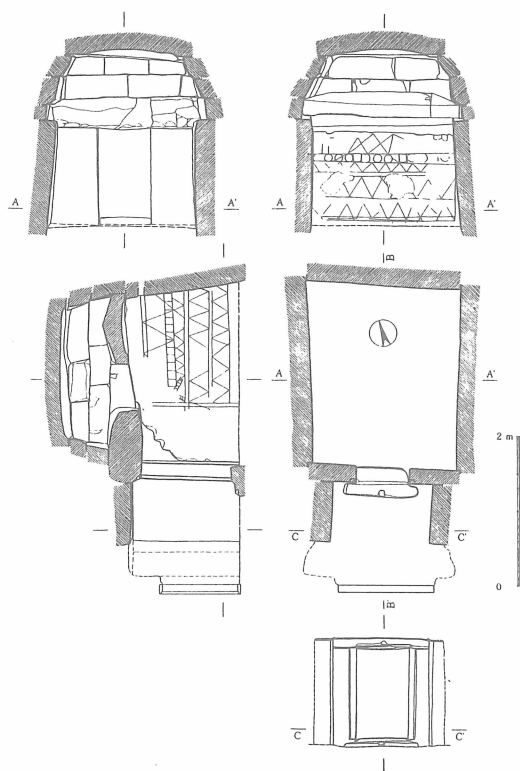
[参考文献]

高木正文編 1984『熊本県装飾古墳総合調査報告書』
熊本県文化財調査報告書 第68集

奈良国立文化財研究所飛鳥資料館編 1981
『飛鳥時代の古墳』

広瀬和雄 1995「横口式石槨の編年と系譜」
（『考古学雑誌』第80巻第4号）

河上邦彦 1995『後・終末期古墳の研究』



宇賀岳古墳の装飾文様（復元実測図）

2 八女市鶴見山古墳の石室をつくる石材の産地

福岡県立黒木高等学校 木戸道男

はじめに

八女市教育委員会が調査中の、鶴見山古墳の石室をつくる岩石の産地が特定できたので報告する（第1図）。産地の特定は、埋葬された豪族の支配権の広さを推定できる。

次の3つの観点から、石室をつくる岩石の産地を特定した。

- ① きわめて粗粒の角閃石安山岩であるという岩石学的特徴
- ② 石室の側面を形成する、縦2.5m、横4.0m、厚さ40cm、あるいはこれ以上の一枚岩が採れること。また、この広さできわめて精度の高い平面で割れること。
- ③ 重量約10トンの石材なので、できるだけ近い所で採集できること。

また、石棺をつくる岩石の地質学的位置づけと、鶴見山古墳が位置する東西に伸びた八女丘陵が生じた過程を論ずる。

岩石学的特徴

1 石室をつくる岩石の肉眼的特徴

風化面は黄土色から淡い褐色である。新鮮な面は多孔質な淡灰色、または緻密な灰色で、この2色が縞をなして流理構造（マグマが地表を流れると、地表付近が先に冷えて固まるので、その上を流れるマグマに地面と平行な縞ができること）を形成していることが多い。この流理構造に平行に板状節理（マグマが冷えるとき、体積が縮むため生じる平行な割れ目）を生じて、縦2.5m、横4.0mの広さできわめて精度の高い平面をつくっている。長さが7～8mmに達する角閃石や長径6～10mmの斜長石を含む、きわめて粗粒の特徴的な角閃石安山岩からなる。

2 顕微鏡観察による特徴

ガラス基流晶質（hyalopilitic：斑晶という大きな結晶のすきまをガラスを主とする石基が埋めている火山岩の組織）な含シソ輝石角閃石安山岩。石基には流理構造が見られる。

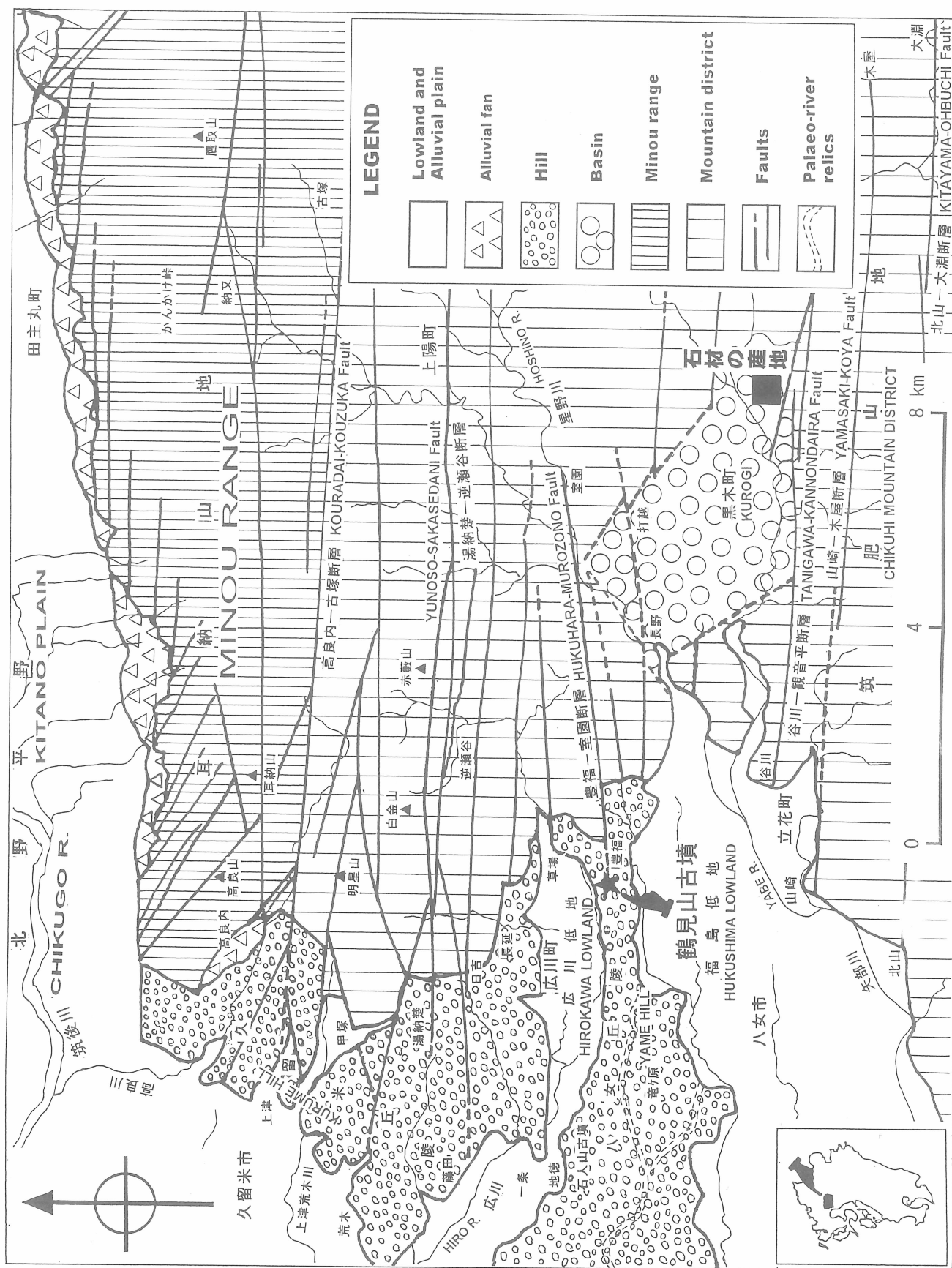
斑晶には斜長石と角閃石、まれにシソ輝石を含む。いずれも自形の結晶からなる。斜長石は長さが3～4mmの短柱状でアルバイト双晶やペリクリン双晶（双晶：何個もの結晶が結合して大きな結晶を作ること）が発達している。累帯構造（マグマの成分変化によって、形成される結晶の化学成分が、結晶の中心部から外側へ変化すること。）も発達し、化学成分の変化が何度も繰り返行われた波動累帯構造もみられる。長さが4～6mmに達する角閃石は、まれに双晶が見られる。自形の磁鉄鉱やシソ輝石の包有物（結晶の中に他種の結晶が取り込まれていること）を含むことがある。シソ輝石は長さ1mm程度の長柱状である。

石基は岩石全体の50～60%を占める。その約90パーセントが褐色のガラスからなっている。長さ0.1mm以下の斜長石を含み、その向きから斑晶の形成後に石基が流動したことがわかる。

石室をつくる岩石の産地の特定について

北部九州に分布する火山岩の中で、上記の肉眼的、顕微鏡下の性質に類似した岩石について吟味する。

類似した岩石は、筑後川水系では、日田市西端部夜明付近（第2図の★1地点）に大日ヶ岳火山岩類が分布する。しかし、含まれる輝石の斑晶の量が多く、流理が発達することがまれであるなど、性質がやや異なる。また八女市から70km以上の距離にあり、遠すぎる。



第1図 筑後地域の地形区分

矢部川と星野川の水系では、第2図の★2～★3と■地点に類似の岩体が分布する。★2の岩体は黒木町東端の星野村との境界の竹山を中心に分布している。古墳までの距離が遠すぎ、しかも深い山中に位置するので、ここから運び出したとは考えにくい。★3のものは、肉眼的には見極めが難しいが顕微鏡下では複輝石角閃石安山岩で、輝石の量が相対的に多いことで違いがみられる。■地点は黒木町女郎岳の溶岩流岩体である。この溶岩は石室をつくる岩石にきわめて似ている。肉眼的、顕微鏡的だけでなく、流理と精度の高い平面を伴う板状節理が発達している点も酷似している。またこの大きい岩片（車庫程度）が崩壊し、矢部川へ向かって崩落しつつある（写真1）。さらに黒木のこの地点から鶴見山古墳まで10kmほどである。もしも矢部川が洪水時にこの安山岩の岩片を下流へ流していたなら、矢部川との最短距離は3kmである。現在の矢部川には、石材となり得るこのての大きい岩体はみられない。

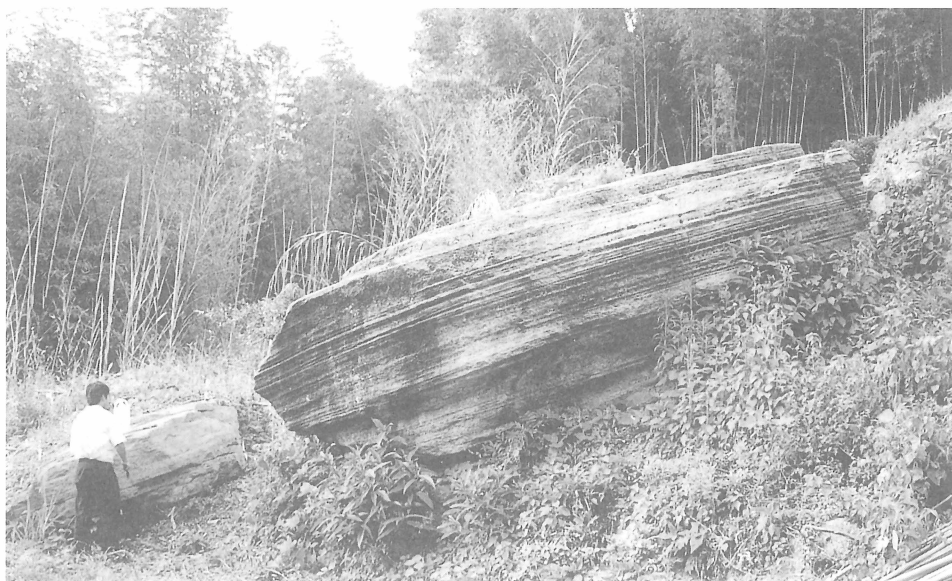


写真1 流理構造が発達しきれいな平面で割れる角閃石安山岩溶岩
斜面を矢部川に向かって崩落しつつある。黒木町女郎岳。

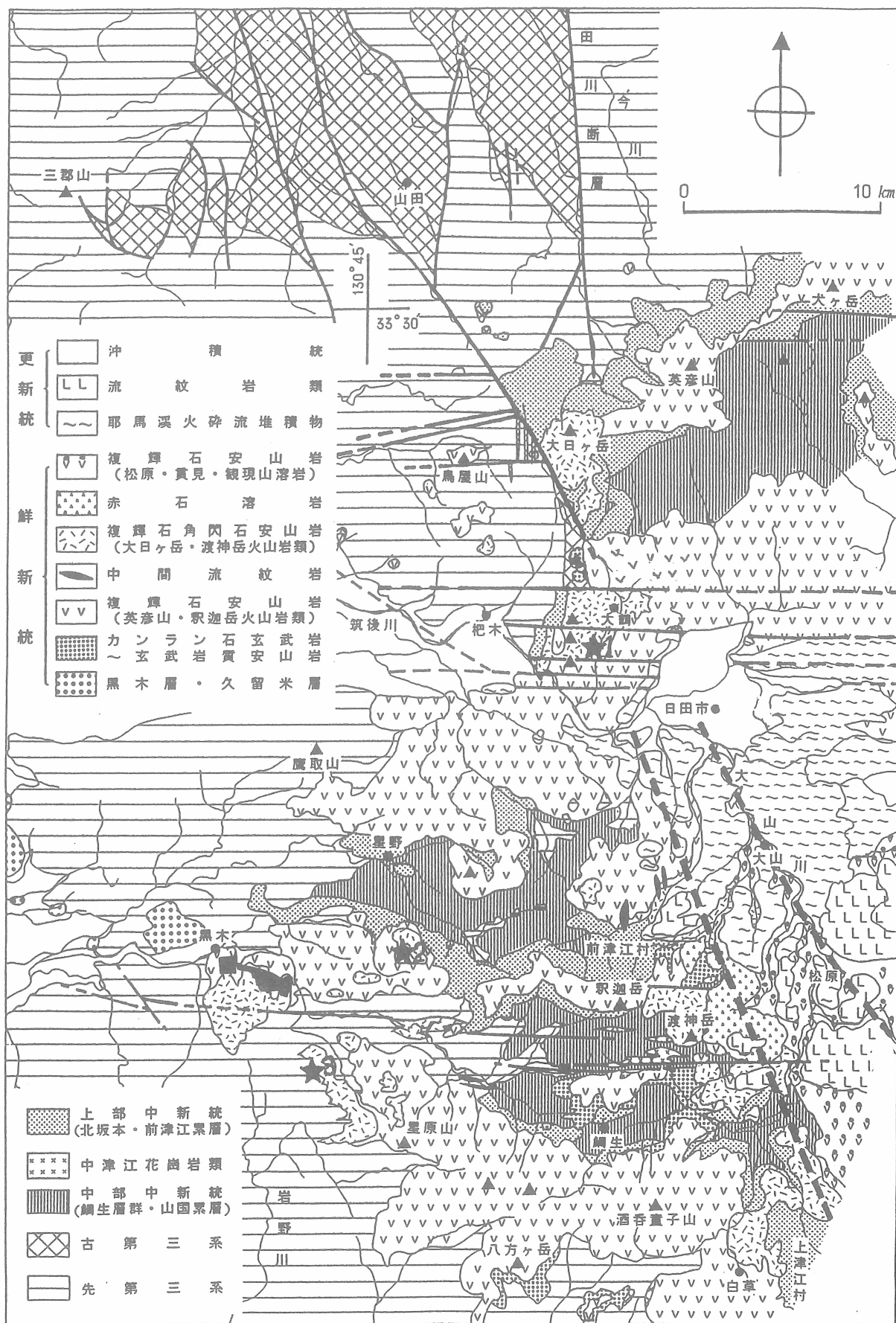
地 形

1. 八女丘陵と広川低地及び福島低地

八女地域には八女丘陵（図1）が広がる。八女丘陵は、その北側に広がる広川低地（海拔15～50m）より30～40m高く、海拔高度は50～70mである。東西の長さが8kmを越え、南北幅は500～2500mと変化に富み、特に西部がふくらんでいる。丘陵西部の上面には河川跡と思われる谷が、蛇行しながら大局的には東西に伸びている。なぜこのような東西に伸びた丘陵ができたかについては後述する。八女丘陵の南側に広がる福島低地の海拔高度は、広川低地より約10m低く、海拔25～35mである。平野の南端には北東から南西へ流れ下る矢部川が位置し、その南側には筑肥山地が広がっている。八女丘陵の東端部に鶴見山古墳が位置する。

2. 黒木盆地

福島低地の東方には、東西4km、南北2～3kmの、平行四辺形状の黒木盆地が位置する。黒木盆地の海拔は80～140mで、盆地の南と北および東方は海拔250～350mの山地になっている。黒木盆地の南東方に石棺を作る岩石に酷似する溶岩流が分布する（第1図）。



第2図 福岡・大分・熊本県付近の地質図
 鶴見山古墳石室の石材産地を■で、それに類似する岩体を★印で示した。
 番号は本文と一致する。

地 質

本地域の地質層序を第1表に示す。

1 筑後変成岩

本地域の土台を構成するのは、筑後変成岩（松本達，1958）である。筑後変成岩の変成される前の岩石は、古生代の石炭紀～二畳紀（約3億5千万～2億5千万年前）に海底で堆積し、中生代の三畳紀末～ジュラ紀初期（約2億年前）に変成された。堆積物の種類によって異なった変成岩になっており、炭質な泥岩は黒色片岩に、火山灰は緑色片岩に、泥岩は絹雲母片岩（表面が銀色に見える）になっている。

2 久留米層

基盤の筑後変成岩を不整合におおって久留米層が分布する。湖成堆積物で、八女市の地表にはほとんど分布しない。下部層から400万年と450万年の年代がえられている。

時 代	地 層 名	層 厚
更新世後期～現世 (40万年前～現在)	沖 積 層	
	段 丘 礫 層	20 m以下
	扇 状 地 堆 積 物	20 m
	阿蘇火砕流堆積物	30m
鮮新世後期～更新世初頭 (200万～150万年前)	上津荒木礫岩層上部層	40 m以上
	上津荒木礫岩層下部層	25 m
鮮新世前期（～中期） (450万～350万年前)	角閃石安山岩溶岩	75 m以上
	久留米層上部層	200 m 以上
	久留米層下部層	110～130 m
三畳紀末～ジュラ紀初期	筑 後 変 成 岩	4000m 以上

第1表 八女・広川地域の層序

3 角閃石安山岩溶岩

黒木町の女郎岳からグリーンピア八女付近一帯、竹山、剣持などに離れて分布する。溶岩流の堆積物から成り、流理と板状節理が発達している。基本的には角閃石安山岩であるが、分布地によって含まれる輝石斑晶の種類と量が異なる。

4 上津荒木礫岩層

上津荒木礫岩層は、久留米層を不整合におおっている。

上津荒木礫岩層は八女丘陵に広く分布し、黒木盆地およびその東方まで追跡できる。上部層と下部層とに分けられ、両者は漸移的に変化する。下部層は主に中礫からなり、礫の構成比が輝石安山岩10～40%、石英片岩20～40%、絹雲母片岩20～35%である。上部層は大礫が主で巨礫を多く含む円礫からなり、礫の構成比が輝石安山岩60～90%、石英片岩3～10%、絹雲母片岩10～20%、珪化安山岩3～10%である。含まれる珪化岩は、津江地域の鯛生層群に伴う珪化帯の岩石に酷似する。全層厚が65mに達している。上津荒木礫岩層には含まれる流紋岩質の凝灰岩から200万年と150万年の放射年代をえた

5 扇状地堆積物。阿蘇火砕流堆積物および段丘礫層

上記の地層をおおって、扇状地堆積物。阿蘇火砕流堆積物および段丘礫層が分布している。

八女丘陵の生い立ち

1 八女丘陵にみられる土石流堆積物の堆積原因

200万年前頃になると、黒木方面から巨大な土石流が何度も流下してきている。土石流堆積物の現存する総量は約3 km³で、堆積当時はこの数倍が想定される。追跡できた流下経路は、黒木盆地から八女市東部の長野・山内を経て、八女市豊福および広川町一応付近で八女丘陵に入り、西流して九州大谷短大・J R鹿児島本線西牟田駅付近に達し、そこから流路を北方向へ変え、久留米市荒木・高良台をへて、久留米競輪場の北方に達している。

200万年前頃になぜ土石流堆積物が流れ下ってきたかについては、北部九州全体についてみてみる必要がある。当時、北部九州には津江山・万年山・宝泉寺・久住を取り巻くように、久留米地域（上津荒木礫岩層）、黒木地域（小寄礫岩）、浮羽地域、日田・山国地域、安心院南方地域、大分・犬飼地域に礫岩を主とする堆積物が分布している。これらの堆積物は、いずれも350万～150万年前の堆積で、基本的に巨礫を主とする土石流堆積物からなっている。この分布は、次の時期に陥没を起こす「九重―別府地溝」地域の周辺にあたっている。このことは、後に九重―別府地溝が位置する地域となる津江山から玖珠町南部が、かつて、今より遙かに高い山地であったことを意味する。礫岩の分布高度（海拔700m前後にも分布する）からすると、礫を供給した山地は1000mをはるかに越え、2000m級に達していたと思われる。

2 八女丘陵の形成史

上津荒木礫岩の土石流の流路は、現在の地形分布では決して説明がつかない。とくに現在の福島低地に当たる地域には、流路を妨げる変成岩からなる小高い丘があったと考えざるをえない。その名残の変成岩の高まりが福島低地北西方の岩崎や岡山の丘陵にみられる。また福島低地では、土石流堆積物は見られないで、基盤の変成岩に薄い砂利層がのっているだけである。

それでは、どのようにしてこの変成岩からなる小高い丘が福島低地に変貌したのか。この出来事は、150万年前より新しい時期に起こった。土石流を流した後もしばらく古矢部川はこの土石流堆積物分布地域の南部を西へ、筑後市前津付近からは北西へと流れていた。八女丘陵の南西部に広がる龍ヶ原の台地には、古矢部川の流路あとがみられる。その後、福島低地地域の沈降に伴い、土石流流路の南部を流れていた古矢部川は次第にその流路を南へ移動させ、最終的には現在の位置に変えていった。この流路の移動の途中にあった小高い丘などは、古矢部川の浸食によって削られた。古矢部川の過去の浸食によって、龍ヶ原の台地の東部や南部の曲線で限られた地形が説明される。

一方、八女丘陵の北側の広川低地の形成は、過去において、より北方にあった広川の流路が南へ移動したことによって説明できる。

広川と矢部川の流路が南へ移動した理由は、約30万～40万年前頃から、有明海が拡大してきたことにある。このため、八女・広川地域の大地は南へ傾いた。それにつれて、広川と古矢部川の流路がしだいに南へ移動していき、最終的に現在の流路になった。

約8万年前に、阿蘇山が大噴火を行い、九州全域へ火砕流を流し出した。このとき、九州の陸上にすむ生物は、ほとんど死滅した。本地域もこの火砕流におおわれた。

文献

- 福岡県地盤図作成グループ, 1981, 福岡地盤図. 九州地質調査業協会, 1-174.
唐木田芳文・早坂祥三・長谷義隆, 1992, 日本の地質「九州地方」. 共立出版.
木戸道男, 1993, 「九重―別府地溝」北西縁部の地質構造形成史. 地質学論集, 41, 107-127.
木戸道男, 1997, 北部九州, 耳納山地と北野平野の断層形成史. 地質雑, 103, 447-461.
国土庁土地局国土調査課, 1970, 20万分の1土地分類図(福岡県)及び同説明書, 1-58.
松田高明・竹村恵二・岡崎美彦, 1981, 黒木層軽石凝灰岩のフィッシュン・トラック年代―旧象化石産出層準に関連して―北九州市立自然史博物館研究報告, 3, 85-92.

- 松本達郎, 1958, 筑紫山地変成岩地域の地質. 鈴木醇教授還暦記念論文集, 141-161.
- 野井英明・伊東佳彦, 1991, 筑後平野地下に分布する更新統の花粉分析—泉州沖層群・大阪層群との対比の試み—. 地雑, 97, 171-174.
- 沢村昌俊・田中豊俊・千足恭平・鹿田昭男, 1983, 久留米層最下部層中の凝灰岩に含まれるジルコンのフィックション・トラック年代. 地質雑, 89, 129-131.
- 浦田英夫, 1958, 福岡県久留米南方の新第三系について. 九大教養地研報, 5, 25-37.
- 浦田英夫, 1985, 福岡県久留米・黒木地域新第三系再論. 九大教養地研報, 24, 13-30
- 浦田英夫・小原浄之介・唐木田芳文・田中豊俊・千足恭平・鹿田昭男・沢村昌俊, 1982, 5万分の1土地分類基本調査「久留米」. 福岡県.

3 鶴見山古墳出土金属器の保存科学的事前調査について

福岡市埋蔵文化財センター 比佐 陽一郎

はじめに

鶴見山古墳から出土した金属器について保存科学的見地からの事前調査を行ったので、その結果を記す。事前調査とは本来、保存処理を行うにあたって資料の腐蝕、劣化に関する情報を得るといった診察的意味合いが大きい、その中には自然科学的手法を援用した考古学的情報の収集という作業も含まれている。今回は、資料に対する保存処理は行っていないが、上記の情報収集を中心とした作業の結果報告である。なお資料の番号は今回の調査に当たり筆者が任意に設定したものである。

調査方法について

事前調査は肉眼観察、つまり可視光線による等倍の情報取得が基本となるが、当然そこには限界があり、その補助として可視光線以外の領域の電磁波（ γ 線、X線、紫外線、赤外線）や、レンズなどを用いた手法が有効となる。その中で今回用いたのは透過X線撮影装置、蛍光X線分析装置、実体顕微鏡、ビデオマイクロスコープ、電子顕微鏡などである。

透過X線撮影装置は、試料に可視光線よりも波長が短くエネルギーの高い電磁波であるX線を照射し、X線の吸収、透過の度合いを何らかの方法（通常はフィルムなど）を用い可視化することで、試料の厚さや密度の違いを見極めるものである。これによって可視光線では見ることのできない内部の構造や腐食の状態を観察することが可能となる。今回用いた装置は日本フィリップス社製：MG226で、資料を透過したX線をイメージ・インテンシファイア（I. I）という機構を通し、電気信号に変えてモニターで観察することができる。このためフィルムでは現像などの処理を行わなければ結果が分からないが、照射と同時にリアルタイムで状態を観察することができるメリットがある。

蛍光X線分析装置は試料にX線を照射し、含有する各元素から発生する二次X線（特性X線）を検出器でとらえてX線エネルギーとその強度をピークとして表すものである。つまり、試料にどのような元素が（定性分析）どの程度の量含まれるか（定量分析）を知ることができる。ただし、検出可能な元素はナトリウム（Na）からウラン（U）までと限られており、自ずと金属や鉱物など無機物が対象となる場合が多い。また注意を要する点として、蛍光X線分析で定量分析を行う場合には、対象となる試料の表面が平滑で元素が均質に混じり合っていることが前提で、更に標準試料を用いた校正が不可欠で、不均質で表面が凸凹の試料は、一旦粉末化し、更にガラスビードと共に溶解して均質・平滑なサンプルとして加工してから分析に供される。しかし文化財を対象とする場合、非破壊が前提である上、古代の製品は現代の工業製品や実験室レベルで作られたサンプルと異なり手工業製品のため、この時点で均質・平滑という条件が満たされることは、まず皆無であろう。更に埋蔵文化財では特に埋蔵環境下での腐食による組成の変化、埋土など周辺環境からの汚染など、不適切な条件が重なっており、このような状況で定量値を算出しても、それがどの程度資料本来の組成を反映しているか不明である。しかし、そのような条件下でも意味のあるデータは含まれており、それらを選択して活用すれば十分に成果は得られる。今回は元々標準試料を有していないこともあり、定性分析による成果を中心に示すこととする。

装置は、対象資料が小さい物が多くその中でも細かい部分ごとに作業を行うために、微小領域用エネルギー分散型装置（EDX）を用いている。装置の仕様は以下の通りである。

装置：エダックス社製（Eagle μ probe）／対陰極：モリブデン（Mo）／検出器：半導体検出器／印加電圧：20kV・電流：任意／測定雰囲気：真空／測定範囲0.3mm ϕ ／測定時間120秒

実体顕微鏡以下の3装置は光源や拡大の方法が異なるものの、いずれも資料を拡大して観察する装置である。拡大観察によって得られる情報が増大することは言うまでもない。

なお対象とした資料は馬具類を中心とした鉄器と、鏡片と見られる青銅器片、約40点弱である。情報の中には埋土や腐食生成物の除去を行った後の方が、より正確、明瞭に得られるものもあるが、いわゆるクリーニング作業が遺構の発掘調査と同じように、作業自体が資料ないし情報の破壊に繋がることも否めない。特

にここでは出土後、何も手をつけない完全非破壊状態で作業を行い、どのような情報が得られるかを提示する試みとしたい。

調査結果

まず馬具類に分類される資料は、やや不確かなものも含め20点ほどある。

No. 1は鏡板あるいは杏葉の吊金具と考えられる資料である。吊り手部分に続く帯状の部分は途中で折れているが、その中に鋳が配されている。鋳は吊り手側に2列2段、方形に配されたものと、破断面端部際中央に1点の計5点が確認できる。方形に配された鋳の内側は腐蝕のためか不自然な盛り上がりが見られ、この部分にも鋳が内包されている可能性も考えられたが、透過X線では特に鋳あるいはその痕跡は確認されなかった。また肉眼や実体顕微鏡観察の時点で既に表層の破損部分から薄い緑青の膜や鍍金層が覗いており、資料の外形とも併せて鉄地金銅張であることが予測された。実際、蛍光X線分析では鍍金の露出部分で鉄の他、銅、金が検出されている。また微弱なピークとして銀やヒ素¹⁾と思われる元素も認められる。

組み合わせ式の辻金具部材は中央の方形部材1点と脚にあたる部材3点の計4点ある。脚の部材3点は細かく見ると、平面形が五角形のもの(No.16)、先端に突出を持たず緩やかにカーブする爪先形(小ハゼ形)のもの(No.06)、その中間的形状の栗の実形のもの(No.05)と全て異なる形状を呈する。このうちNo.06では部分的に明瞭な鍍金層が認められ容易に鉄地金銅張であることが窺えるのに対して、他の部材は表層が剥離して消失するか、土や錆に覆われている。これらが一連のものであれば全て同じ鉄地金銅張であろうが、脚の形状が微妙に異なることもあり念のため表面分析を行った。結果、No.16の表層が剥離した箇所では銅とともに明瞭な金と水銀のピークが認められたものの、他の部材では微弱な銅が検出される程度であった。またNo.05には貴金具と見られる部材が残存しており、現状では鉄錆に覆われているもののこの部分で銀と銀の腐蝕生成物に含まれる臭素のピークが認められた。一方、中央の方形部材にも一辺に貴金具が残存するが、こちらでは若干の銅が認められる程度であった。判然としない部分もあるが、金具本体は金銅装、貴金具は銀装という姿が想定されよう。

また2.5cm角の大型方形で、5点の鋳がX字状に配された帯金具もある。これにも断面が蒲鉾形になる貴金具が一箇所付属している。鋳は錆による変形と見紛う様なものもあるが、透過X線で明瞭に確認できる。貴金具、地板、鋳頭各箇所では材質分析を試みたが、貴金具で銅が認められる以外は特に加飾に係る元素は検出されていない。

断面矩形の鉄棒を環状にした部材に帯金具の脚が付属した構造の辻金具、もしくは雲珠破片もある。帯金具基部には貴金具が見られ、この部分では若干の銅が検出されていて加飾の可能性が想定される。また帯金具部分でも微小な銅と見られるピークがあるが、存否の判断は困難である。

その他、幅1.5cm程の小型の帯金具と目されるものがある。No.18・19はほぼ正方形で鋳を四隅に配し、一辺に貴金具が残存する。いずれも鋳頭や貴金具上で銀が検出される。No.09も一部を欠失するものの同様の形状である。ところが、こちらの資料では加飾を示す元素の検出はない。

これ以外にも貴金具のみの破片や極部分的な残存で帯金具と考えられるものも数点ある。No.21は鋳1点と貴金具のみの残存で、鉄の他に亜鉛らしきピークが見られる。しかし過去、この時代の資料で亜鉛の使用が明確になっているものはなく、ピークが微弱であることと合わせ資料に本来含まれる成分が十分に吟味する必要がある。No.22は貴金具のみの破片で、裏側で銀が検出されている。

幅5mmほどの細長い金属板に鋳が打たれた部材が2点は、いずれも両端が欠失し1cm程しか残存していないが、鞍の磯金具を縁取る部材などが想定されよう。肉眼では鉄錆に覆われ加飾痕は認められない。いずれも地板は鉄のみであるが鋳頭からは銀や臭素が検出されており、鋳が銀で加飾されていたことが分かる。

No.25～28は厚さ1mmに満たない鉄板に鋳が打たれた破片で、裏面には木質らしき有機質が付着する。25が最も大きく、片側端部は若干折り返されている。また26は僅かに湾曲する。馬具か否か判断が難しいが、馬具であれば鐙の補強板、そうでなければ胡鍍金具といったものが想定される。分析では地板、鋳ともに加飾を示す元素は見られない²⁾。他にも同様に木質が付着した薄い鉄板で、鋳が観られないものも数点あるが、これらの分析は行っていない。

次に馬具以外の資料について記す。

No.29は厚さ1mm強、幅1.4cm程の鉄板が若干湾曲した部材である。表面に加飾は認められない。内側には

木質が良好に残存し、顕微鏡では放射組織や導管が観察され、広葉樹環孔材であることが分かる。それ以上の同定は専門家に譲る。形状や木質の付着状況などから鉄刀の鞘金具などと推測した。

石室A区より刀子片が出土している。切っ先部分を欠くものの茎上に有機質の柄が半分程度良好に遺存する。鹿角に見えるが特に科学的調査の手段が無く断定は避ける。保存科学的には安定した状態と見受けられる。

No.35、36は他と違い銀灰色の本体に緑青が吹いており、一見して銅あるいは青銅製品であると推測される。双方とも数cm大、厚さ1mm程の板状で、周囲は全て破断面（いわゆる「死んでいる」状態）となっている。また平面部分は両面共に分厚い腐蝕生成物や様々な付着物が覆い、本来の表面の観察を阻害しているため、一見何であるか分かりにくい。しかし透過X線観察では35において、細い凸線で描かれた二重の円弧が観察され、蛍光X線による本体の材質分析では銅、鉛、錫の主要成分の他、ヒ素、銀、アンチモンといった元素の極微小のピークが認められる。これらの成分的には弥生～古墳時代に通有の青銅器として特に齟齬を来さないものであり、以上の内容からこれらの小片は鏡の破片であると考え得る。

興味深いのは、その付着物である。まず明瞭に判別できるものとして布（織物）がある。両方の破片に付着、残存し、双方とも平織りの布である。35では折り目が詰まった比較的太い糸の布がわずかに認められる程度であるが、36では35と似たような布の他、折り目が粗く糸が細めのものや、部分的に幾重にも折り重なった箇所も見られる。織りの粗さや糸の太さの差異は別種の布と考えられなくもないが、腐食による「痩せ」の可能性も考えられる。いずれも残存範囲が狭いため、織り密度の復元は困難である。糸の太さは太い部分で0.15mm前後、細い所は0.1mm前後である。また繊維の種類についてであるが、非破壊分析では赤外分光光度計による分析、電子顕微鏡による繊維断面形状の観察などが手段として考えられるが、前者は今回行っておらず、後者も観察を試みたものの断面が観察できるような部分は探し出せていない。繊維の太さや撚りの少ない状況からは絹の可能性が考えられるが断定はできない。今後、状況が許されるならば、微量な資料採取による調査が期待される。

次に束になった繊維状物質についてであるが、鏡片の片側、比較的広範囲に付着が認められる。織り目はないものの、数十本単位でまとまり、同じ方向性を示している部分もある。今回、分析的な手法による調査は行っておらず、この物質の同定には至っていない。ただ、電子顕微鏡やデジタルマイクロスコープを用いた画面上での計測によれば1本の繊維質の太さは70～80 μ 程で、これは人間の髪の毛の太さと同等である。腐食が著しいようで、健全な頭髮に見られるような特徴的な組織などは見だし得ないが、鏡は通常、被葬者の頭部付近に副葬されるものであり、この繊維状物質の束が被葬者の頭髮である蓋然性は高いと考える。

もう一つは長さ4.5mm前後、幅1.5～2mm程度を計る楕円形をした繭のような形状の窪みが形成されている。これが双方共に10個前後確認できる。当初、何かが付着して鏡の腐食により緑青に取り込まれた状況とは認識したものの、何であるか皆目見当が付かなかったが、九州大学教授田中良之氏による愛媛県葉佐池古墳出土人骨の調査報告によく似たものが示されているのを知った（田中2003）。これはハエ囲蛹殻とされており、葉佐池古墳では5mmに満たない小型のものと、5～7mm大の大型のもの二種類が人骨に多量に付着しているのが確認されている。今回、鶴見山の事例を田中氏に実見していただき、大きさや長軸に直行する条線を有する特徴などからヒメクロバエ属のものと思われるとのコメントを頂戴した。ヒメクロバエ属は新鮮な死体ではなく腐肉にたかり、動物実験でも死後3～4日後にあらわれるとされる。田中氏は古代の殯について検討する中で、ハエの産卵繁殖は光や開かれた環境が必要であることや人骨関節の状態などから、遺骸が一定期間オープンな環境におかれた後、埋葬されたこと、そして全てではないにしろ確認できる事例からは、その期間がそれほど長期ではなく『日本書紀』や、いわゆる『魏志倭人伝』に記されている8～10日程度に近い日数という結論を導き出している。この考察を鶴見山例に当てはめれば、やはり死後数日間、遺骸が腐敗する程度の日数オープンな環境に置かれ、その間にヒメクロバエが集散し遺骸に産卵、孵化。その後、埋葬と共に鏡などが副葬され、ハエの幼虫（つまり蛆）は鏡の表面で蛹となり、その痕跡が残存したということになる³⁾。伊弉諾尊と伊弉冉尊の黄泉国説話を彷彿とさせる想像するにおぞましい様子であるが、学術的には葉佐池古墳の事例と共に、殯についての手掛かりとなる貴重な例と言えよう。

鏡の付着物として最後に、No.35における赤色顔料について記す。片側面に顔料と見られる赤色粒子の付着箇所が点在し、顕微鏡でも鮮やかな赤色の微粒子が凝集した様子が観察できる。蛍光X線分析では明瞭な水銀のピークが検出されており、この顔料は硫化水銀の結晶を主成分とする「朱」であると考えられる。

石室以外ではトレンチ出土資料として、板状および中央が頭裁円錐形に突出した鉄器がある。しかし双方とも透過X線観察でも肉眼で見える以外の構造物はなく、用途を知る手掛かりは得られない。ただ、腐蝕の進行状態を見るとブロック状に亀裂が入っており、経験的に元々鑄造品であったことが推測される。時代を含め検討を要する資料である。

なお鉄鏃や微小な破片については調査を割愛している。

おわりに

今回は出土直後の状態での調査ということで得られる情報に限界があり、推測や曖昧な判断をせざるを得ない部分も多々あるものの、特に鋳飾りを中心に装飾の存在を明らかにし得たものも少なくない。これらの中には既に考古学的に十分吟味され、自然科学的調査を経るまでもなく装飾の存在が予測されるものがあることも確かであるが、グレーゾーンの資料を炙り出すためにも決して無駄なものでもないであろう。

通常、鉄を基盤とする製品は、特に馬具を中心に、肉眼観察、あるいはやや進んで実体顕微鏡観察によって金銅張などの明瞭な装飾が認められれば、十分に注意して策を講じた保存処理が行われ報告書にもその旨が記載される。しかし、逆にそうでなければ鉄錆に覆われた帯金具などが見た目どおり「鉄製」として報告されている例は決して少なくないであろうし、人のことをとやかく言う以前に自分自身が安直に判断を下した経験を懺悔しなければならない。更に自戒の念を込めて言うならば、恐ろしいのは、これらが文字による情報の歪曲のみに止まらず、保存処理が行われる場合、肉眼で見えない情報は無いものとしてエアブラシやグラインダーの犠牲になる可能性を秘めているという点である。鉄錆は特に原形を大きく改変している場合が多く、元の姿を取り戻すために整形外科的な治療が行われやすい資料である。しかし鉄製品の中には、目に付きやすい金を用いた装飾以外にも銀、さらにはそれ以外の金属による装飾もあり、これらは金よりも腐食の影響を受けやすく肉眼的には残存しないものも多いと思われる。これら見た目には残りにくくても分析などによってのみ現れる装飾の痕跡を如何に残し、見せるかという問題は、保存科学分野における今後の課題である。

また上記の問題とは別に、青銅鏡破片などは様々な付着物があり、そこに多くの情報の含まれていることが確認できた。鏡の文様をより鮮明に可視化するために表面の付着物を除去することは、下層の遺構を確認するために上層の遺構を破壊しながら発掘する状況と酷似する。通常、発掘現場ではこのような状況は日常的であり、その際は上層の遺構を十分精査し更に検討を重ねた上で、そのまま下を掘らずに残す、あるいは記録を残した上で下層の調査を行うという選択が行われる。この鏡片の場合にも、今回得られた情報を基に、現状をそのまま残すという選択肢も含めた保存処理の方針が決定されるべきであることは言うまでもない。

小文を記すに当たり、九州大学田中良之教授にはハエの蛹について同定を含めたご意見と、殯に関する有意義なご教示を頂きました。末筆ながら記して感謝を申し上げます。

註

1) このピークは10.5keV付近に当たり、ここはヒ素のK α 線と鉛のL α 線が表れる部分のため、鉛が含まれる可能性もある。通常はエネルギー値の異なるK β あるいはL β 線を見て判別するが、微弱なためどちらか確認できない。しかし過去の調査で古墳時代の耳環の芯材などの銅製品にはヒ素が含まれるケースが多いことからここではヒ素と仮定しておく。

2) 8.04keV付近に微弱なピークがあり、ここは銅のK α 線の部分に相当する。しかしピークは非常に微弱で、加飾の痕跡として検出されるものと明らかに強度が異なっている。同じ石室からは青銅製品も出土しており、こういったものとの接触や土壌汚染などの影響を考えるべきであろう。

3) これについても田中氏にご教示いただいた。

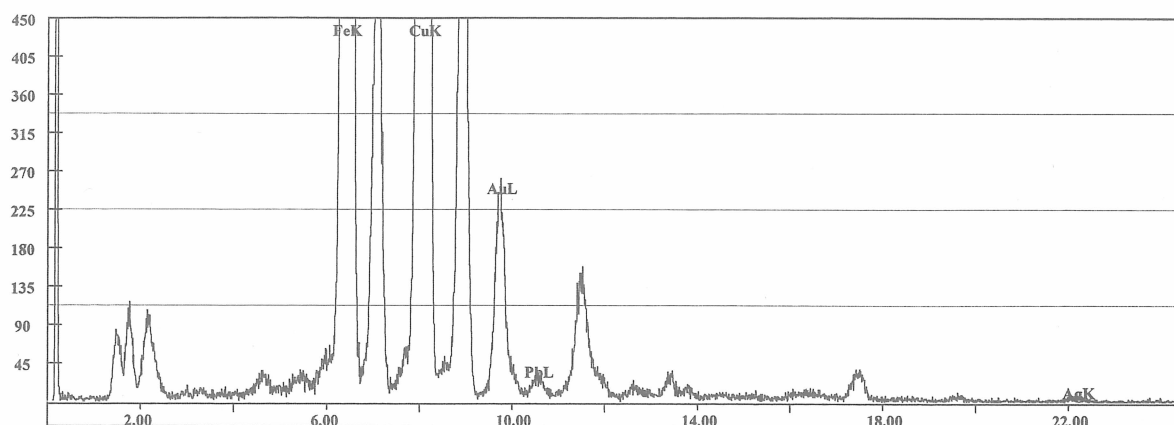
文献

田中良之2003「人骨およびハエ囀蛹殻からみた殯について」『葉佐池古墳』松山市文化財調査報告書92 松山市教育委員会

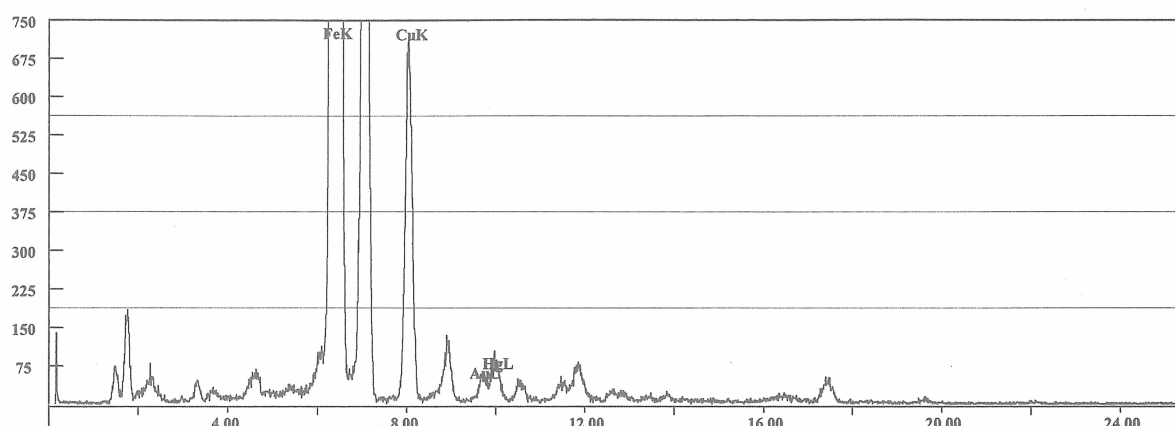
No	ラベル記載内容	資料名	概要	調査内容			調査所見(材質分析を中心に)
				透過X線	顕微鏡	蛍光X線	
1	玄室排土中2003.12.08	馬具：杏葉?吊金具	鉾が5カ所残存。表面腐蝕層が剥離した部分より緑青や金が見える。	○	△	○	鍍金残存部にて鉄、銅、金と微弱な銀、ヒ素または鉛と見られるピーク有り。他の部分では土、錆により微弱な銅が見られる程度。
2	玄室排土中2003.12.08	馬具：辻金具片	構造の詳細は不明。何らかの有機質が残存。	○	△		
3	玄室排土中2003.12.08	馬具：辻金具片	環状の金具に脚、責金具が組合う。有機質らしき物質が付着。	○	△	○	責金具上で鉄の他に銅を検出。脚にあたる部分の平坦部でも銅のKα線部分にピークがでる。
4	玄室排土中2003.12.08	馬具：組合せ辻金具中央部	方形の金具の一边に責金具が、裏面にはL字に曲がる鉄脚が付属。土、錆に覆われ加飾痕は見えない。	○	△	○	責金具破断面にて弱いながらも銅が認められるが、他の部分ではKα線のみの検出。
5	玄室排土中2003.12.08	馬具：組合せ辻金具脚	平面栗の実形の金具。表面は平滑で部分的に黒色化。	○	△	○	責金具部分で明瞭な銀を検出。表面平坦部では銅の他に素或いは鉛と見られる微弱なピーク有り。
6	玄室排土中2003.12.08	馬具：組合せ辻金具脚	平面爪先形の金具で裏面に鉄脚が付属。表面腐蝕層が剥離した部分より緑青や金が見える。	○	△		
7	玄室排土中2003.12.08	馬具：方形帯金具	平面方形で対峙する二辺に責金具。表面には半球形の鉄頭を有する鉾が各角計4カ所有り。裏面に不明有機質残存。	○	△	○	責金具部分で銅が見られる程度。他は鉄のみ。
8	玄室排土中2003.12.08	馬具：帯金具片	平面方形?、先端部のみ残存。2カ所に鉄、内1カ所は鉄頭欠失。	○	△	○	地板部分は鉄のみ。鉄頭で銀、臭素を検出。
9	玄室排土中2003.12.08	馬具：帯金具片	平面方形?、先端部が欠失。2カ所に鉄、他1カ所鉄らしき痕跡有り。	○	△	○	鉄頭一カ所と地板部分でわずかな銅らしきピークがでる程度。
10	玄室排土中2003.12.08	不明鉄器	平面形は先の丸い鎌状。	○			
11	玄室排土中2003.12.08	馬具：責金具片	鉄さびとは異なる平滑な黒色層が見える。斜めの刻み目有り。	○	△		
12	玄室排土中2003.12.08	馬具?：不明鉄器	鉄痕が2カ所有り。内1カ所は鉄頭欠失。裏面に木質と見られる有機物有り。	○	△		
13	玄室排土中2003.12.08	不明鉄器	微小な棒状鉄片。	○	△		
14	玄室排土中2003.12.08	鉄片一括	三角鎌刀部、頭部の破片。	○			
15	玄室排土中2003.12.08	不明鉄片一括	薄板状の不定形鉄片数点。	○			
16	石室内覆土中2004.08.11	馬具：組合せ辻金具脚	平面五角形の金具で裏面に鉄脚が付属。表面腐蝕層が剥離した部分からは黒色の平滑な面が見える。裏面に不明有機質残存。	○	△	○	表面では銅が明瞭に出る部分や他に金、水銀が検出される部分もあり。微弱な亜鉛のピークが出る部分もある。
17	石室内覆土中2004.08.11	帯金具片?	板状のものが2層になって錆着。構造の詳細は不明。	○	△		
18	石室内覆土中2004.08.11	馬具：帯金具片	平面方形の小型帯金具。表面には半球形の鉄頭を有する鉾が各角計4カ所中3カ所残存。加飾は認められない。	○	△	○	一カ所の鉄頭で銀が見られるが他は鉄のみ。
19	石室内覆土中2004.08.11	馬具：帯金具片	平面方形の小型帯金具。一边に責金具残存。表面には各角4カ所に半球形鉄有り。加飾は認められない。裏面に不明有機質。	○	△	○	鉄頭二カ所と責金具上で銅、銀が検出される。地板では鉄のみ。
20	石室内覆土中2004.08.11	帯金具片?	幅1cm程の板状品。鉄痕らしき窪みがあるが欠損部も多く詳細不明。加飾は認められない。	○	△	○	主要な元素は鉄のみ。
21	石室内覆土中2004.08.11	帯金具片	刻み目のある?責金具の一部と半球形鉄1カ所の破片。	○	△	○	責金具、鉄頭とも基本的に鉄のみ。鉄頭で亜鉛らしきピークが微弱に現れるが原因不明。
22	石室内覆土中2004.08.11	責金具片	責金具の破片。加飾痕不明。	○	△	○	裏側部分で銀が検出されている。
23	石室内覆土中2004.08.11	馬具：鞍飾金具片?	幅6mm程の帯状鉄板に鉾が打たれている。現状で加飾は認められない。	○	△	○	地板では鉄のみ、鉄頭では銀が検出される。
24	石室内覆土中2004.08.11	馬具：鞍飾金具片?	幅6mm程の帯状鉄板に鉾が打たれている。現状で加飾は認められない。	○	△	○	地板では鉄のみ、鉄頭では銀が検出される。
25	石室内覆土中2004.08.11	馬具?：不明帯状鉄器	幅2.5cm、厚さ1mm程で、片辺のみ若干折り返す。表には鉄、裏には木質が残存。	○	△	○	銅らしき微弱なピークもあるが基本的に鉄のみ。
26	石室内覆土中2004.08.11	馬具?：不明帯状鉄器	幅1cm、厚さ1mm程で、片辺のみ若干折り返す。表には鉄、裏には木質が残存。	○	△	○	銅らしき微弱なピークもあるが表層が剥離した箇所では現れない。基本的に鉄のみ。亜鉛も検出されるが原因不明。
27	石室内覆土中2004.08.11	馬具?：不明帯状鉄器	全周破損した1mm程の鉄板。1カ所鉾があり表層腐食層の下には銀色の鉄が見える。25~27の類品か。	○	△	○	鉄頭では銀、臭素が検出される。地板は鉄のみ。
28	石室内覆土中2004.08.11	馬具?：不明帯状鉄器	一边のみ若干残存した1mm程の鉄板。鉾が1カ所残存。25~27の類品か。	○	△	○	銅のKα線部分に微弱なピークが出る部分もあるが基本的に鉄のみ。
29	石室内覆土中2004.08.11	刀装具?	幅1.4cm程の鉄板で若干カーブしている。裏面に木質が残存。	○	△		木質には広葉樹環孔材と考えられる整然と並ぶ導管が認められる。
30	石室内覆土中2004.08.11	鉄具碎片?	径6mm程の鉄棒を曲げ加工している。	○			
31	石室内覆土中2004.08.11	不明部材	径6mm程の鉄棒のごく一部が残ったものか。	○			
32	石室内覆土中2004.08.11	不明品一括	木質と見られる有機質残存。	○	△		
33	石室内覆土中2004.08.11	鉄片一括	頭部、茎の破片。	○	△		
34	石室内覆土中2004.08.11	不明鉄片一括	不定形微小鉄片		△		
35	石室内B区センターポイント付近2003.10.07	青銅鏡片	片面には不明繊維質、平織りの布、顔料が、反対面には蠅の蛹痕と見られる付着物有り。	○	○	○	銅、錫、鉛を基本としてヒ素、銀、アンチモンの微小ピークが見られる。顔料部分では水銀が検出される。
36	石室内B区銅破片2003.10.08	青銅鏡片	片面には不明繊維質、平織りの布、反対面には蠅の蛹痕と見られる付着物有り。	○	○		
37	石室内A区A 2003.11.12	刀子	茎に部分的に黒変した灰色の柄が残存。鹿角か。	△	△		
38	石室内A区B 2003.11.12	不明鉄片	何かの剥離片と見られる。				
39	4T拡張部2003.12.05	不明鉄器	ブロック状に腐食。厚さ2~3mm程の板状。	△			
40	3T上層2003.09.26	不明鉄器	中央が頭載円錐形	△			

△は観察のみで記録は残していない

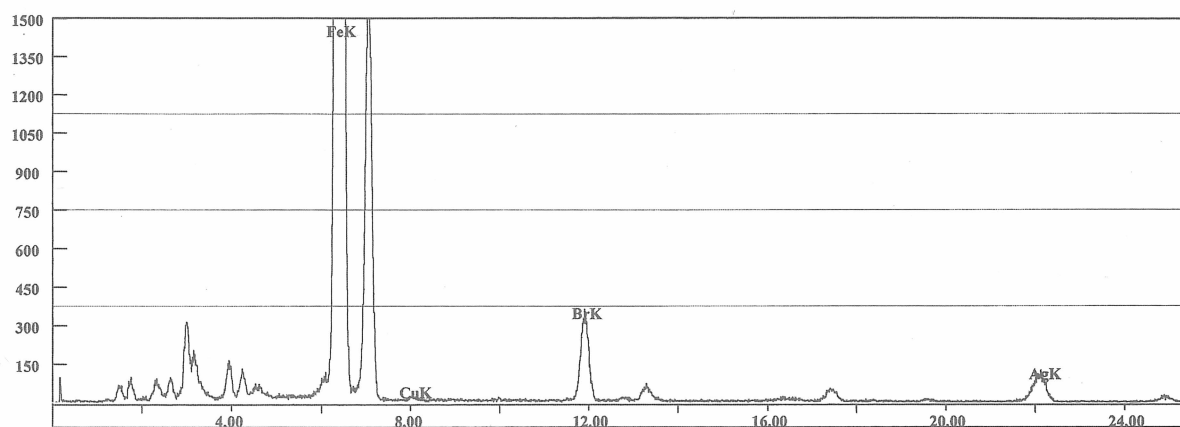
事前調査対象資料一覧



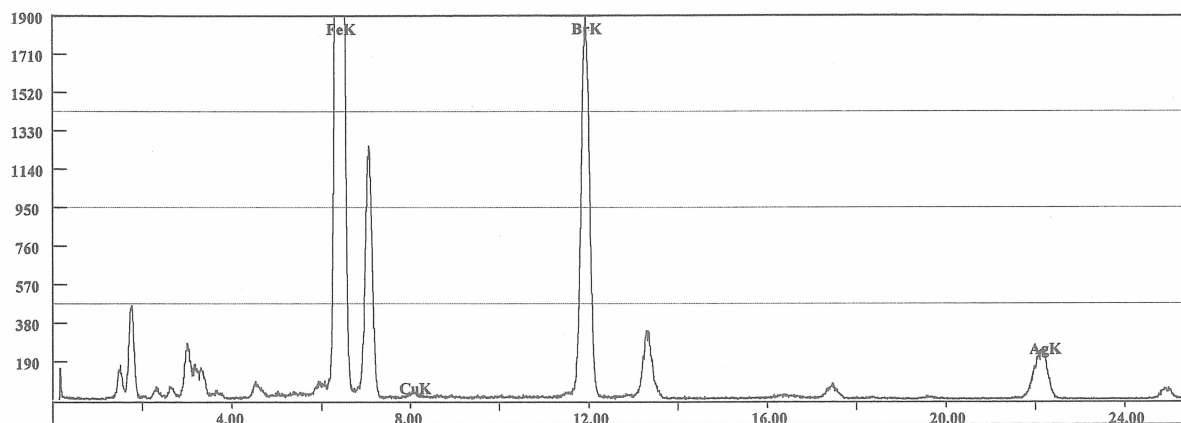
NO.1 金銅装吊金具 鍍金部分



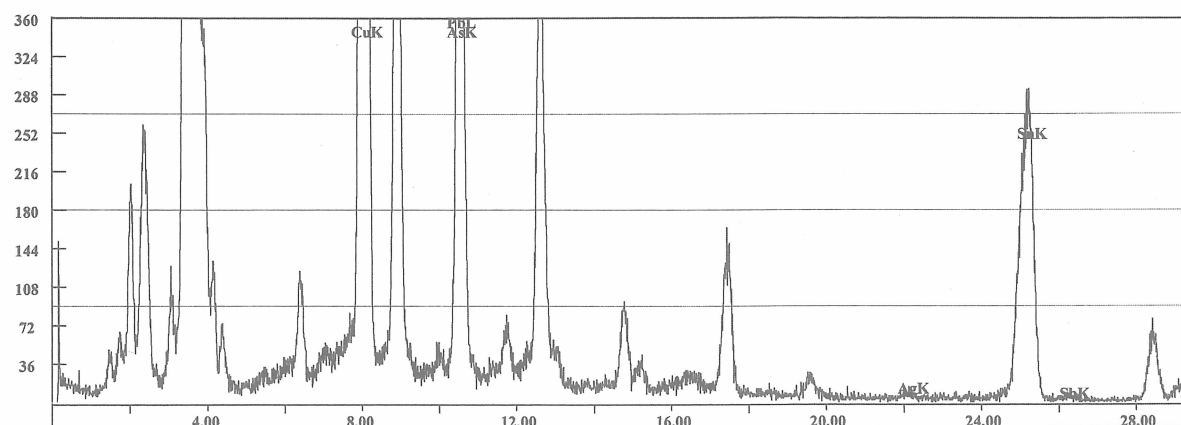
NO.16 帶金具 表面



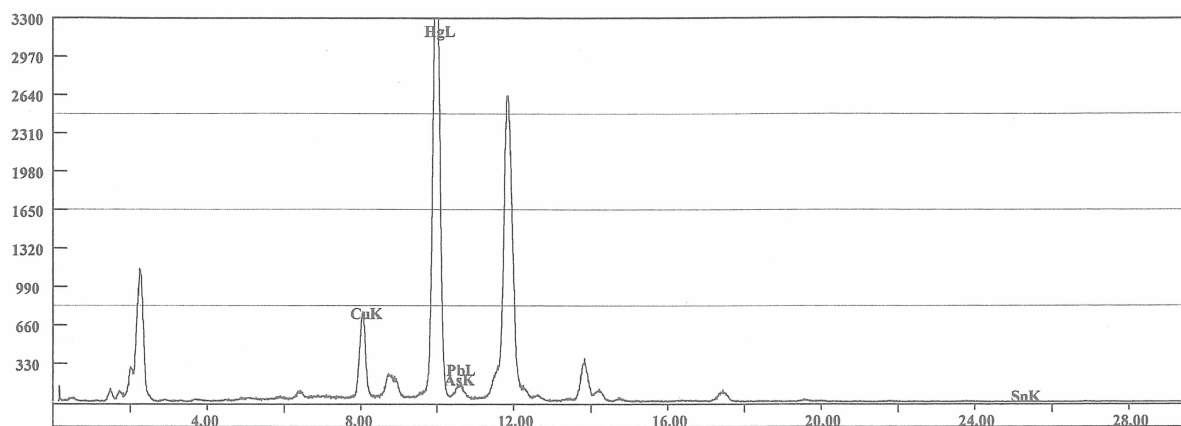
NO.19 帶金具 銀頭
蛍光X線分析結果-①



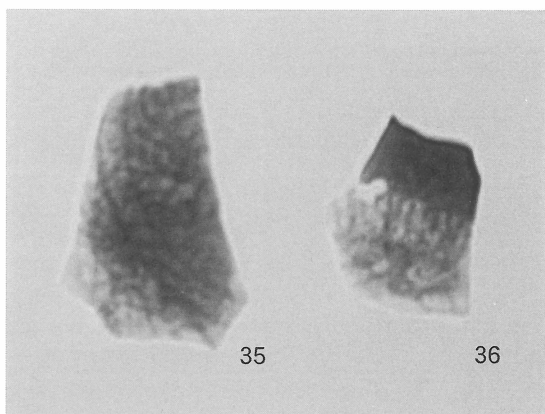
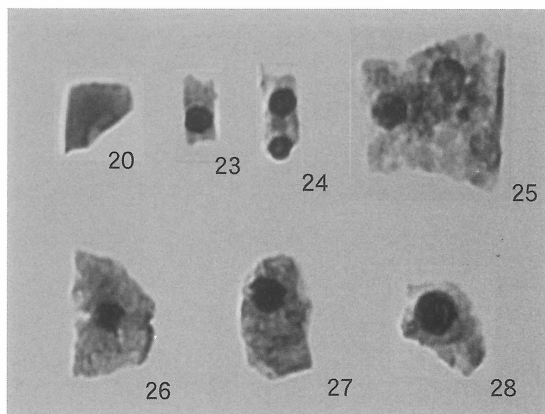
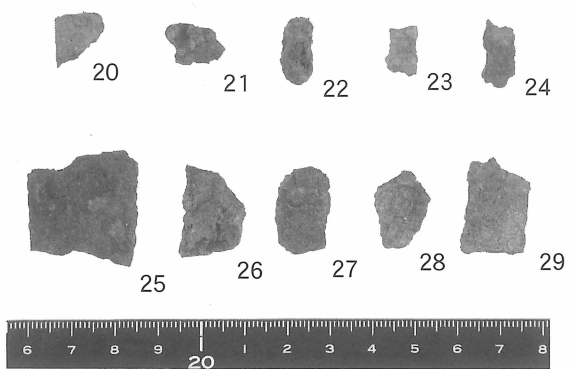
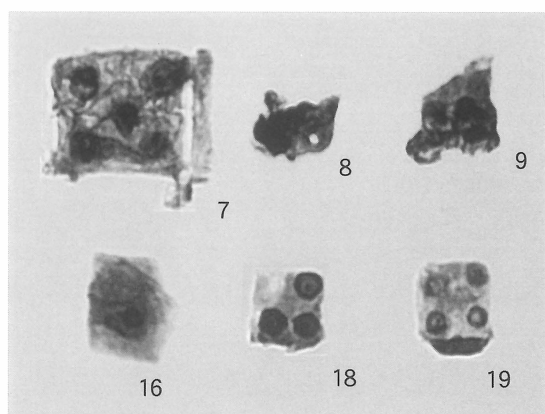
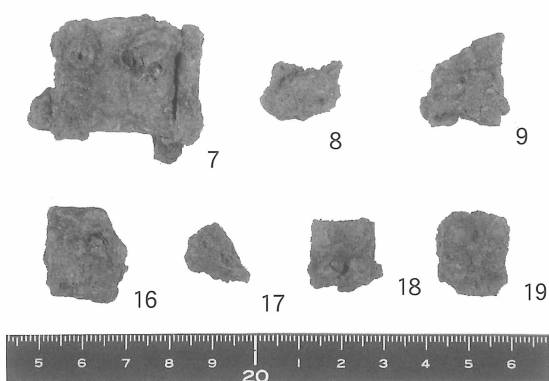
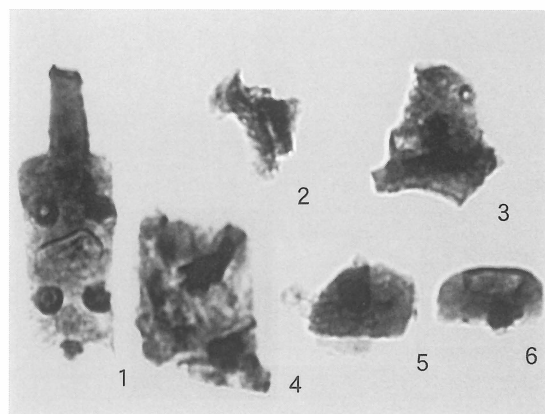
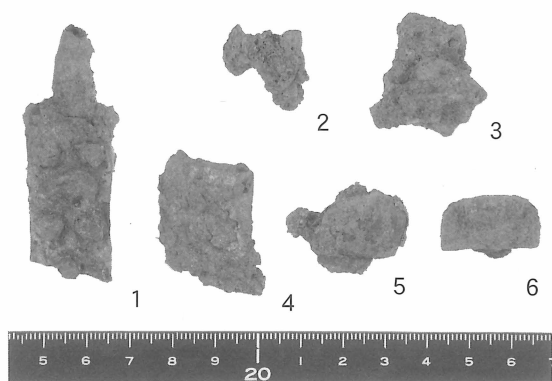
NO.23 不明縁金具鉋頭



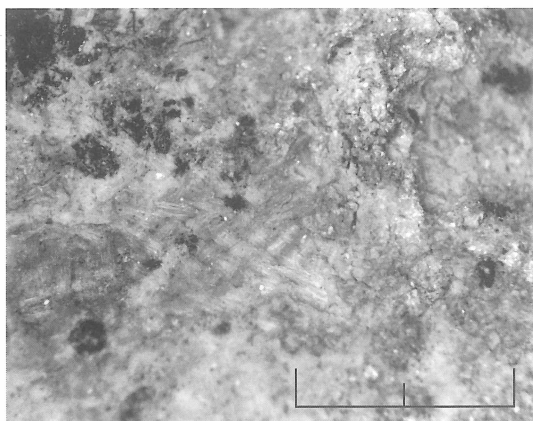
NO.35 鏡片本体



NO.35 鏡片附着赤色顔料
蛍光 X 線分析結果-②



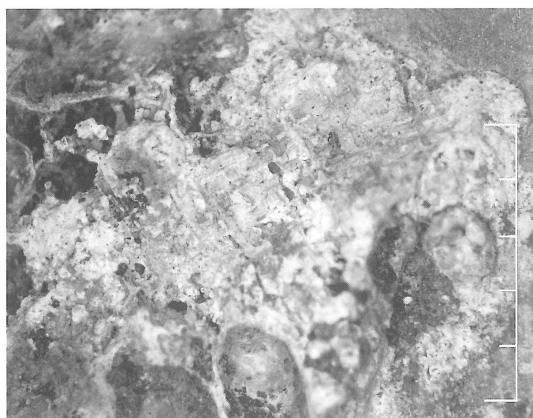
主要資料の外観（左）と透過X線像（右）



1. 布



2. 布



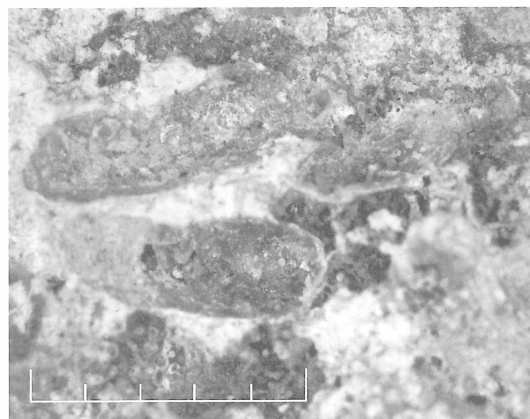
3. 布



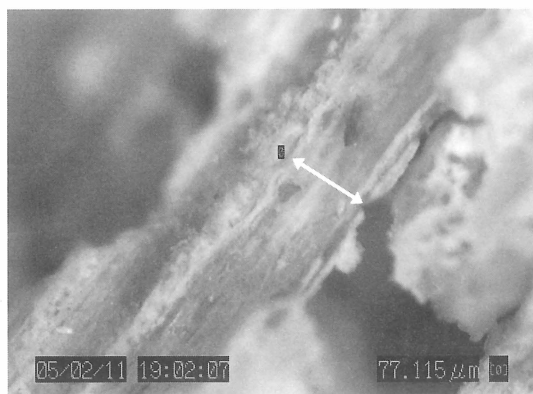
4. 布



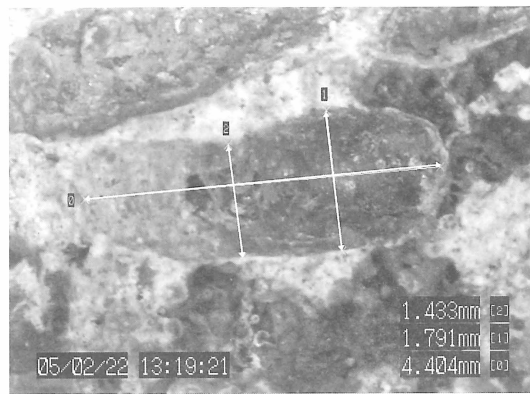
5. 毛髪?



6. ハ工蛹



7. 毛髪?



8. ハ工蛹

Ⅵ まとめ

鶴見山古墳は、八女市の北端部を東西に貫く通称「八女丘陵」にあり、標高64m～65.5mの洪積台地上に所在する。八女丘陵上にある大型の古代墳墓であるとの認識は江戸時代以前にはあったものと思われ、その証左として福島城修築に係る大規模な石抜き的事实があったのだろう。

その立地から筑紫君「磐井」との関連が強く考えられ、地域を代表する大型前方後円墳であるが、その調査歴は意外に新しく、昭和42年に八女山門社会研究会が当該古墳の概観を機関誌「八女・山門」に報告されているのが始まりである。本格的な発掘調査は、八女市教育委員会による昭和60年の重要遺跡確認調査が最初であり、今回は2度目の調査となる。

本項では、これまでに明らかになった点、及び、本古墳の時期的な位置付けについて若干ふれさせていただき、稚拙なまとめとしたい。

(1) 鶴見山古墳の天井石について

江戸時代初期、田中吉政による福島城修築の際、当古墳の玄室天井石が石垣等の構築の為石抜きされている事については第三章の3で記述したとおりである。しかし、当時この石材搬出の任に当たった作業従事者は、後円部盛土を大掛かりに除去し強制的に石材を搬出したものの2枚の天井石は予想外の規模と重さがあり、鶴見山古墳の後円部から南に約100m地点まで移動した後、当地で作業中断・放棄したものと推測される。

それから約370年後の昭和44年、戦没者遺族会の依頼により、当該石材及び土地所有者であった馬場紘一氏（八女市文化財専門委員会委員）はこの2枚の石材の寄贈を快諾され、現在当石材は八女市大字本町569番地の1に所在する八女公園内に「慰霊碑」（裏面：昭和44年8月建立）として建立されている。

「慰霊碑」は碑文が陰刻された上石と、その台石となる下石の二石で構成されている。（下石下部にはこれら二石の花崗岩製台座がある）詳細な計測は未実施であるが、概測値は以下のとおりである。

		長辺	短辺	厚さ	
上	石（緑色片岩製）：	358	217	78	
下	石（緑色片岩製）：	350	213	56	（単位：cm）



「慰霊碑」表面全景（北より）



「慰霊碑」裏面（南より）

上下両石の長辺を奥壁平行としパラレルに位置させると、玄室床面の平面プランを基準とし、長軸方向に+40cm、短軸方向に+20cm～+50cmとなり、玄室全体を覆い被す事が可能となる。また、二石とも厚さを除きほぼ同規模に整えられている事から、当該古墳の天井石に用いられていた石材である蓋然性は極めて高く、今後天井石を復元する機会あれば、良好な資料となろう。

(附記)

発掘調査中、羨道部又は前室部にあたる箇所天井石が存在しない事が判明した。石抜きが行われた際、玄室天井石は諸事の理由から搬出を断念したようであるが、上述部分の天井石については搬出された可能性が高い。未調査の為、規模・形状についての詳細は全く不明である。

(2) 周溝内出土の須恵器について

須恵器は4T・7T・8Ta、つまり南側造出し部分から集中して出土した。甕・壺・器台等がある。大型の甕であり個体数は少ない。口縁部は中位からラップ状に大きく外反するものと、頸部より直線気味に外方に延びるものの2種類があり、口縁部上位の凸線にはシャープさが残る。いずれも口唇部は丸くおさめている。壺は大型品と小型の有蓋壺がある。大型壺の口縁部は斜め上方に開き、外反度は低い。口唇部は丸くおさめるが、直下のつまみ出しは丁寧なつくりを成す。有蓋壺は口縁・胴部のみで脚部の有無については不明。器台は3個体以上あり、個体数としては最も多い。脚部は、坏部との境から直線的に外方に開くものと、一度僅かに内湾した後ゆっくり延びるものがある。波状文帯を区画する凹線にはシャープさが残る。脚端部の破片資料中には、端部外面に波状文を施文するものが1点だけ含まれる。

以上、簡単に概観してみたが、周溝内、特に造出し付近からの出土が圧倒的に多く、主体部の調査では須恵器が1点も出土しなかった事もあり、初葬・追葬時のいずれの所産か判断し難い。ただ、状況的には坏類が見当たらないなど古相を示し、個体間に極端な時期差が認められない事から初葬時の可能性が強く、古墳築造時の葬送儀礼に伴い造出し部分に立ち並べられたものと理解したい。

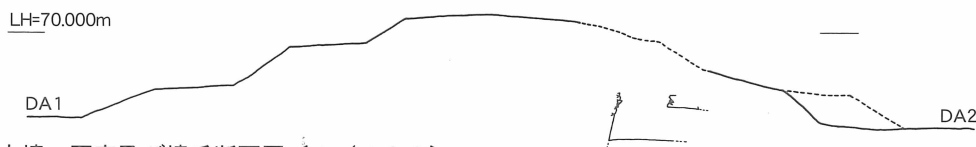
次にこれらの編年の位置付けであるが、出土資料に限りがあり、全体像が判明するものが極めて少ない為、やや判断に苦しむ。前述した口唇部の丸みや、一部波状文の施文の荒さが気にかかるものの、概して器台や甕の凹凸線はシャープであり、有蓋壺口縁部の立ち上がりの高さや安定感のある受部の形態から、小田編年のⅢA期(田辺編年TK10)に資料の大半が該当するものと考えられる。古式な様相を遺存する77の器台脚端部もこれを追認する。

(3) 鶴見山古墳について(総括)

主軸方向をN-82°-Wにとる3段築成(前方部は2段の可能性有り)の前方後円墳である。周溝は一重の盾形周溝で、墳丘南側くびれ部には東西13.0m、南北6.5m(最大値)の造出しが付設される。周溝内には20cm～30cm大の転石が散見されることから葺石の存在が推測出来るが、概してその実数は少なく、やや疑問も残る。第Ⅲ章での結果に基づく墳丘規模については、以下のとおりである。

全長	103.5m+α (周堤含まず)	墳丘長	87.5m+α (石敷含まず)
後円部径	46.0m	後円部高	7.5m
前方部長	47.0m	前方部幅	59.0m±α
		前方部高	6.6m

主体部は後円部中央から南南西に位置し、主軸の直交軸より僅かにくびれ方向を向き開口する横穴式石室(単室・複室は不明)である。玄室奥壁まで約6mを測り、中心部から大きく位置をずらしている。規模等の詳細については第Ⅲ章の3で述べているので、ここでは割愛させていただく。



第37図 鶴見山古墳 石室及び墳丘断面図〔1/400〕

本古墳の石室構築手法を観察する上で、非常に参考となる古墳として福岡市所在の東光寺剣塚が挙げられる。東光寺剣塚の玄室平面プランは羽子板型を呈し、大型の腰石を3壁に配し、上部は割石積みを行い壁面を構成するなど共通点が多い。鶴見山古墳の前室部や羨道部に関しては不明な点が多いが、少なくとも玄門石より羨道部側は巨大な腰石を用いず、横幅40cm～50cmの割石をやや雑然と積み上げている。剣塚古墳は明瞭な複室構造であるが、玄門石から羨道部に至る部分は鶴見山古墳と同様に割石を積み上げている。

明確に異なる点は、①剣塚の割石の規模がやや大きく、積み方が精美である事。②剣塚には玄室四隅に力石的な石材が見られない。③内部主体に石屋形をもつ。④鶴見山古墳は玄室天井石が推定大型石材2枚に対し剣塚では大小石材4枚が用いられる。⑤側壁の一部に溝状の掘込み「刻線」がある、等があげられる。

③に関連する事案として屍床配置があるが、鶴見山古墳はやや特殊な配置を成している。状況については先述しているので割愛するが、平面プランも含め佐賀県佐賀市久保泉町所在の関行丸古墳が同様の配置を成す。関行丸古墳は5世紀末頃の築造との報告が有り、ただちに直結する訳にはいかないが、類似する石室として注意したい。

⑤に関連したものとして福岡県桂川町に所在する国の特別史跡「王塚古墳」との対比を考えてみた。王塚古墳の玄室左側壁の装飾構成は奥壁側・縦列方向の連続三角文、玄門側・横列方向の盾（盾内盾）群の2つに大きく分割でき、一部にはこの分割を白色平行線で「区分け」する部分も見られる。王塚古墳の場合、玄室中央に程近い灯明台石付近で横方向の平行線が止まり以降は連続せず、灯明台石を境として形象図文が主体となり横方向に図文が並ぶ部分と、縦列の幾何学文様が主体となる部分の存在が垣間見られる。幾何学文様が主体となる部分には内部主体である石屋形があり、内部主体がある部分と、そうではない部分には「区分すべき」明確な決まりが存在していた可能性も考えられる。鶴見山古墳の左側壁を見ると、玄室中央付近、つまり第1屍床より20cm手前から明瞭な縦の掘込みが入る。これを境とし、玄門側には横方向の掘込みだけで構成される「横方向を強く意識した」部分があり、奥壁側には縦方向の掘込みだけの「縦方向を強く意識した」部分が存在している。3本ある縦の刻線の内、中央の刻線は第1屍床・第2屍床の境にある溝の延長線上に合致しており、この現象は、「縦の部分」が内部主体を強く意識している事を示しているものと考えたい。また、右側壁にはなんら明確な区分が存在しないのは、ここが「区分が不明確な部分」であったものと考えたい。これは先述の王塚古墳右側壁にも相通ずる部分があると思われ、左側壁では明確に区分されていた図文が、右側壁では韃の一部が内部主体側に描かれており、区分がやや不明確となっている。これは右側壁全体が明確な区分を持たされていない1つの証と考えたい。

筆者の浅学さがもたらす机上の空論であろうか。類例を待ちつつ、深い御批判・御叱責を賜りたい。

出土遺物は、周溝内から須恵器、埴輪、凝灰岩破片があり、石室内からは銅製品破片、鉄地金銅張の馬具、埴輪破片があった。埴輪は朝顔形・円筒形、形象（馬又は猪）がある。朝顔・円筒埴輪の最下段突帯には押圧技法を用いているものが多く見られ、出土総数の約8割近くを占めている。その多くは幅広の粘土紐を貼り付けナデ仕上げたものであるが、中には粒状の粘土塊を器面に押し付け、ヘラ状工具で上端から、指で下端から調整を行うものがある。この技法は八女市の釘崎古墳2号墳と同様であり、須恵質の埴輪も少数含まれる事とあわせて、同一の系譜が考えられる。凝灰岩破片は前方部側で集中的に出土している。特に前面端の9T・10Tで個体数が多い事や、周溝底面直上から出土し、本古墳の内部主体が石棺ではない可能性がある事から、本破片は石製表飾品の破片である事も考えられる。しかし、小破片であり形態も判断しがたく、即断は避けねばならない。今回は可能性だけ提示する。

須恵器や土師器類は7Tを中心とした造出し部周辺から多くが出土した。大半の資料は小田編年のⅢA期に該当する。資料的に限りがあり判断が困難な面も否めないが、初葬時の一群と考えられる。

石室内（玄室）からの出土遺物としては、銅鏡破片、鉄地金銅張の馬具破片、中世の所産と考えられる骨破片、青磁碗、がある。馬具破片は玄室内覆土を篩にかけ検出したものである。銅鏡破片は第一屍床の玄室中央寄りの床面直上で検出した。破片化している事もあり、原位置は維持していないと思われる。自然科学分析結果については第V章を参照されたい。

ここまでの調査結果を踏まえた上で、本古墳の築造時期を考えてみたい。

出土須恵器は概ね小田編年ⅢA期、田辺編年のTK-10を示しており、実年代で示すと6世紀中頃となる。墳丘規模や石室構造に類似点が多く見い出される東光寺剣塚の初葬時期とも符合し、矛盾はない。

しかし、今回の調査では筆者の浅学さが災いし、地理的にも、また、築造時期も近似した関係にある乗場古墳（八女市）、善蔵塚古墳（広川町）の大型前方後円墳との間に横たわる系列的関係を把握する事が出来なかった。今後の鍵を握るのは後者の調査に拠る部分が大であると思われると同時に、本報告により鶴見山古墳を含む八女古墳群の更なる全容解明が今後進む事を期待したい。

善蔵塚古墳出土の須恵器と比較し、鶴見山古墳出土須恵器が僅かに後出する可能性を示唆しつつ、稚拙な総括としたい。

（附記） 一鶴見山古墳に用いられた石材の現地見学一

玄室内両側壁、及び、袖石上部石材の産地同定については第Ⅴ章の2で木戸道男教諭より詳細な報告を頂いている。平成17年2月中旬に筆者も産地同定が行われた地区内である福岡県黒木町に所在する「女郎岳」の北緩斜面に出向いてみた。女郎岳より矢部川を挟んだ北側には国指定の天然記念物「黒木大藤」があり、藤の花が満開になる4月下旬～5月上旬には多くの観光客で賑わいをみせるところである。

さて、その大藤を眼下に見る女郎岳の山頂付近には見事な流理構造を持った角閃石安山岩の巨石が山肌に露出している。木戸教諭の御指摘通り、巨石はその大半が矢部川に向け大きく傾斜しており、過去に幾度となく発生したであろう土石流の凄まじさを垣間見る思いであった。筆者が現地の見学に訪れた際、偶然にも地元の方とお会いする機会に恵まれ、石材について色々お話を聞かせて頂いた。巨石そのものが日常的な風景であるという事、女郎岳近辺ではこの石材が石垣や様々な用途に用いられているという事、等々の話の中に「神様が降りる石」のお話があった。現地に赴いてみると、そこには天を指すかのごとく三角形の巨石が山頂直下の尾根先端に露頭していた。しめ縄が施され、いかにも神が宿っていそうな石であった。

話は「昔（伝説の発生時期は不明）、この巨石に神様が降りてこられ、山の下に下って行かれた。」というものであったが、土石流等の自然災害によって山腹の巨石が山裾に向かって落ちてゆく様を目のあたりにしながら、様々な用途に用い得たこれら巨石に対し、人々は畏敬の念をもって接していたのだと痛感した。

鶴見山古墳を筆頭に、乗場古墳（八女市）や童男山古墳1号墳（八女市）にも同様の安山岩巨石が側壁に用いられているが、古墳築造主体者と築造に関わった石工、そして築造作業従事者達は、皆同じような念を抱きながら石材の選定をしていたのだろうか、と遠く西方に位置する八女の地を女郎岳山頂から眺めながら、古代人の英知に対し感慨を深めた見学となった。

〔参考・引用文献〕

- 八女市史（上巻） 第1編第2章第1節「地形・地質・土壌」
岩崎 光1967『八女・山門』（八女山門社会研究会）
赤崎敏男1986『鶴見山古墳』 八女市文化財調査報告書第14集
小田富士雄1969『塚ノ谷窯跡群一八女古窯跡群調査報告Ⅰ』
小田富士雄1970『中尾谷窯跡群一八女古窯跡群調査報告Ⅱ』
田辺昭三1966『陶邑古窯址群Ⅰ』 平安学園考古学クラブ
吉留秀敏1991『東光寺剣塚古墳』 福岡市埋蔵文化財調査報告書 第267集
国立歴史民俗博物館1993『装飾古墳の世界』
埋蔵文化財研究会2002『装飾古墳の展開』資料集
近藤義郎1990『前方後円墳集成 九州編』
九州前方後円墳研究会2000『九州の埴輪 その変遷と地域性』
赤崎敏男・中川寿賀子1992『釘崎古墳群』 八女市文化財調査報告書 第14集
大塚恵治2003『釘崎1号古墳・丸山古墳』 八女市文化財調査報告書 第69集
真野和夫1972「乗場古墳の調査」『立山山窯跡群一八女古窯跡群調査報告4・総集編』
佐田 茂1972『岩戸山古墳』 一環境整備事業に伴う基礎的調査の報告一 八女市教育委員会
小田富士雄・真野和夫1971「童男山古墳」『管の谷窯跡群一八女古窯跡群調査報告Ⅲ』

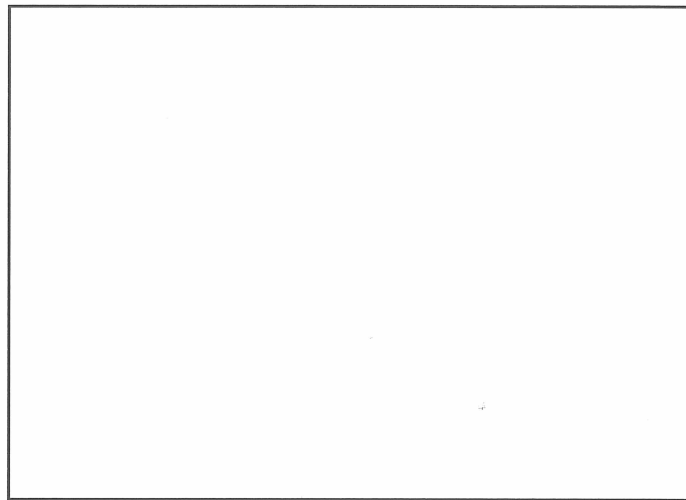
挿図	土器番号	実測番号	出土遺構	種類	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	調整(外面、内面)	色調・胎土・焼成	備考
27	1	110	6T	朝顔形埴輪		40			荒斜ハケ、荒横ハケ	暗褐色・精良・良好	
〃	2	213	6T	〃		43.6			荒縦ハケ、荒横ハケ	淡褐色・精良・良好	
〃	3	225	3T	〃		34			細縦ハケ、細横ハケ	赤褐色・精緻・良好	やや須恵質
〃	4	131	8Tb	〃					荒縦ハケ、ナデ	褐色・精緻・やや不良	
〃	5	14	4T	〃					荒縦ハケ、指押さえ後ナデ	赤褐色・精緻・良好	ヘラ記号
〃	6	125	8Tb	〃					荒縦ハケ、横ナデ	暗褐色・精緻・良好	頸部突帯下のナデ広い
〃	7	218	1T	円筒埴輪(口縁)		40.5			細縦ハケ、横ハケ後ナデ	褐色・頁岩粒多・良好	
〃	8	26	7T	〃		36			荒斜ハケ、横方向の指ナデ	赤褐色・石英粒多・良好	
〃	9	202	2T	〃		36			荒斜ハケ、指ナデ	淡黒灰色・石英粒子多・良好	[X]のヘラ記号、須恵質
〃	10	212	6T	〃		40.4			荒斜ハケ、荒横ハケ	褐色・片岩・頁岩多・良好	
〃	11	208	6T	〃		38.6			荒斜ハケ、荒横ハケ	暗灰褐色・精緻・良好	須恵質
28	12	13	1T	〃		37.4	28.4	59.9	荒縦ハケ、荒斜ハケ後横ナデ	淡黒灰色・精良・良好	内面にヘラ記号
〃	13	135	10T	〃		32.2			荒斜ハケ、荒横ハケ	暗褐色・精良・やや不良	
〃	14	127	8Tb	〃		36			荒斜ハケ、縦ハケ後ナデ	褐色・片岩・頁岩多・良好	
〃	15	221	2Ta	〃		38.8			荒斜ハケ、荒横ハケ後ナデ	褐色・精良・良好	[X]のヘラ記号
〃	16	214	6T	〃		38			荒斜ハケ、横ナデ	明褐色・精良・不良	[X]のヘラ記号
〃	17	219	6T	〃		41			荒斜・縦ハケ、荒横ハケ後ナデ	淡黄茶色・精良・やや不良	[X]のヘラ記号
29	18	11	1T	〃		39			荒縦ハケ、荒横ハケ	明褐色・良・やや不良	
〃	19	216	6T	〃		34.6			荒斜ハケ、荒横ハケ	褐色・精緻・良好	[X]のヘラ記号、須恵質
〃	20	111	6T	〃		46			荒斜ハケ、荒斜ハケ	褐色・精緻・やや不良	[↑]のヘラ記号
〃	21	32	7T	〃		40			荒縦ハケ、荒横ハケ	淡褐色・精良・良好	
〃	22	105	1T	〃		29.4			荒斜ハケ、斜ハケ後横ハケ	褐色・精良・不良	[↑]のヘラ記号、二次調整風
〃	23	109	6T	〃		30			荒斜ハケ、荒斜ハケ	淡白黄色・精良・著しく不良	[X]のヘラ記号
〃	24	226	3T	〃		24.6			荒斜ハケ、指押さえ後ナデ	黒茶灰色・精良・堅緻・良好	須恵質
〃	25	128	8Ta	〃		30			荒縦ハケ、斜指ナデ	淡褐色・良・良好	
30	26	22	7T	〃		30			荒縦ハケ、荒斜ハケ、指ナデ	明褐色・良・良好	上部より2・3段目に直交の透孔
〃	27	25	7T	〃		30.5			荒縦ハケ、指ナデ	明褐色・良・良好	
〃	28	24	7T	〃		25.4			荒縦ハケ、荒斜ハケ	明褐色・良・良好	上部より2・3段目に直交の透孔
〃	29	27	7T	〃		31.4			細縦ハケ、指押さえ後ナデ	明褐色・良・良好	
〃	30	30	7T	埴輪底部			29.2		荒縦ハケ、斜指ナデ	明褐色・良・やや不良	最下段突帯に押圧Ⅰb類
〃	31	134	8Ta	〃			30.4				最下段突帯に押圧Ⅰb類
〃	32	117	2Ta	〃			36.2		荒斜ハケ、指ナデ・斜ハケ	褐色・頁岩・石英粒多・良好	極端に厚い
〃	33	114	1T	〃			30.2		不明	淡黄茶色・精良・不良	最下段突帯が低平な半円形
〃	34	136	10T	〃			29.2		荒縦ハケ、縦指ナデ	暗灰褐色・精良・良好	最下段突帯の面精美。須恵質
31	35	121	8Ta	〃			27.2		不明	明褐色・精良・不良	最下段突帯に押圧Ⅱ類
〃	36	29	7T	〃			23.6		不明、指押さえ後ナデ	明褐色・石英大粒有・不良	M字突帯風
〃	37	115	玄室内	〃			25		指ナデ後荒縦ハケ、荒縦ハケ	黄褐色・精緻・良好	須恵質
〃	38	12	6T	〃			26		荒縦ハケ、荒斜ハケ	褐色・精緻・良好	最下段突帯に押圧Ⅱ類
〃	39	103	1T	〃			25.4		不明	赤褐色・良・不良	最下段突帯に押圧Ⅱ類
〃	40	104	1T	〃			24.2		不明	淡黄茶色・良・著しく不良	最下段突帯に押圧Ⅰb類
〃	41	215	6T	〃			26		荒縦ハケ、荒斜ハケ	薄黒灰色・精緻・良好	最下段突帯に押圧Ⅰ類、須恵質
〃	42	120	8Ta	〃			22		細縦ハケ、不明	暗茶褐色・精良・良好	
〃	43	116	玄室内	〃			22.6		荒縦ハケ、荒斜ハケ	淡黄褐色・精緻・やや不良	最下段突帯に押圧Ⅰb類
〃	44	18	7T	〃			21.8		細縦ハケ、指押さえ後ナデ	明褐色・精良・やや不良	押圧Ⅱ類(10cm長の帯状粘土貼)
〃	45	19	7T	〃					コテ当て風のハケ、ナデ	明褐色・精良・良好	最下段突帯に押圧Ⅰb類
〃	46	31	7T	〃			22		細縦ハケ、斜指ナデ	明褐色・石英・片岩多・やや不良	最下段突帯に押圧Ⅰ類
〃	47	119	8Ta	〃			24		細斜ハケ、細斜ハケ	褐色・精緻・良好	
〃	48	209	6T	〃			22.4		荒斜ハケ、荒縦ハケ後斜ハケ	淡黄褐色・良・やや不良	最下段突帯に押圧Ⅰb類
〃	49	211	6T	〃			20.8		荒縦ハケ、荒横ハケ	淡褐色・石英・片岩多・やや不良	透孔大きい
〃	50	124	8Tb	〃			18.2		不明	明褐色・精緻・不良	
〃	51	132	8Tb	〃			17.6		荒斜ハケ、荒縦ハケ後ナデ	淡黒灰色・精緻・良好	押圧Ⅱ類、須恵質
32	52	5	玄室内	形象埴輪	動物・足				縦ハケ一部面取り、ナデ	淡黄褐色・精緻・やや不良	
〃	53	10	〃	〃	〃				荒縦ハケ、ナデ	淡黄褐色・精緻・良好	
〃	54	9	〃	〃	〃				ヘラ削りの面取り、ナデ?	淡茶褐色・精良・良好	前足?
〃	55	15	4T	〃	人物・腕				不明	淡茶色・良・良好	肩～上腕、竹管文

挿図	土器番号	実測番号	出土遺構	種類	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	調整 (外面、内面)	色調、胎土、焼成	備 考
32	56	223	3T	形象埴輪	人物?				不明、ナデ?	淡褐色・精良・良好	竹管文
〃	57	16	4T	〃	人物・腕				不明、ナデ	淡褐色・精緻・良好	竹管文
〃	58	20	7T	〃	人物?				ナデ、ナデ	褐色・精緻・良好	竹管文
〃	59	206	2Ta	〃台座?					縦ハケ、ナデ	褐色・頁岩粒多・良好	「N」のヘラ記号
〃	60	107	6T	〃					ナデ?	褐色・精良・良好	方形刺突痕
〃	61	122	8Ta	〃	盾?				不明	淡黄褐色・精良・やや不良	有軸羽状文
〃	62	205	2T	〃	〃				不明	淡黄褐色・精良・やや不良	有軸羽状文
〃	63	21	7T	〃					荒ハケ、ナデ	暗褐色・良・良好	
〃	64	224	3T	〃					ナデ、ナデ	淡褐色・精緻・良好	深い刻線
〃	65	4	玄室内	〃					ナデ、不明	明黄茶色・精良・良好	
〃	66	1	〃	須恵器?	坏蓋				不明	暗赤褐色・精緻・不良	赤焼け?
〃	67	17	7T	土師器	長頸壺				ヘラ削り、ハケ後ナデ	暗褐色・精緻・良好	口縁内面にミガキ?
33	68	232	7T	須恵器	大甕	54			回転ナデ、回転ナデ	淡黒灰色・精良・良好	上段波状文中央のナデ消し
〃	69	141	4T	〃	〃	58.6			〃 〃	暗灰色・頁岩粒子多い・良好	
〃	70	233	7T	〃	〃				カキ目・格子目叩、青海波叩	暗青灰色・精良・良好	頸部破片
〃	71	254	4T	〃	中型壺	22.8			カキ目・平行叩、ナデ・青海波叩	淡黒灰色・頁岩粒子多い・良好	
〃	72	247	7T	〃	有蓋壺	10.4			回転ナデ、回転ナデ	暗青灰色・精緻・良好	
〃	73	235	7T	〃	〃				回転ナデ、回転ナデ	暗青灰色・精緻・良好	胴部中央に連続刺突文
〃	74	34	7T	〃	器台脚				ナデ、ナデ	淡黒灰色・精緻・良好	
〃	75	238	7T	〃	〃	18			ナデ、ナデ	暗白灰色・精緻・良好	
〃	76	242	7T	〃	〃	20			回転ナデ後カキ目、回転ナデ	暗青灰色・精緻・良好	脚端までカキ目
〃	77	240	7T	〃	〃				回転ナデ、回転ナデ	淡青灰色・やや粒子多い・良好	脚端まで波状文
〃	78	241	7T	〃	〃				ナデ?、ナデ	淡黒灰色・精緻・良好	円柱形の長脚タイプ
〃	79	35	7T	〃	器台				ナデ・タタキ・カキ目、ナデ	青灰色・精緻・良好	深い坏部
〃	80	255	7T	〃	〃				カキ目・ナデ、回転ナデ	濃暗灰色・精緻・良好	坏部内底面にタタキ遺存
〃	81	33	7T	〃	器台脚				ナデ、回転ナデ	濃暗灰色・精緻・良好	
〃	82	252	7T	〃	〃				ナデ、回転ナデ	暗灰色・粒子やや多い・良好	外面一部に自然釉
〃	83	244	7T	〃	〃				カキ目→ナデ、回転ナデ	暗灰色・精緻・良好	
〃	84	250	7T	〃	提瓶		15.2		ヘラ削り後ナデ、ナデ	黒灰色・堅緻・良好	底部～体部境は不明瞭
〃	85	140	4T	〃	高坏脚	8			回転ナデ、不明	白灰色・精緻・不良	脚端はシャープ
34	86	229	4T	〃	甕				格子目タタキ、青海波ナデ消し	青灰色・やや粒子含む・良好	頸部付近破片
〃	87	130	8Ta	〃	〃				格子目タタキ、青海波ナデ消し	濃青灰色・やや粒子含む・良好	〃
〃	88	246	7T	〃	〃				格子目タタキ、青海波	暗灰色・精緻・不良	同心円の直径約9cm
〃	89	245	7T	〃	〃				平行タタキ、青海波	白灰色・黒色粒子多い・良好	内面に黒色粒子(斑)顯著
〃	90	231	4T	〃	〃				格子目タタキ、青海波ナデ消し	暗青灰色・頁岩粒子多い・良好	
〃	91	230	4T	〃	〃				格子目タタキ、青海波ナデ消し	暗青灰色・精緻・良好	同心円の直径約4.5cm
〃	92	129	8Ta	〃	〃				格子目タタキ、青海波ナデ消し	暗青灰色・粒子多い・良好	同心円の直径約5.5cm
35	93	2	玄室内	弥生式土器	壺	13.4			不明	褐色・粒子多く荒い・良好	
〃	94	3	玄室内	〃	甕	22			ナデ、不明	淡黄茶色・雲母片岩粒・不良	
〃	95	222	3T	土師器	坏		7		不明	茶褐色・精良・良好	底部ヘラ切り
〃	96	133	8Ta	瓦器	椀	16			不明	黒灰色・精良・良好	
〃	97	137	玄室内	青磁	椀	15.8	5.1	6.5	黄緑色釉かかる	黄緑色・黒粒少量・良好	1/3遺存・量付施釉後カキ取り
〃	98	118	玄室内	〃	〃	16			黄緑色釉かかる	黄緑色・黒粒少量・良好	
〃	99	106	5T	白磁	椀	16			体部中位まで施釉	淡白灰色・精緻・白色・良好	玉縁口縁
〃	100	253	7T	〃	〃	17.8				淡緑灰色・精緻・白色・良好	〃
〃	101	207	2T	〃	〃		6		体部下半まで施釉・高台無釉	白灰色・黒色粒子含む・良好	内底面蛇の目釉剥ぎ
〃	102	138	羨道?	染付	小皿	13.2	8	3.5	内外面施釉・外底面蛇の目釉剥ぎ	淡灰色・精緻・良好	口唇部にコバルト
〃	103	126	8Ta	鉄器							鉄鏃茎部
〃	104	112	6T	銅製品							キセル
〃	105	228	7T	石							片岩製、1465g
〃	106	220	5T	石	台石						
〃	107	227	3T	石製品	不明						粗面安山岩製、995g
36	108	256	6T	凝灰岩破片							210g
〃	109	257	9T	〃							210g
〃	110	258	10T	〃							80g

P L A T E S

凡例

出土遺物に関する P L 中央の記載は、以下の要領となっている。



1 T

(数字は、出土地点のトレンチ番号を示す。)



1. 鶴見山古墳全景（東より）



2. 鶴見山古墳全景（北東より）



3. 調査前状況（南西より）



4. 調査前状況（南より後円部望む）



5. 後円部盛土状況（玄室直上）



6. 玄室内屍床配置状況（玄室直上より）



7. 第一屍床出土銅鏡片（床面直上）



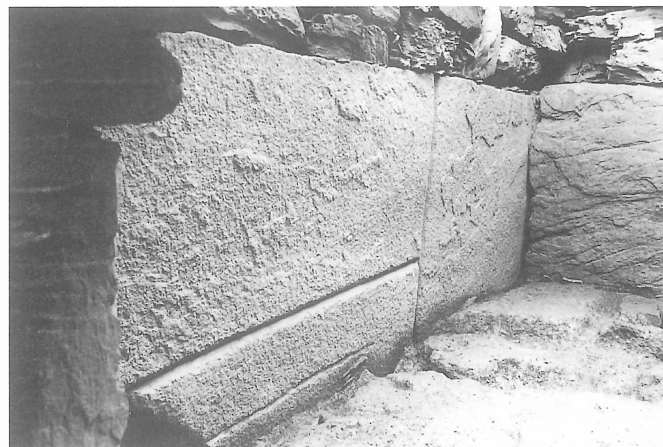
1. 玄室奥壁状況



2. 玄門部状況



3. 玄室左側壁状況（右側壁より）



4. 玄室左側壁状況（玄門部より）



5. 玄室右側壁状況（玄門部より）



6. 玄室右側壁状況（左側壁より）



7. 右袖石上部状況（玄室より）



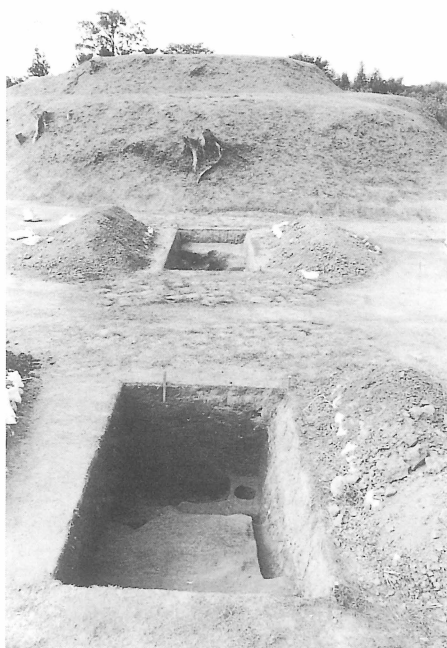
8. 左袖石上部状況（玄室より）



1. 羨道部（前室）右側壁 石積状況



2. 羨道部（前室）左側壁 石積状況



3. 2トレンチ全景（東より）



4. 2Ta全景（東より）



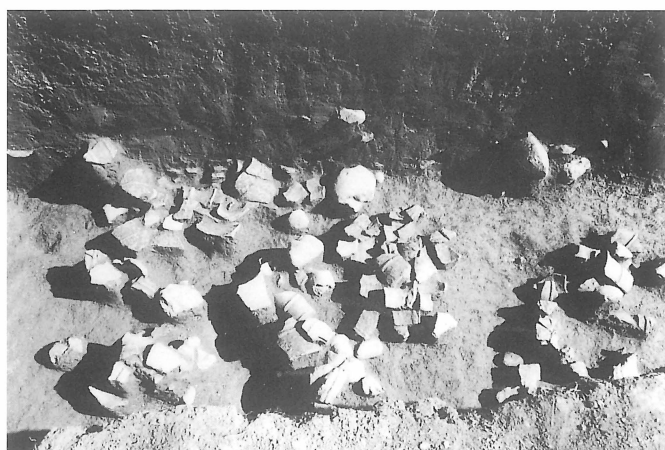
5. 3トレンチ周溝部近景（南東より）



6. 5トレンチ全景（北より）



1. 5トレンチ全景（南より）



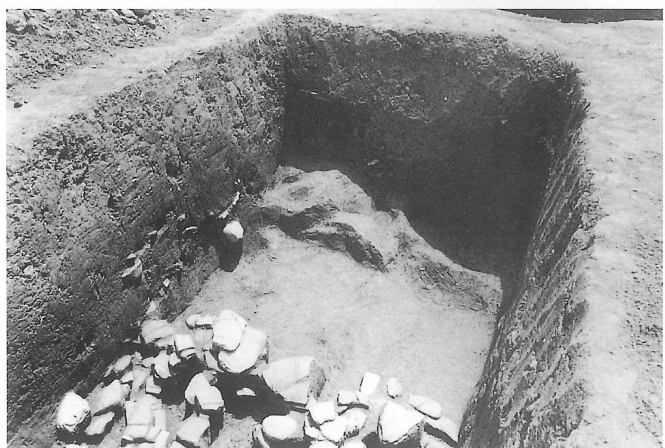
2. 6トレンチ遺物出土状況（西より）



4. 7トレンチ全景（南東より）



5. 7トレンチ 東端部造出し近景（南より）



7. 8 T b 西端部造出し近景（西より）



3. 6トレンチより前方部望む（南より）



6. 7トレンチ遺物出土状況（北より）



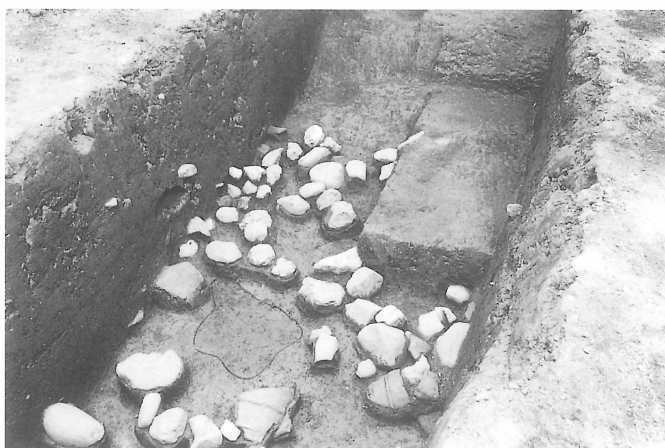
1. 8 T a 遺物出土状況（南より）



2. 9 T 石敷遺構状況（西より）



3. 10 T 石敷遺構状況（西より）



4. 10 T 石敷遺構近景（南西より）



5. 石室埋め戻し状況（四壁に土嚢を積み壁面を保護）



6. 平成15年12月 発掘現場説明会の様子（約200人が来訪された。）



6 T



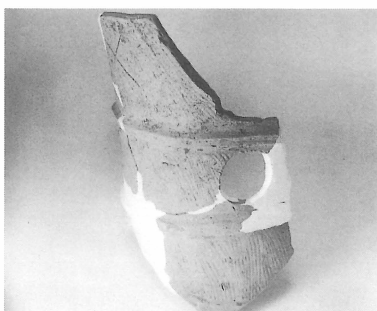
8 T b



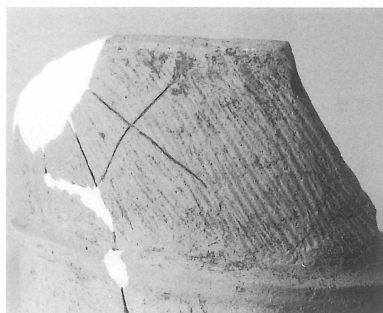
7 T



1 T



6 T



6 T



7 T



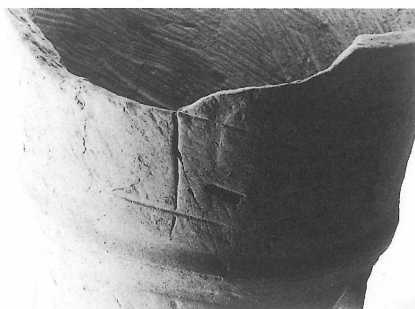
1 T



1 T



7 T



7 T



10 T



7 T



8 T b



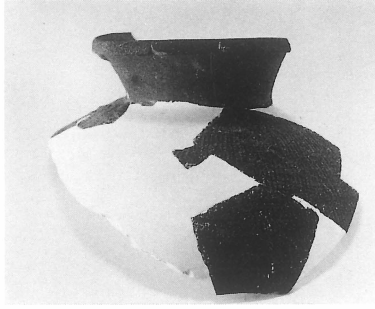
6 T



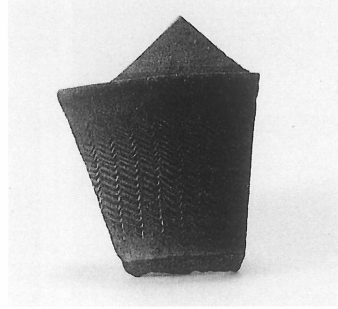
6 T



6 T



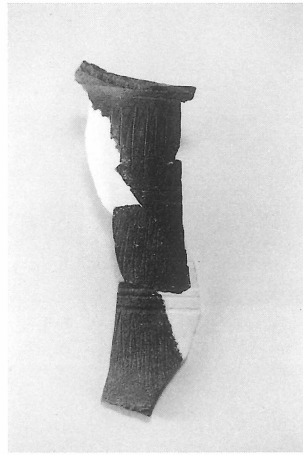
4 T



7 T



7 T



7 T



4 T



玄室内



7 T



6 T



9 T



10 T

報告書抄録

ふりがな		つるみやまこふん						
書名		鶴見山古墳 2						
福書名		福岡県八女市大字豊福所在古墳の確認調査報告書						
巻次		第2分冊						
シリーズ名		八女市文化財調査報告書						
シリーズ番号		第 72 集						
編著者名		大塚 恵 治						
編集機関		八女市教育委員会						
所在地		834-8585 福岡県八女市大字本町647 TEL 0943-23-1982						
発行年月日		西暦 2005年3月31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
つるみやまこふん 鶴見山古墳	ふくおかけん 福岡県 やめしおおあざとよぶく 八女市大字豊福 あざつるみやま 字鶴見山	402109		33°03'48"	130°34'34"	2003 05 11 ～2004 08 12	169㎡ (トレンチ部)	重要遺跡 確認調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
鶴見山古墳	古墳	古墳時代 (6世紀中頃)	古墳、ピット、溝		須恵器 埴輪 (円筒、朝顔、形象) 鉄地金銅張馬具破片 銅鏡破片		玄室左側壁の刻線 南側造出し部の検出	

鶴見山古墳 2
八女市文化財調査報告書
第 72 集

平成 17 年 3 月 31 日

発 行 八女市教育委員会
八女市大字本町 647
印 刷 (資) 東 兄 弟 印 刷 所
八女市祈祷院 563